
怪盗キッドVS手錠V S 工藤新一

ピアノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怪盗キッドVS手錠VS工藤新一

【Zマーク】

Z9164K

【作者名】

ピアノ

【あらすじ】

題名、変えさせて頂きましたー長編にするつもりです。以下は、あらすじです

キッドのお由比では、「希望の（＝呪いの）ダイアモンド」。今度の作戦も上手くいく……と思いきや、キッドのミスで大変な事態に。離れたくても離れられない状況に陥ってしまったキッドと新一の運命は・・黒の組織や、FBIも関わってきて、ラストには、蘭と新一の恋が急展開！？偶然から始まった幼なじみの恋に探偵と怪盗の

コラボ。本当に偶然なのか組織の罠か・・・？？そしてバー・ボンの正体は・・・。蘭たちの考えた計画は、新一の思惑をぶちこわす結果におわるのか・・・私の考えたコナン最終回です！！

兆し

始まりは、薄暗い部屋だった。雑音、ノイズが静かに響く中、一人の男がパソコンの光を覆うようにして何か調べているようだった。パソコンに映つてるのはなんの変哲もないダイアモンド——少し大きめで、有名になるほど珍しいわけでもない宝石店に必ずおいてありそうなものだ。5カラットで、他のものより値段がだいぶ高いこともあり買おうと思つものはない。しかし、その男は買おうとしてではない。

——あの宝石を早く捨てなければ——あの事件の証拠となってしまう重大で、危険な代物を……

彼の「じちや」じちやと散らかつた机の上には、朝の新聞や得体の知れない資料の山、飲みかけのコーヒーなどが置いてあつた。新聞をざつと読んで彼はほくそ笑んだ。そこには、キッドの事件や、被害総額そして、予告状が載つていた。

キッドの正体が分かつたぞ。まさか会つたことがある奴とはな父親の敵のつもりか？

机の上の資料にはキッドの少年時代の素顔が映つている。予告状には具体的に何を盗むとは書いていないでも彼には予測出来た。

さて、彼の名前は黒崎秀十。黒の組織の一員、そして事もあるうにキッドの父親を殺害した張本人。組織の上層部に助けを求めるようとしたが、ふと思いついてやめた。証拠が残っていたと分かればこっちの命も危ない。失敗したらと考えて冷や汗をかいたが、すぐに立ち上がり新聞を取り上げた。「キッド」の部分を切り取る。数分後、脅迫状が出来上がった。

キッドの正体が分かった。ばらされたくなければ、予告を取り消せ。

怪盗キッド——！」と快斗は、ある建物の前に来ていた。

豪華な外見なのに入つてみるとみずぼらしい。

それは、国枝楓が、経営する宝石店。

そう、快斗はいま下見に来てているところだ。

中にはいると、十七歳の快斗をとがめるように見た。
快斗は誰から見てもただ冷やかしに来ただけのように見えたからだ。
まあ実際、買わないんだけどさ——

奥のダイアモンドを見に行くと、レッテルには金色の文字で、「希望のダイアモンド」と書いてあった。

ところが、实物を見て快斗は驚いてしまった。ダイアは半分しかなかつたのだ。——まさか、オレより先に誰かが盗んだんじゃ……。
でも、何で半分？

少しすると、オーナーが満足せつに出てきて、

「ああ、それ、宝石店を開業してからずっとここに展示していく、みなさん驚きますけど、元から半分なんです。半分しかないからネットではよく似た別のものを販売するんです。たしか、これと対になるものが、ハイドパークにありましたけど……私の密かな自慢なんですよ。」

と、嬉しそうにいった。

「へえ、希望のダイアモンドねえ？」

快斗は店内を見回した。

儲かつてこむよつには見えない。

前日に調べておいたことを考へると、希望と言ひ言葉がなおりぬかしく聞こえた。

外見を見ると、宝石店を建てたときにはお金持ちだったらしい。内装がみすぼらしく経営が苦しくなったのは、たてたあとからかしばらく考え込んでいたと、見覚えのある一人が入ってきた。

「やあ、快斗くんやつぱりここにいたんですね。」

「よお、白馬。……白馬！？それに青子！何でここにいるんだ？」

かろうじて、ポーカーフェイスを保ちながらいった。

「白馬くんが快斗が絶対ここに来るって来てみたら、大当たりな よーーすごいでしょう？ところで、何でここにいるの？」（青）
白馬が！？もう、平静を保つのが難しくなってきていた。

「これ、見てみろよ、ホープダイアモンドだぜ。これを見に来た んだ。」（快）

「何がおもしろいのよ。欠陥品の割れたダイヤじゃない。でも、 あんな硬いダイヤどうやって割ったんだる。」

「そんなのオレに聞かれたって知らねえよ。先人の知恵ってやつ

じゃねえの?」

快斗が、ひそひそと言つた。

「縁起悪いから、ここのおーなーには秘密だけどさ、この宝石、呪いの宝石なんだぜ。」

青子は震え上がつた。（やんなん、嘘よね？うそうそ…嘘に決まつてるわ。）

「ルイ14世ももつてたことがあるらしい。持ち主のロシアの王子が暗殺されたりフランスの農民は自殺したり…希望のダイヤって言つけどな、みんなが希望しすぎて欲しがつて、不幸になるダイヤなんだ。」

「へえ。快斗も、そんな迷信とか信じるんだー。マジックには種があるつてこいつたのあなたじゃない。」

青子が氣丈を装つていつた。だが、内心は泣きそうで、今日の夢に出できやうな気がしている。

「酔れた、もう一つの方もあるから今度見に行くか？」

快斗は成りゆきで普通にこつたつもりだった。ところが…

「快斗のバカッ…！」

「どうしたんだよ、こきなつ。」

快斗は、由馬をこじあつせぬ。つたぐ、何で青子を連れてきたんだ
よ…

…わりげなく話を変えた。

「で…どうして…」と思つたんだ?」(快)

「快斗くんのこる場所には必ずキッドが来るようなので見張つて
たんですね。笑」(由)

「え? 岩盗キッド? ほしーの? 趣味悪いこんな怖いもの、
盗ませておけばこいじやん」(青)

由馬の奴……それに青子も…趣味悪いだと…快斗も負けずに言い返
す。

「あ、あ。」（はい）、「来るだるうな。」（快）

「は？」白馬は思わず聞き返した。

オレが、認めたと勘違いしたんだる、だナゼ甘ーー誰が認めるか！

「言葉を返すよつだけどせ、白馬の来てるところだつて、よくキッドが来るじやん。もしかして、本物のキッドはおまえだつたりして……」

「そんな分けないじやないですか！？」へへへ、向こうのポーカーフロイスもめちゃくちゃだ。

「ほらほら、うちで喧嘩はやめてくれないかい？ただでさえ、お客様が少なくて大変なんだから。」

オーナーが慌てて駆け寄ってきて、追い出せりとした。

お客が少ない宝石店、この辺にはしないんじゃないんじやないのか？快斗が不思議に思いながらも、店を出た。

もしかして、あの宝石が買われないよつに父さんを手にかけた奴らが、客を阻止しているとか？

災難ばかり起じてゐるのを見ると本当に呪いのダイヤらしいな…

「そういうえば、キッドの予告状何を盗むか、よく分からなかつたね。だって、赤いブルーダイヤを頂くつて、赤か青かどっちかにしてよね？」（青）

「それならわかってる、あの宝石のことだよ。ホープダイヤは青いダイヤだけど赤い燐光を放つんだ。ホームズの本にも「青い紅玉」っていう、題名のが有るぜ。おまえの親父にいっとけよ。」（快）

「う、うん！ ありがとう快斗！」（青）

青子が急いで帰つていった。

それを複雑な気持ちで見る快斗。

喜んでいいのか、悲しんでいいのか。アイツが、嫌つてるのもオレで、感謝してるのもオレなんだよね…

「よく知ってるんですね」

じとつとした声が聞こえ、快斗もギクッとなつた。じつがまだいたんだった。

「だつて、どこつてたのか、わかんないダイヤがあつたら見に来るだろ?」（快）

「どうして、わかつたんでしょうね? オーナーも知らないのに」

「そ、それはマジシャンの勘だよ。」

「…まあ、それは良いんですけど、紅子さんから伝言がありましたよ。「いつもより丈夫で大きな羽にしておきなさい」と。なんのことかは分かりませんけど。」

「羽?」

「心当たりないんですか…快斗くん呪われように気を付けて下さいね。」

—ハンドグライダーの羽のことか?でも、なんで…それに呪われるなつてオレは信じてねえよ?脅迫状のことが脳裏をかすめたが、

快斗はその場をじまかして、準備をする為帰つていった。その助言
が後になつて役に立つことになるとは知らずに

挑戦（後書き）

ホープダイヤモンド… 実際に存在します！
内容は少し変えましたが興味のある方は調べられます。

次の話は蘭と園子が登場します。

展開が進むのが遅くなりそうですが、 気長に読んで下さい。

宝石の招いた運？

金曜日の夕方5時。部活帰りの一人は、バスで家に帰るところだつた。バスの中はいつもよりも空いていて、数人の高校生しかいない。

「ねえ、明日本当にに行くの？」（園）

「行くよ。コナンくんが絶対行くって言い張って、きかなくって！」

何処に行くのかと言えば、もちろんキッドの予告状の場所だ。この2日前、予告状が届いた。

「明日から明々後日の連休の間、魔法がかかる瞬間に、赤いブルーダイヤモンドを頂きに参上する。

怪盗キッド

「

明日は土曜日で、土、日、月と連休になつていいのだ。

昨日やつと田的の宝石が分かつたばかりで、場所はそれよりずっと前にコナンくんが見破っている。

なんとそのお陰もあって、警部たちのおじりで三田間、捜査に加えてもう一えるのだ！

場所は、博物館の中のホールで開演する米花劇団の舞台。

そこでは、「ハリー・ポッター」の劇をしていて、劇のメンバーには手品師もいて、魔法とマジックが両方見られる！と評判の劇だった。中には、鳩を出したり、煙で辺りが真っ白になつたりキッドの得意なマジックもいくらかある。

「だって、その方が安上がりだもんねー。おじりなら、お腹一杯食べられるしー！」

「園子つたら……でも、楽しみー。今、一番人気の劇をキッド搜索の口実で一番前で見られるのよ。」

「キッド様もぴつたりの劇を選んだものよね？魔法と手品だつて！キッド様、劇の団員に紛れ込んでると思わない？」

「まさか一笑そう言えば、大阪にも予告状届いたらしいわよ？キッドが狙つ宝つて事で、値段が一気に跳ね上がって、今はその博物館に寄贈してあるんだって。」

「聞いた、聞いた！オーナーが宝石を守れたら、初めに捕まえた人か企業にその値段の半分を揚げるって言うから日本中から警備員が集まつて来ちゃつたって…大丈夫かな？？」

「ああ、キッドにしか分からないよ。」

しばらく、そんな話をしていると蘭はふと前の席の女の子が目に止まつた。何だか見たことがあるような、、、、ところが、誰だか分かつた瞬間目を落として会話をやめてしまった。

「どうしたの、蘭？」（園）

「あの前の席の子、見える？あの子前に新一に告白した子だよ。水樹玲香っていうの。」（蘭）

少し沈んだ声で言つ。

玲香は、髪が長く可愛い女の子で、端正な顔立ちをした美人だつた。元、サッカー部のマネージャで、いつも活躍している新一に一眼惚れしてしまつたらしい。背の高さもほぼ蘭と互角だ。

「そうなの！？」

「うん。新一は断つたけど、噂ではまだ片思い中……」

園子が、ホッと胸をなでおろした。なんだ、びっくりした。

「でも、それじゃ好きじゃないって事じゃないの。旦那は裏切つたりしないわよー。」

いつもなら真っ赤になつて反論するはずの蘭が、今日は憂鬱そうに下を向いてしまった。

「『めん。なんか悪い』と書いた?」（園）

「……新一も本当にそう思つてるのかなつて。だって、こんなに帰つてこないんだよ? いつ待つて待つてるつて。だって、もう半年もたつてるのに。『ゴメン。園子に書つてもしようがないよね』

我慢していたがさすがに寂しくなつてしまつた——そんな感じだった。

氣まずくなつて何も声をかけられずにはいると、大声ではしゃいでいた初めの部分が聞こえたらしく、玲香が振り返つた。

「あー蘭ちゃん。久しぶりー。マジックショーいくの?・私マジ

ツク大好きなんだけど行つてもいい?」（玲）

思わず二人の表情がこわばつた。このタイミングで?最悪だ。
彼女の表情にはキッドが来るならきっとあの名探偵も——と言つ
期待がそつくり表れていた。

「じゃ、決まりね!明日、うちまで行くからー!」

彼女はさつさと言い捨てて、急いでバスから降りてしまった。ちょ
つと!まだOKなんて言つてないじゃない!図々しい奴。蘭とは大
違ひね。

「蘭!あんな奴に負けちゃダメよ!ああいうのは気に入らないけ
ど、あれくらいじゃないと勝てないんだからー!!!!」園子が激怒
して氣炎を吹いた。

「う、うん。園子は京極さんとは上手くいってるの?」（蘭）

途端に園子は申し訳なさそうな顔に戻つて言ごめんがひと言つた。

「めん。蘭ー。昨日京極さんから電話を貰つて……付を貰つて」と
なつかやつたんだけど……」

「ええーーー？」

「言おうと思つたんだけど、言に出せなかつたのよ。『メン蘭ー』
確かにこの雰囲気では言えなかつただらう。それでも、蘭は寂し
さが増したような気がした。

「別に良いよ、そんなこと。良かつたじゃん。」

そつか。蘭は突然思い当たつた。

「うん。蘭は突然思い当たつた。
そう言えば昨日から園子携帯ばっかりいじつてあまり私と話してくれなかつたけ?
話しかけても上の空で……

詳しく聞いてみると園子は、堰を切つたように話し始めた。

聞かなければ良かつた。園子が益々遠くなる氣がする。友達の成功こんなに喜べないなんて、私は最低の人間だ。

喜べないのは蘭の中に僅かにでも「嫉妬心」というものが宿つてしまつたからかもしねり。

新一がそんな風にいってきてくれたら……私が言えたのなら――

そんなこと考へても仕方がない！！園子の話に相づちを打ちながら思つた。もし、新一が来るんだつたら絶対あんな奴に負けないわ。さあ、明日は服部くん達も来るんだし、部屋の片づけも、洗い物も……とにかく頑張らなくちゃ！

蘭は気を取り直してバスを降りていった。内心新一が来るような予感はしていた。

ところが、後になつて新一に好意を持つ蘭、灰原、玲香が来ることになつたのは宝石の作つた運命の巡り合わせかもしれないと思ふことになる。

彼女の誰か一人でも欠けていたら、こんな大変な事件は起らなかつたのだから……

宝石の招いた運?（後書き）

ピアノです

明日は、服部平次が来ます！コナンはまだ戻ってないみたいですが
……新一くんはもう少し後の方で出でてきます

探偵事務所はいつもより騒がしかつた。今日は3連休の一日目。コナン達は、今すぐにでも出発しようとしているが、大人數なため準備もあつてか、だいぶ予定時間に遅れていた。

「早くしないとキッド来ちゃうよ?」（歩）

「ちよつと待つてー三日も止まるんだから着替えとか、お金とか色々大変なんだから……ねえ、まだ玲香ちゃんこないの！？！？」
(蘭)

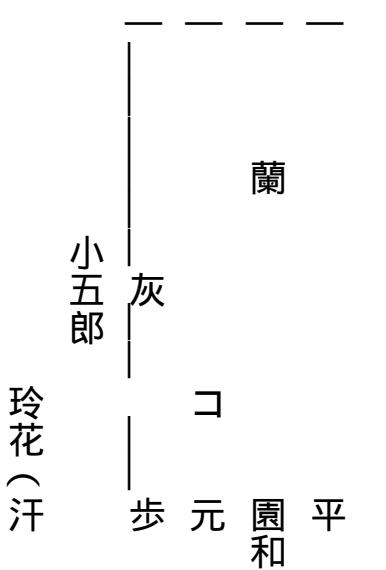
蘭が少しヒステリックに聞いた。強引に約束しておいて遅刻とは…いい度胸ね？

蘭の目がギラギラ光つて、拳も堅く握りしめていた。

その怒りの大きさはすさまじく、読書に没頭していたコナンでさえ殺氣を感じて、慌てて蘭から離れた。他のみんなも、同じものを感じたらしい。蘭の半径一メートル以内には誰も人が寄りつかず端っこに並ぶように立つている。コナンは思わず苦笑してしまった。

「服部、和葉さんに、元太、光彦、歩美！何壁に整列してるんだよ？体育の授業じゃねえんだから。」（口）

部屋の中の図



「シーツー！蘭ちゃん機嫌悪いみたいやから、逆らわん方が良い！」
ナンくんまだ小学生やで、分からんかもしけんけど、「触らぬ神に
たたりなし」やで。」（和）

などと、勝手なことを言つてゐる。

なるほどね……危険なのはオレが一番分かってるんだけど。」いつの蘭は悪気がなくてものもを壊してしまつたが怖い。

「それじゃあ、暇な間に怪盗キッドの暗号のクイズを出してやるよ。
」（口）

「クイズ？アガサ博士のだじゃれクイズのパクリですか？」（光）
「キッドの暗号のクイズって、答え分かつてるの？」（歩）

「ナンは軽く頷いて口を開いた。

「じゃ、問題。キッドの予告状に魔法がかかるときつてあったけど、それはいつたどの時間帯でしょ？」

一、今日の午後

二、明日の深夜零時

三、明々後の午後

「うん。でも、「魔法がかかること」位しかヒントないんやろ

？」（和）

「ヒントは自分で探すもんだよ。僕、調べてきたんだー。この時間帯は、劇がやっている時間で、二日間とも、違う種類の手品を劇の中で披露するんだ。内容は見てからのお楽しみって教えてくれなかつたけど、キッドの性格を考えればこれだけで分かるよね？」（口）

「キッドの性格？？そんなのおまえしか知らないじゃんかー…？」（元）

「わかつた！キッドは正直言つて立ったがり屋なところがありますよね？だから、一番最後のショーや、一番するマジックをやって、驚かすんですよ。だから、いいですよ…」

「正解。よくわかつたなー。一田田とか、二田田で何か騒ぎを起しあつてもすると想つけど、宝石を盗むのは三田田だと想つせー。」

「まあ、わざわざ大阪にまで手品を送つてくるんだから、よっぽ

「立たちがり屋やな？」（平）

ピーンポン

問題を解いてくるついで、事務所のインターフォンがなつた。イライラしてこむ様子の蘭を園子がしっかりと押さえて、和葉が出迎えに行つた。

「遅くなつて」メーンー事務所に来る前に調べる」とがあったの。

「（玲）

「蘭ちゃんめっちゃ怒つてゐるでへ。」（和）

「あ、玲香ちゃん、おひよー（お早）（遅よつ）」（蘭）

（蘭）

「わつー全員が抜き足、差し足、忍び足で、蘭の横を通り過ぎ、車に乗つた。

「で、調べるつて何を調べてたの？」（蘭）

「怪盗キッドの事よ。藤くんのお父さんといふこのねー。初代怪盗キッドと対決したことあるのよね。藤くんも来ると良いの」と（玲）

「コナンがびっくりした表情をした。「この人、誰だったか……思い出した！なんで、ここにいるんだよー？」どうりで蘭がイラライラしているわけだ。

「ちよつといー嫌み？工藤くんは蘭のことが好きなんだからね？」

(園)

「え？？なんでもうなるんだよー間違っているわけでも……ないわけでもないけど……。まだ、意味わからんねえ。

「そんなんじゃなーいってー。」(蘭)

「やうなのー？」(玲)

玲子が驚愕する。『じゅやら本当に知らなかつたようだ。

女同士の地味な戦いにはこの後も数分間続き、服部はおまえのせいだとばかりにコナンを睨んでいたし、和葉は、真ん中に割つてはいつて止めるのに精一杯。非常に先の思いやられる展開となつた。

は天国に到着したような気分で地面を踏みしめた。

そして、やっと車は駐車場に到着した。服部、小五郎、コナン

すかさず、服部が言ひ。

「じゃ、今日のショーガ始まるまで別行動…早く行こつか。コナ
ンベニ?」

ダッシュで、一人は逃げていった。時間は午後一時。ショーまでは
一時間ある。

蘭たちもやつと玲香と離れ、それぞれ宝石や劇の準備などを見に行
った。

キッド登場まであと54時間。

大阪＆東京（後書き）

ピアノです

まだ新一くんが出てくるのは先ですが……この状況でやつてきたり、どうなるかが怖いですね……

アガサ博士の新しい発明品ー（一田田）

少年探偵団も、車から降り蘭たちと一緒に米花劇団の劇の準備を見に行っていた。劇の内容が、手品も含んでるせいもあって、仕掛けを見破ろうとしたくさん的人が偵察に来ていた。

「僕たちは、キッド搜索班って言つことで中に入れるんですよね？」

（光）

「少年探偵団だって、有名だもんね」（歩）

「他にも、たくさんの探偵が来ているんですよ？ 服部さんと、白馬探さん、もちろん中森警部に……高木警部もー。」

光彦が高木警部の名前だけ辺りに響くような大声で叫んだので、歩美も元太、蘭たちも飛び上がった。

もう一人飛び上がった人がいる。背広にサングラスという、観客としてはふさわしくない格好をした男だった。

「高木刑事みつけ！ 飛び上がるからすぐ分かりましたよ～」（光）

「光彦頭いいなあ～」（元）

「高木警部来てたんですね？てっきり不審者かと思つて警戒してたんです。」（蘭）

「はあー。僕もまだまだですね…」

落ち込む高木を蘭たちが励ましてると、灰原がどこかへ歩き出した。

「ど〜行くんだよ！抜け駆けするなよ？抜け駆けコナンのだけで十分だぜ。一人だけ大阪の兄ちゃんと手がかり探しに行くなんてするいじやねえか！」（元）

「ちょっと電話をかけるだけよ。」

そう言つて灰原は電話ボックスに入った。疑問に思つてゐることがあつたのだ。

「もしもし。アガサ博士？灰原よ。」（灰）

「哀くんか。博物館の方はどうじや？」（博）

「ここちは大変よ。工藤くんに片思いの人が一緒に来ちゃって、喧嘩ばかりで耳が痛かったわ。これで本当に工藤くんが出てきたらどうなるか、想像するだけで怖いわよ。まあ、ここにはパイカルも他のお酒もいつさいないから大丈夫だと思うけど。」

「それは大変だったのう。それで何で電話してきたんじゃ？」（博）

「一昨日言つてた新しい発明品のことよ。あれって工藤くんの服のこと？特殊な素材でできてるらしいけど。」

「その通り！あの素材は伸縮自在で、工藤くんの体の大きさにまで伸びるようにできているんじや。外出先で戻つたりしたら、大変いやろ？」（博）

「そうなの。便利ね。でも、今日は元に戻らない事を祈ってるわ。」（灰）

そして、電話を切つた。電話ボックスの外を見ると、もう探偵団は

中に入つていて、高木刑事もいなかつた。反対方向を見ると、公園の前を「ナン」と服部が通り過ぎるところだつた。

今から探すのも大変だし、あの一人と話して時間をつぶそうかしら。あの子達、また抜け駆けだつて怒るかもしれないわね……

灰原のリュックサックには、何か丸いものが光っていた。

〔米花劇場内〕

おもしろいこと聞こいやつたぜーあいつ、パイカルって言つ酒でも
とにかくんだな。しかも、片思いの女の子との喧嘩、すげかつた（汗）

快斗は盗聴器で話を全できいていた。いいで、元に戻つたらコナン
びっくりするだろ？

「あいつ、予告時間書いてないのに当てやがった。でも、その予告時
間はオレが皆さんの前に現れる時間……盗むのはそれより前だぜ。」

快斗はにやりと笑つた。そして、隣の人物に話しかける。

「中森警部ー。僕今思ついたことがあるんですけど。」（快）

「なんだ。言つておくが、採用するとは限らんぞ。」（中）

「シローの前に、劇団員をキッドに変装せしめ場面があるのですから。挨拶の間だけでも良いですか？」（快）

「何でそんなことをしなくていいのかんのだ！」（中）
大のキッド嫌いの中森警部は、憤慨した。

「何言ひしるんですか。キッドを挑発するんですよ。そしたら、焦つてノスをするかも知れないじゃないですかー？」

快斗も言葉たぐみに、警部を言いくるめた。実際には、警備する側にとって、それが本物のキッドか分からなくなり混乱するものだ。

「それもやうだな……あの跡跡しきキッドをわざわざ舞台に登場させるなんて氣分が悪いが、逮捕出来るなら構わん！」

「じや、これを使って下せ。キッドのとほりとほり同じ構造に作れ

てある銃です。引き金を引くと、白い煙が出てきます。このために用意しておいたんです。あと、せりんと偽キッドに、僕は本物ではなくこれはただの余興です。って言ひて忠告しておいて下さいね。

「

「君は、秀才だと聞くが勉強もきちんとしなくちゃダメだぞ。まあいい、後で劇団員の人に渡しておいてくれ。」（中）

「分かりました。」（快）

向ひでは、子供の三人組が遊んでいる。勝手に忍び込んだんだな、まつたく。

騒ぐ声が聞こえてきた。

「元太くん、この博物館つて例の宝石だけじゃなくて、高価な絵画や、色んな宝石がありますよね。キッドは他の宝石は盗まないんでしょうか。」（光）

快斗は、お？と耳を澄ました。

「興味がねえんじゃないの？」（元）

セツヒツヒツヒツ、絵画に手をつぐ。その途端、絵画が壁の中に引っ込んで隣のランプが赤く光り、音を立てて回り始めた。

「君達、遊んじゃダメだー。警備は万全にしてあるんだから、いつさい触らないでくれー！」

すかさず、中森警部が飛んでいく。ランプの下のボタンを押すと音が止まった。

「「」みんなさい。」（元）

「あー、おまえ「ナンの友達だろ？」（快）
「何で知ってるの？」（歩）

失言だつたな……

「知ってるもんは知ってるんだよー。」（快）

「あれ？お兄さん誰かに似てるよ？」（歩）
「ホントだ。誰でしたっけ？」（光）

快斗は、子供でも一緒に話しているのは危険だ、と思つてぎくつとした。似てるってたぶん工藤新一のことだ。そつが、もし新一が元

に戻つたら、アイツに化けられなくなるんだ。

「オレは、会つたことはないよ。ほら、もひすべショーが始まるから。」

快斗は、中森警部と探偵団から離れた。

床に銃をおき、預かっていた警部のカバンを開ける。

—あつた。あつた。中森警部こいつそり酒をもひてきてやがる。思つた通りだ。居眠り防止のために酒は禁止なのに――

ワインのハベルを見ると……なんと『バイカル』だった。

うわあ。すごい偶然だ。すこし眺めてから、栓を開け、銃口に二、三滴垂らした。この銃は、丈夫なためこの程度では湿つて、壊れることはない。

栓を「職人の技」で、元通りに締め直して、銃を拾い上げた。

さあ、ショーの始まりだ。その目にはいたずらな光が灯っていた。

アガサ博士の新しい発明品ー（一田田）（後編）

やつと進んでもました！

次は、コナンと平次の話です

公園前から

公園前の道を、平次とロナンは歩いていた。公園を通り抜けると、そこには大きな湖がある。

「じゃ、一日田に遊びに行こうと計画している、石田湖だ。基本的には、游泳禁止だが、明日はたぐわさの客が来ると雪川ことじで、足首までならつかれるようになつてこる。

「工藤、わざわざ玲香ちゃんう奴だれなんや?」(平)

「オレのはじつたサッカー部のマネージャーなんだけどよ。オレの蹴ったボールがその子に当たつて、怪我したことがあつたんだよ。母さんがお詫びについて送ってきたアメリカの名物を届けに行つたら、皆泣かれちまつたつて訳さ。」(工)

「で、おまえをどうしたんや?」(平)

「もううん断つたぜ。蘭のこともあるしな。でも、昨日の様子じゃ……まだあきらめくなえんだな。」(工)

「あ～あ。お互にもてる男はつらくな～。オレまで巻き込みよつて。」(平)

服部は、大爆笑だった。

「なんじゃねえよーしかもお互いは余分だ。」（平）

「おまえ子供の姿で良かつたな～知らんふりできてー。」（平）

「だから笑うなって。」（平）

すると、後ろから来た灰原が話に突然割り込んできた。
「本当にね？歩美ちゃんにも、好かれてるらしいし。」

二人が、驚いて振り向くと……

「じゃ、ここにはあなたを好きな人が四人いるってのね。」（灰）

「四人？だれだよー！」（平）

「えっと、毛利の姉ちゃん、玲香さん歩美に……」（平）

「例えば、園子さん？和葉さんかもしれないわねえ？」（灰）
灰原がからかってごまかした。

「なんやでー？ありえんわー！」（平）

四人目は私だけど…この鈍感な一人に分かるわけないかっ

「後、玲香さんなら宝石が展示しているところにいるわよ。もうそろそろ劇場に行かないと間に合わないし。」（灰）

二人は、歩き出した。

コナンも、二人の小さい兄妹を年上の兄が世話しているような情景に不満そうにしながらついて行った。

「宝石保管室」

「これが、キッドの狙う宝石、ブルーダイヤモンドね。」

ブルーダイヤモンドは、半径三メートル以内に近づけないようになつていて、周りを遠巻きに動く人影のせいだ恐ろしい力を持つているように見えた。

なぜか、この宝石は玲香を不安にさせた。

宝石が悪意をもっているというか、元は大きかつた宝石を研磨していつた人間に恨みをもっているというか、不吉なものを感じる。

来るんじゃなかつた。こんな宝石を見に来たんじやないんだもの。

半分になつた宝石は頑丈な防犯装置や警備員にかこまれ、相変わらず不気味に光り輝いていた。

「その宝石に近づかない方が良いですよ。気分悪くなりますから。」

となりに立つていた白い服の男子が忠告する。
「あなたは、誰？」

「僕は白馬探。キッズを捕まえるために来た、探偵ですよ。ところで、君はこの人見かけませんでしたか？」（白）

白馬は、ポケットから快斗の写真を撮りだして聞いた。しかし、快斗の写真は知らない人には新一の写真にしか見えない。

「知つてますー」（玲）「こるんですか？」（玲）

「え、いや。僕がいませんでしたかつて聞いてるんですけど……」
（白）

「よく分かりませんけど、とつあえずこれ、もひつてもいいですか
？」（玲）

写真をひつたくり、戸口まで走っていく。

「ちょっとーそれは、大事な資料で僕は仕事中なんですけどー！？」
（白）

「ありがとうございますーーー」（玲）

「いえいえ、当然のことですよ……じゃなくて返して下さーーー聞いてない。はあー、ぼくも見に行くか。」（白）

白馬は、さうつぶさやいて宝石安置所をあとにした。

* * * * *

〔劇場〕

こうして、たくさんのギャラリーの集まつた、劇場は混み合つて絶えず人の声がしていた。

その声の中には、もちろん警備員のひそひそ声や探偵の情報収集する声も混じつてゐる。

前列の特等席は、四人が占領していた。

「樂しみだね。マジックショーなんて新一と新一のお母さんといつたきりだよ。」（蘭）

そういえば、あの時は事件が起つたけ。あとで、お守り買つとい。

「劇の前にサプライズがあるらしいよ。中森警部の娘さんの幼なじみが、提案したっていつ。」（高）

「中森警部に娘さんがいるんだ。意外ー。」（園）

話している高木警部はいつもより元気がなかつた。変装を見破られたのがそんなにショックだったのか。

「高木刑事は、課が違うのに何でキッドの捜索を手伝つてゐるんですか？」（園）

「IJの前の事件でうつかりしてて、また警部に怒られけやつてね。IJの事件も手伝わされることになつたんだよ。」（高）

「あ、それで、元気なかつたんね。でも、キッドの事件ではみんな失敗するから、失敗しても目立たないといふことにばされはつたんとちやう？頑張つて挽回せな。」（和）

「……やつですね。頑張りますー。」（高）

あと、十分で劇が始まる。後ろでは、ざわめきが頂点に達して……
…ガッシャーン！バラバラー（写真返してくださいー）（この人がつこいくるんですー）

「ねえ、いらっしゃなんでもうるさすぎない？」（園）

「大阪はいつもことなかんじやで」（和）

「えらい騒ぎやな～和葉、ちょっともう一つ一個横にすれて座つてくれ。」

「えらい騒ぎやな～和葉、ちょっともう一つ一個横にすれて座つてくれ。

「（平）

コナン、平次、探偵団も合流した。

そのとき、劇の幕が開き始め、辺りは急に静まりかえった・・・

Ladies&Gentlemen!

LADIES & GENTLEMEN!

幕が上がりきったとき——そう叫ぶ声が聞こえて、会場の全員が息を呑んだ。怪盗キッドが、天井から降りてきたのだから。コナンは、自分の推理が間違っていたとおもつてあわてふためき、飛び出そうとした。混乱して警備員が一人残らず動かないことを、不思議に思う余裕のあるものは少数だった。

怪盗キッドはゆっくりと周りを見渡し、灰原に腕を引っ張られ抵抗している子供に一瞬目を向けた。
たしなめるような視線を送り、一礼してから口を開いた。

「ようこそ、わがマジックショーに」来場頂きありがとうございます」と言いました。

子供がいぶかしげな表情をする。当然だ、キッドがこんな事言つはずない。

快斗はドアにもたれ、笑いをこらえながらの混乱を眺めていた。

(警部は判断を間違えたことに気づいたかな?)

中森警部は、本物のキッドを捜すようにあわあわしていた。

田のまえだよ、田の前。鈍い人だなあ。

そして、偽キッドにまた視線を戻す。

「驚かせてしまったようですみません。まず、劇場の周りに警備員が巡回させて頂くことを、お詫びをさせてください。聞き込みで知る限り、ご来場のお客様の中には、恐らく彼の予告状について興味を持つていらつしゃる方も、多くいらっしゃるのでしょうか。しかし、我々は決して彼に屈したりはしません。そして…………このような格好をしたものがいれば、すぐに警察に通報を……（笑）これは、宝石をぬすむと予告した怪盗キッドへの挑戦。警部さんから是非にと頼まれた余興です。劇はこれから始まります、どうぞお楽しみ下さい。」

そり、怪盗キッドが警察にださせた挑戦状だよ。コナンが、怒ったような顔をする。まんまとダニーに引っかかる、これは自分への挑戦状だったことに気づいたらしく。でも、おもしろいのはこれが

らだぜ。

最後に怪盗キッドは、パイカル入りの銃をとりだし発砲した。銃口からいつもより多く火花が散っていた。ダミーのキッド役も、ぎょつとしてるんじゃないかなあ。いまや煙が、辺り一面に立ちこめ隣に座っている人すら見えない。

「何かこの煙、火薬というより……妙においがしないか？」

「それよりキッドは？」

「たぶん消えたんだと思つよ」

あちこちから声が上がった。コナンは何も何かの違和感を感じていた。おかしいな、ただの煙なのに。

「これじゃあ、まるで……ドクン！ ドクン！ 鼓動が早くなるのと同時に心臓に強い痛みを感じた。

なぜ？ これは体が元に戻るときの痛みだ。まさか他に姿を元に戻す成分があるのか？

霧が晴れ、気付くとらんが心配そうに顔をのぞき込んでいる。いつたいどうしたの、大丈夫？

コナンは、トイレに行つてくると言つて急いで走り出した。服部も事情は分からぬがコナンの表情から窮境を察して、追いかけて

きた。よほど急いでいたように見えたのだろう、扉につくと親切な人が扉を開けてくれた。

慌てて振り返ると、その人は……オレだつた。
いや、そんなはずない。自分に変装したキッドにきまつてゐる。そいつがかすかに笑つて、こっちに向かつて気障に手を振つている。

扉がスッと、さつきまで開いていて自分と向き合つていたのは幻だつたのかと思うほど、静かに、しまつた。まさか、おまえの仕業か？どうやって知つて、どうやって実行した？服部は立て続けに起ころ現象に呆然としていたが、我に返つて物問いたげにこっちをみてきた。俺も、状況を思い出して、また走り出した。

数分後……さらに困惑した表情になつた服部と、疲れ切つた新一が出てきた。

「今日はよく工藤にあうなあ……もう訳わからん」

「オレに何も聞かないでくれよ……おめーが分かつてること以上はわからねーから」

まだ信じられずに、指を動かす新一。小さい体になれている彼にとって元の体には違和感があるのだろう。

「ああ、仕掛け人はキッドつてことだらう・どうしてこうなるんだ」

度肝を抜かれて標準語をしゃべっていることに気づかない。その理

由が、マジシャン特有の単なるいたずら心だなんて、知る由もなかつた。新一は、初めて標準語をしゃべった平次を面白そうに観察していた。

この時だけは、自分に起じた異変が他人事のように思えておかしかつた。この時だけは。

「キッドの奴、本当ばかにしてるぜ。警察も、あの余興に意味がないことくらい気付かねーのか」

「ホンマに。アガサのじいさんが発明があつたからよかつたけど、なかつたら後一時間はトイレに籠もないけんかったよな。今からどうするんや？劇場に戻るわけにもいかんやろ」

そこまでこつて、新一を見るといじんじん顔色が悪くなつてこくのが分かつた。

「ああ、最悪だ……」

「はあ？」

「玲香さんとか蘭の」と忘れてた……」のまおじや、かなりまづいことになるな

怪盗キッド……理由は分からねえけど余計なことをしやがつて！後で本物の工藤新一と対決したかった、だなんて言わねーだろうな？

新一は今までにないぐらに強くキッドを捕まえてやりたいと思つた。ただ、怪盗キッドが盗聴器で状況を知りぬくした上で、こんな事をしていることも本人だけの秘密。服部は、哀れむよつな目で新一を見てから肩を叩いていった。

「ああ、ダンマイー。落とすなや。オレは、巻き込まねんよ!」
遠くから見守つたるで。」

「そんな薄情な…おめえも助けるよ！」

绝望したような声でいった。新一や平次には、差し当たりどんな殺人事件や誘拐よりも難解な課題だつた。

「……できたらな。とりあえず今日はオレの部屋にかくまつたるから、先に部屋に戻つとれ。あとは、オレが上手く考えたるからー。」
ナンが事務所に帰る理由は、腹痛とか熱とか適当にいうとく

「頼む。それと、話し合わせねーと行けないしマジックのことは後で教えてくれ

「了解。ほな！」

服部の部屋は、三階、307号室。新一は、入念にキッドを捕まえる計画を立てるため部屋に戻った。

平次が劇場に戻り、もとの席に座ると、すかさず蘭が話しかけてきた。

「コナンは？大丈夫だつたの？」

「ああ、頭が痛いらしいから、先に帰るって。アガサ博士のところに行くなつて言つてたから心配いらん。」

毎度のことながら無理があるんじゃないかとひやひやする顔で訳を繰り返しながら、服部は蘭の顔色を窺つた。

「ええ。まだ、一日田だよ？ 明日は、湖に遊びに行こうっていつてたのに。」

蘭が、不満そうとした。幸いその日に疑いの色はないが、心配そうな表情は消えなかつた。

「残念やね。ご飯はどうするん？」

「あ、ああ。新一の両親がアメリカから帰つてきてるみたいやから、電話しといたで。」

適当な作り話だから、あとで辻褄が合つようにしてとかな一大事やな……まあ

「ふうん。」

全員の関心が劇の方に向いた頃、灰原がひそひそと聞いた。

「工藤くん、まさか元に戻つたの？ 急に頭痛を訴えるときつていつも……」

「今、オレの部屋。おまえはどうなんや？」

「私はちょうど席を外してたから。会場が騒がしい原因を探しに行つてたの」

「気づかんかった。扉の傍にだれかおらへんかつたか？」

「いいえ、中森警部しか見なかつたわよ。誰かにあつたの？」

「ああ、工藤に変装した奴見かけたんや。状況から考えてそんなことするのはキッドしかいな。どうにかして工藤が元に戻る方法知つたらしいわ。」

「それはおかしいわね。まさか彼も組織のこと何か知つてるのかしら……そうでなければ何かのつながりが…」

服部が深刻に考え込む灰原を見下ろしていると、ふとカバンについてる「G」ミが気になつた。

「なんやろ…」

光る銀色の何かをつまみ上げた。その小さな丸型の物を手で転がしてみると、何かに似てる。

「工藤の盗聴器に似てる…」

「しつ！静かに、でも、いまさら遅いわね」

灰原は無言でその丸型の物を取り上げ、子供の力で出来る限り強く踏みつぶした。

「私は、アガサ博士と薬の事を話したわ……迂闊だった、こんなにも警戒心が鈍つてるなんて」

「それについては深く考えるなつてよく工藤がいうとつたで。幸せになつて安心できるつていづのはわるいことやない。相手がキッドで幸運だつたと思つべきだ」

「でも……いつもこいつは限らないわ」

また灰原の口調が深刻味を帯びてきたが、長くは続かなかつた。突

然バサバサバサツと頭の上をフクロウが飛んでいったからだ。もうとっくに劇は始まっていた。魔法界らしさを出すためのパフォーマンスだった。壁際には、全部電気がつかずキャンドルやロウソクで辺りを照らしている。舞台には薄明るい照明。フクロウがホーー鳴くせいで、本当に夜が来たかのような雰囲気だ。照明が黄色っぽく変わった。満月の夜と言つことらしい。「幸せ、か」灰原も今は劇に意識を集中しようと見えなおしたらしい。額にしわを寄せて、足元の盗聴器を凝視するのをやめた。

第一幕はこんな感じだった。一匹の猫が堀に「座つている」。「座つていい」のは、彼女が人間だからそういう表現なのだ。長身の男、アルバス　　ドアが静かに歩いてきた。猫はそうするようにしつけられていて、近くの箱の中に入った。十秒くらいすると、箱から女の人が出てきた。彼は何事もなかつたようになつた。

「あなたも来ていたんじやのう。マクゴナガル先生。」

その場の雰囲気に合わせて、静かな拍手が巻き起つた。

「すゞいわね
「本当に魔法みたい」

服部と灰原は、口にこゝを出さなかつたが冷静だつた。一瞬で種を見破つたからだ。でも、この劇場の雰囲気は嫌いではない。台無しにしないために、同調した。

劇が進むと、舞台の後ろには、大きな肖像画がでてきた。その肖像画は「太つたレディ」。魔法界の動く肖像画だ。その肖像画が話しあす……という感じで劇は進行した。

服部は肖像画に防犯ブザーにも設置してあるのをみてしまった。ただ、劇の途中になるといけないので、サイレンの音は出ないのだろう。他の館のようにランプが光るようになつていて、ここもボタンを押せば止まるしくみなのかもしない。

厳重な警備やなあ。これに、オレと工藤、田本中からの警備員がいたら、キッドも逃げられん。

* * * * *

劇が終わり、それぞれが自分の部屋に戻るため、別々の道に分かれた。女子が一階、男子が三階に行つた。鍵を取り出し、扉を開けたときには初めて灰原がいた。じつそり近づくの得意やな……

灰原は、無言で中に入ると疲れてうとうとしている新一に話しかけた。

「調子はどうなの？」

少し目を開けて答えた。

「やつぱり、体力消耗する。この状態いつまで保つんだろうな」

「私は、やはりキッドの銃からの煙幕が原因だったと考えてみたの。当然銃に何か仕込んでいたのよ。だとしたらすこいわ、さつき計算した」

その効力が持続する時間は一週間。キッドの銃に入っていた火薬とバイカルが化学反応した結果、変質し、解毒剤としての効果が十倍になったというのだ。元の物質とは性質が異なるので耐性のついた新一にも効いた。

「一週間！？ すげー、ここまでで、一番長いじゃねーか

前のはせいぜい半日から一日だった。

「それだけ不運だったとも言えるわね。」

意地悪そうな目をして、すかさず言う灰原。

「まあ、それが普段だったら嬉しいんだけどな。コナンは父さんに誘われてアメリカに長期旅行したことにはれば良かつたんだし」

新一は、肩をすくめていった。ちなみにコナンの両親は、父親が作家で母親が元女優、つまり新一は天才の親持っているのだが、今は二人ともアメリカに住んでいる。コナンは、工藤家の遠い親戚といふことになっているので、そういうえば怪しまれることはない。

「それは残念だつたわね。あたしが言いたいことはそれだけだから。あとは、どうするか、自分たちで考えなさいね。」（灰）

灰原が出て行つた後、服部と話すともうなんて言ひかは考えてあるようだつた。

服部は「絶対反対するから言いたくない」と言い張り、問いつめても何も答えなかつた。

「わかつたよ。何も聞かねえから。そうだ、マジックはどうだつた？」（新）

彼は、マジックの一部始終を話した。

「簡単なトリックやつたわ。確かに箱に穴は空いてなかつたけど、猫に上からかぶせたんやから床とは接しとる。床に隠し扉みたいなものがあれば、マジックでも何でもないやろ?」

得意げに言つた。

「おめえ、そんな簡単な謎解きを得意げにいつなよな。オレだつてその場にいたら分かつたんだから」「マジックはともかく、劇はおもうかつたで。」

それから、いたずらっぽく笑つていつた。

「それじゃ、その場にいればわかつたつていつ証拠を聞かせてもらおか? 東の名探偵」

新一は一瞬きょとんとして、答えた。

「あるわけねえだろ!」

蹴つてとばしたクッショングバン! 平次の顔面にあつたつて、怒り出した。やはり、コナンの時とは訳が違つ。

「なにするねや、ボケ! 疲れたんならさつわと寝うやーおまえはソファーでーー! ほ自分の部屋なんやから」

どしどしと足音を立てて、寝室に向かい、新一もソファーに横たわつた。あーあ、何でこいつなつたんだろうな……結局答えのでないまま眠りについた。

Ladies&Gentlemen-(後編)

やつとりが来て来ましたーまだまだ続くので、プロジェクトお願いします。

服部平次の贈り物（一）

次の朝……ひとつテーブルを囲んで食事をしていた一同だつたが平次だけはソワソワして食事も喉を通らないらしかった。少し食べただけで箸を置いてしまい、周りを心配させた。

「平次？ 気分悪いん？ キツドのことで緊張しとるの？ 確かにこの前の仕掛けは唐突だったからうちもびっくりしたけど、あれは偽物やつたから大丈夫やつたやろ？」遂に和葉が声をかけた。

「別に……」返ってきた答えは案外素っ気ない。そして、ため息をつくと机に頬杖をついて、動かなくなつた。もう、食べる気はないようだ。

「ねえ、平次、どうしたんやろ。」

和葉が、ひそひそと蘭と園子に聞いた。

「あ、もしかして、恋じやない！？ だって、すつごい食欲なさそうだし！ きつとそうよ、ねえ和葉？？」

園子が、嬉々として答えた。高校生にとって、友達の恋は一大ニュースなのだ。

「それに、昨日から劇終わつたらすぐ帰っちゃつたり、様子おかしかつたじやない」

「鈍感な平次に限つてありえへんてー。恋で食欲がないなんて一番似合わん人やわ」

背後で、こんな勝手な会話が交わされているとも知らずに平次は、またため息をついた。

しばらくして、平次が立ち上がるところといった。「毛利の姉ちゃん。後で、渡したいものがあるから、オレの部屋の前に来てくれるか?」

意外な質問に、蘭を始め席に着いていた一人も目を丸くした。

「なんで・・なにがあるん?」和葉が聞くと、服部は慌てて赤くなつて答えた。

「姉ちゃん、もうすぐ誕生日じゃなかつたか?/?/?は、早めの誕生日プレゼントや!」

……もしかして平次の好きな人つて・・・蘭ちゃん!?

平次が出て行き、田の前に雷が落ちたような表情をした三人に、それを見て不思議そうな探偵団、涼しい顔の玲香が取り残された。

「私の誕生日つて、まだずつと先なんだけど・・?」

「蘭ちゃん、「ゴメンやけど私もついて行つてもいい?」

外では一陣の冷たい風がガラス窓に当たり、寂しい音を立てた。

一方服部は、階段を軽い足取りで上がっていた。——やつと、広間から抜け出せたわ。工藤がなにか感づく前に行動せな

そういうえばオレ、さつきの態度おかしく見えたかもしれへんな……でも、彼はこれから起こる（怒る？）であろう数々の憂鬱な事について考えていただけなのだつた。

それから三十分後……平次の部屋の前には蘭と園子、和葉、玲香が来ていた。

「あの、鈍感！……なんで、蘭なの。いつも、迷惑かけたり一緒にいるくせに」

園子は、怒り心頭だ。

「一緒にいっすぐたんかもね？兄妹みたいなもんなのかも…」

「何こつてんのよー本当に、服部くん血口中心的なんだから」「まあ、やつぱり悔しくなっていつたら嘘になるけど、蘭ちゃんのせいじやないし性格も良いしね。平次が好きでもおかしくないんとちやう…」

「やつぱ、帰るわ。」立ち去りかけたとき、平次がドアから顔を出した。

「ほれ、誕生日プレゼントや。」

服部が、部屋から「彼」を引っ張り出した。

「新一……」思わず声を上げるビックリして飛び上がった。

「蘭？……ひやしぶり。」

「プレゼントってことだったの？」すじ赤くなっていた。

「何のことだよ、服部。」

新一が鋭くにらみつけた。

「別に」道ばたで拾つたから交番に届けただけやで。」

「だれが、迷子だよー！」

（これがいやだったんだよ。こいつには怒鳴られるし、女子には賞賛されるし……こんな事する性格じゃあらへんのに。でも、こうでもせな、こいつがここにいるのは不自然やし）

逃げるようにして、廊下の方へいくと玲香とぶつかった。

「新一くんー！私、覚えてる？」

「ああ。覚えてる……けど。サッカー部のマネージャーだつただろ？」

「今日は湖に行くんだよねー！世界でも有数の、きれいな湖だから楽しみだね。」

湖へ向かうまでの道のり、玲香は白馬の写真と新一を見比べていた。なんか違和感があるのよね。白馬くんとも話がかみ合わなかつたし、なにか同じ人物じゃないみたいな……似ても、持つてる雰囲気が正反対なような感じ。

疑問に思つた玲香は、白馬の部屋の電話番号をフロントで教えてもらひ、「通話ボタン」を押した……

湖は、噂通り綺麗な場所だった。足までならつかれるとこへいりで、観光客もたくさん訪れている。

服部は、園子にこの湖のこともアンタが考えたの?や新一くん連れてくるなら教えてくれれば良かったのに、とさとざん質問攻めにいくとへとだつた。

新一は、中の魚を見る為に用意された、低い桟橋の上にいた。

「蘭、こいつでおこでよ。滅多に来ないんだから。」

「う、うん。」

蘭も、橋の上へ上がつた。「ここの湖、本当に綺麗なんだな。野生のメダカが泳いでるぜ。」

「本当だ。でも、遊泳禁止だから、落ちなよにしてね。」

「わーつむるよ。おめえこいつ滑るから、落ちるなよ。」

といふが、そつこ終わるか言ひ終わらなこつて、遅れてきた玲香が走つてきた。

「新一くーん！知らないと思つけど、泳ぐの禁止だから」

新一は、青ざめた。この短い距離である足の速さ！それに、この橋……頭の回転の速い新一には次に起ることが予想出来た。

「それは、わかつたから。今すぐ止まれ！」

案の定、彼女は新一にぶつかり……バッシューン！

水面に大きな水しぶきがたつた。

「あのなあ。ここのは、遊泳禁止じゃなかつたのか？」
不機嫌な声でつぶやいた。

「あはは、『めんなさい』……」

岸辺では、お氣の毒にと苦笑する平次と園子の顔があつた。

ハックション！黒い制服姿の新一は、まだむすつとした顔をしていた。

なぜ、制服を着ているかというと、服部は新一が来る時点で、△＝

事件が起る」と考えて、非常時用つまり葬式用の制服を持つてき
たからだ。それで、着替えのない新一に選択の余地はなかった。ま
つたく、物騒で失礼な話だぜ。

「大丈夫? 水は綺麗なんだけど

「大丈夫だけど、慰めになんねえな。」

「おれの制服、結構にあつとるやん。」服部も様子を見に来た。
「中学に戻ったみたいで落ちつかねーよ。いつちの制服青なんだか
うら」

「まあ、そう文句いうなや。それと彼女が話あるそつやで?」

「彼女って?」

服部が、何かを示すように目を動かした。目線をたどると玲香がこ
ちらを伺っていた。

「なんでも、おまえにそっくりな青年がどーたらーたらって言つて
たで。」

怪盗キッドがまた変装してんのか?興味を持ったオレは、聞いてみ
ることにした。

そのせいで、ある事件に巻き込まれるとも知らずに . . .

服部平次の贈り物（一）（後書き）

玲香の話とは . . . 次では、玲香がとんでもないことを書いて出します。

なんとコナンの正体が

予告はここまでです！（何言いたいかバレバレですよね、汗）

投稿は、遅れるかもしれません。興味のある方は是非！

欺き

新一は制服に着替えて、部屋の外に出ると、玲香と話しに行つた。玲香は、誰かの写真を、持つていた。ふと写真の人物が気になる。近づいてみるとハッとした表情をしてカバンの中に入れてしまった。しかもさつきから様子がおかしい。

彼女はするがしそうな目をこちらに向けていた。

少し不信感を抱いたが、話の内容が気になつて玲香が話し出すのを待つた。

しかし、話の内容は意外な事だった。

「新一くんは白馬深つて知つてる?」

「え? 知つてるけど……今キッドの調査に来てる探偵のことだろ?」

白馬といえば、キッドを捕まえることに執念を燃やしている探偵だ。でも、話つて俺に似た青年の事じやなかつたのか?

玲香は相変わらずそわそわしながら話を続けた。

「それで、さつきの写真は白馬くんの友達の写真で今預かってるのよ。だけど、彼はその人がキッドだと思つてるんだって」

「捕まえられないってことは見当がついてるのに証拠がつかめない

つてことか

「あの写真見てみる?」

そう言つて、またカバンから取り出た。その途端新一は、驚愕した。
その写真はまさに自分の写真のように見えたからだ。
このとき、彼は、一度しまった写真をわざわざまた取り出したことを疑問に思つべきだったのだが……

「これって……まさか白馬が疑つてるのね……」じぶんもびっくりと、
玲香が答えた。

「そう。新一くんよ。あなた、昨日のショーゲ終わった今日に來た
わよね？それって、ショーの裏で何かをしていてそれで出てこられ
なかつたんじゃないの？」

「んなわけねえだろ！…だつてオレは……」

「オレは、何？劇を見てたの？」

「ああ、服部と一緒に……じゃなくて、一人で。」

その瞬間、玲香の目が意地悪そつに光った。

「前日に来てたなら一緒に見れば良かったじゃない。服部くんと見てたなら納得出来るわね？コナンくんとか……」

「そんなわけないだろ！オレはコナンじゃねえよ！」

「私は「ナンくんとか」としか言つてないわ。でも、平次くんがコナンくんとトイレに入つてあなたと出てきたのを見たわ。その後いくら待つてもコナンくんは出てこなかつたけど。やっぱり同一人物なの？」

嫌な予感が当たつた事に気づいた。玲香は初めからこれが聞きたかったのだ。

「白馬くんはあなたには一度もあつたことないって言つてたわ。写真はあなたどうり二つの別人、黒羽快斗の物だつて。彼は、警察にも知り合いがいるから、後で指紋を調べてもいいけど……」

「なんだん腹が立つてきた。やけに細かく知つてやがる、何が目的なんだ。新一は、にらみつけながら言つた。

「おめえ、何者だ？田飼は何だよ。」

やつと、田から試すような視線が消え、今度はとまどった表情をし始めた。

「私は、本当は「ナンくんの様子がおかしかったから見に行つただけなんだけど…本当だつたんだ。じゃ、本当だつたらして欲しいと思つたことがあるんだけど…………」

「は？」

「私、この周りの建物を見て回りつつと思つてたんだけど、今日と明日だけつをあつてよ。そしたら黙つてるから。」

「はあ～。だまされたのか。」

新一は、呆然とした。女つて怖えな～・・・

部屋に戻ると、蘭が聞いた。

「何の話だつた？かなり険悪な雰囲気だつたよ。」

「…たいした話じやねえよ。それより今日せどりに行くんだ？」

新一は、「まかした。まさか、玲香に今日と明日一緒にこの辺りを見て回るつと脅されてたなんて、とても言えない。

その日は、キッドが仕掛けをしていないか調べるために、舞台に行くことになった。

舞台には、まだ中森警部や、警備員、白馬がいた。

服部は、舞台の真ん中まで行き床のでぱつた部分を蹴り上げた。案の定、床にあつた仕掛け扉が開き、大きな音を立てた。

「これが、この前のショーやの種やな。」

蘭、園子、和葉ものぞき込む。確かに人が一人入れるだけの隙間がある。

「へ～。ここから、出てきたんだ。」

「手品の種もしつてしまえばたいしたことないのね。」

「でも、炎の中から怪我ひとつなく出てきたのは、手品師の腕前だつたやろけどな。」

新一は、会話からはずれて、仕掛けから離れると、階段で舞台から降りた。

舞台は高いところにあつて地面から三メートルくらい離れていた。ふと見ると、一番前の客席に手錠が置いてある。

だれか忘れていつたのか？…まさかな。

拾おうとすると横からも手錠を取ろうと手を伸ばした者がいた。

「あ、快斗くん。どうに行つてたんですか。」

「白馬、深……？」

白馬深に出来てしまい、また先程の嫌な記憶がよみがえつてきた。

「僕は、黒羽快斗じゃありませんよ。玲香ちゃんから聞きましたけど。」

少しムツとして答える。

「あ、もしかして彼女の言つてたそつくりですか？名探偵工藤新一ですよね。」

「やうです。それより、この手錠あなたのですか？今日と明日だけ借りてもかまいませんよね。」

そう言つと、新一は、手錠を舞台の上まで持つていき、仕掛け扉に入る。

「何してんのよ。勝手にそんなことしていいの？園子が、周りを見回しながら聞いた。警部は、せんせんこつちを気にしてない。

「キッドが明日現れるとしたら十中八九舞台の上だ。なにか役に立つかもしれねえだろ。」

ヒソヒソと言い返すと、中に引っかけた。
服部が怪訝な表情をして、手錠を眺める。

「おまえ、手錠に細工したやろ。見とったんやから。」

「ばれたか。でも簡単に逃げられたら困るだろ。」

外に出て、頭を上げると舞台のには大きな肖像画がかかっていた。「太った婦人」。そう書かれている。ハリー・ポッターに登場する、中に描かれた人間が動く肖像画だ。実は、この絵の防犯設備はとくに堅固で触ると絵がひっくり返つて裏側の偽物と入れ替わる仕組みになっていた。絵に入っていると、

「新一くん！例の予告状の宝石のところにいーーー！」

という、大はしゃぎの声が耳に飛び込んできた。新一はその声をきいた瞬間、頭からつんのめりそうになった。チラシと蘭がこっちを見る。思わず目をそらして、返事をした。

「おーーーもう少しこっちを見てからなー！」

蘭が、そっぽを向いて壁と向き合つよつたな場所へ移動した。

悪いな、蘭……まだ正体を知られるわけには、いかねえんだ。玲香は不満そうな表情をしたが、外で待つことにしたらしい。蘭に声をかけようとして、立ち止まってしまった。泣いてる……？

「蘭、わざのことなんだから……」

「ほつとこでよ。行つてくれればいいじゃない……」

「泣いてんのか……？」

「誰も泣いてないわよ！私は園子と和葉ちゃんと買い物に行つくるから。」

言葉を返すことが出来ずにはいるし、話しかけられる前のこと、わざと歩いてしまった。

服部も様子がおかしいと思つたらしいが、先に宝石のある場所へ行つた。

蘭……また迷惑かけてしまったな

いつの間にか、警部や田馬もいなくなり、舞台には、新一しかいなかつた。

いや、正確には新一と「かれ」しかいなかつた。音もなく、階段を上がり、忍び足で近づく。何か考え方をしている様子の新一の背後に、「かれ」は回り込んだ。そして、手に持っていた長い棒を振り上げる。背後で、ざわつと音がして、やつと何か感づいたが、もう遅い。「かれ」はそれを振り下ろした。バン！と、鈍い音がして新一は倒れた。

氣絶した新一を動かしていると、遠くから名前を呼ぶ声がする。焦つて、何かにぶつかつた。急に赤いランプが灯り辺りをほのかに照らした。犯人は、笑みを浮かべて先程跳飛ばした物を見つめた。絶好の隠し場所を見つけたらしい。

舞台上には「かれ」の蔭だけが黒々とうごめいていた……

赤いブルーダイヤ

服部、少年探偵団の五人は、宝石保管室に来ていた。宝石の周辺²メートル以内に近づいた。サイレンが鳴つて建物の鍵が全てかかってしまう仕組みになっていた。

壁際には一人の警備員が居て、一人は眼鏡で背が高く年齢は20位に見えた。

もう一人は、年齢は同じくらいで短髪の男の人で腰にはピストルを装備していた。

物騒な刑事やなー。キッド見つけたら使うつもりなのか・・・しばらくすると、警備員の交代の時間がやってきて、一人が出て行つた。新一も、玲香もまだ来ない。おかしいな。アイツは、調べるだけ調べたんだからもう来るに違いないのに。まさか、なにかあつたんじや・・・そんなことを考えていると、玲香が一人で走ってきた。事件が起こったと言いに来ない事を願つて待つた。

「新一お兄さんは、どうしたんですか?」

「大変なの! いなくなっちゃつたのよ・・・入り口にいたから私の前を通らずに外に出られたわけないんだけど.....」

不思議そうに首をかしげる。

「それって、まだ中にいるんとちゃうんか?」

「探したけど、いなかつたわ! 逃げたのかも.....密室失踪事件.....なんてね」

「あほ！そんなに事件ばかり起じつたまるかい！」

平次と探偵団はあきれたような顔をした。玲香は、ツンとした表情だったが、服部の背後を見て目を見開いた。

まゆをひそめて後ろを振り返ると、宝口の台には怪盗キッドの帽子が斜めにかかっていた。

かなり不安定な位置だ。

ぐらつと傾いて…まずい！と平次が叫ぶ声がむなしく響く中、帽子はゆっくりと地面に落ちた。

ビーッと、音がなり、四方の扉がガン！と閉まる。

真っ赤な光が、半分の宝石に当たり、床を照らした。
部屋に残ったピストルの刑事が走り寄ってきた。外では、交代の人
がドアを叩いていた。

「どうしたんだ！キッドが来たのか！？」

ピストルの刑事がドア越しに叫んだ。

「違うーーここにいる子が、間違えて入っただけだよ。警報を止めて
くれないか。」

「おい！俺らはなにもしてない。見てたやろ？キッズの帽子は……」

服部はここまでしゃべって、急に口をつぐんだ。刑事がゆっくりとシルクハットを拾い上げ、台から宝石を取り上げたからだ。よくよくピストルを見てみると、拳銃ではない。いつたい……全員の視線が集まり彼が、静かにいった。

「何も見てません。って僕が証言したら？」

「は？ なにをふざけてるんや？」

「明日、夜7時君達とまた会えるのを楽しみにしていますよ。」

ドアが開き、中森警部がかけてくる。外の騒々しさからは、周りには相当人が集まっていると予想出来る。

「君達！ 線が見えないのか。勝手に、入ったらダメだつて書いてあるだろ？！」

「オレ、りじゅない。そこの警備員が変装して……」

「警備員？ あつ、だれも、いないじゃないか！ 何をやつとるんだ、わしの部下は！」

周囲の野次馬に紛れ込んでまんまと逃げてしまつたらしい……平次は、拳を握りしめた。もう逃げてしまつたんだし、冷静に訳を話すと警部は大あわてで、キッドを捜させた。が、見つけた物は、床に落ちていたバラとわかりやすく簡潔に書かれた犯行時刻のみだった。

「えーー！じゃあ、宝石盗まれてしまつたん！？何しどんの平次ー！」

「おれは、他のこと考えて忙しかつたんやー何も知らんくせして、文句言うなや！」

「他の事つてなんやの。」

「工藤がいなくなつてしまもたんや…」

わつきまで、上の空だつた蘭が、顔を上げた。園子も、怪訝な表情をする。

「また、何かの事件じゃないの？抜け駆け得意だし。」

「それだつたらわざわざ舞台からこいつそり抜け出さなくとも良いでしょ？きっと何かあつたんだわ……わたし、もう一回もどつてみる。」

「

一同は息を切らして、劇場に戻ると、舞台裏や小道具置き場、カーテンの裏まで探したがいなかつた。

光彦は音響室に入ると扉を開けた。暗い部屋で、電気のスイッチを探していると何かを蹴つてしまつた。まだどこかの機械が作動しているらしく耳障りなノイズが、どこからか聞こえてくる。

「電気のスイッチは…あつた！」

電気はゅうくうとついて、足下を照らした。すると靴には、真っ赤な血が付いていたのだ…

「うわああー！」

「どうしたの！光彦くん！」

蘭が走つてくる。光彦は、様々な機械の前に倒れている花瓶を指さしていた。

「これって……新一さんが事件に巻き込まれたって事なんじや…」

何度もつまづきながら、服部に状況を知らせに行つた。かれはドアに突進するよくな勢いで入つてきた。そして、床の上をさつと一瞥して言った。

「……に落ちてるので、オレの制服の第2ボタンや……でも、この血の量やつたら氣絶させられただけや！ここにこるはやでーでも、あとで戻つてくるだろ？から一刻も早くみつけな…」

しかし、言ふ終わるか言い終わらないかのうちに新一はやつてきたのだ。

「おめえら、こいついたのか。なんだよ、幽靈でも見たような顔をして。」

「探したのよ…行方不明で事件に巻き込まれたかと思つた。蘭は、床にへたり込んでしまつた。

「え、行方不明??」

「しらないんか?どうせひつて、出口にいる玲香に見つからずに外にでたんや…密室やつたんやぞー。」

「密室?何のことかわからないけど、喉が渴いて飲み物買いに行つてただけだぜ?心配かけて悪かつたな…おめえらも飲むか?」

そういつて、コーヒーの空き缶を振つた。しかし、服部はまだ納得出来ないという表情だ。

「じゃ、この花瓶は何や!」

「それは……劇の小道具じゃないのか?聞かれてもしりねえよ。」

言い返そつとして、口を閉じた。これは、明らかに血なのだ。なぜ、いろいろな事件に関わってきた彼がそんなことをこいつのか…反論より不信感の方が高まつて黙り込んでしまつた。

「新一お兄さんつて探偵なんだよね?私達も、探偵団なんだよ?」「そうなのか~無茶しないようこ気をつけろよ。」
「それより、ジースおじつてくれよ~探したんだぜ。」
「もう~元太くんはー」

新一は、しゃがみこんで財布の中身を調べている。すると、まだ恐

怖の收まらない光彦が、慌てて走ってきて転んでしまった。そして、財布をはたきおとした。

「「めんなさい！」

「大丈夫か？」といつて、引っ張りおこす。

「ええ、大丈夫です！」財布の中身をしまうのを手伝つた。

「あ、あの……」

「それじゃ、オレは今からすることがあつから部屋に戻るな。」

出て行こうとすると玲香に呼び止められた。

「飲み物買いに行つてたのよね？宝石見にいこつて言つたのに聞いてなかつたの？」

「ごめん、忘れてた。」

素つ気ない返事に違和感を感じた。そういうば、彼を見ていると何かを思い出しそうな気がする。数時間前の記憶を辿つてみると、さつときは何か違うのよね……

「うーん、制服！あの制服が微妙に違つ……腕のボタンの校章とか。雰囲気もまるで正反対だし。あの写真の人に似てる。どこが似てると言われると答えられないけど、きっとあの人だ。玲香は、怒つたふりをしてほっぺたをつねつてみた。

「いててー何するんだよ。」

新一は、痛がつて離れた。あれ、変装じやなかつたの。そつか、似てるなら変装しなくて良いのね。これじゃ、確認出来ないわ。

そんな一見中の良さそうに見える一人を蘭は見ていた……

全員が出て行つた後、玲香は音響室に残つた。唯一作動している機械をみてみる。

何の機械かは分からぬが、普通は誰もいないのだから切つておくはずだ。

実は、人が隠れられそうな場所を思いついたのだ。舞台の出つ張りに足をかけると仕掛け扉を開けた。

といひが、中にはいなかつた。そこには、手錠が引っかかつてるのみ。

なんだ、違うのね。気にしそぎたのかしら

まだ赤く光つている扉の明かりの前を通り、外へ出て行つた。

赤いブルーダイヤ（後書き）

とうとう第十話まで書けました！

光彦が言おうとしたことは何だったのか…
新一を襲ったのはだれか…

あとで、重要になつてくることなので、良ければ予想してみて下さい

朝、起きてきた新一は食堂で朝ご飯を食べながら言った。

「今日は、キッドが現れる日だよな、服部！あんなやつ、俺たちで十分捕まえられるぜ！…」

「…自信あるんやな。」

「あつたりめえだよ！それと今日は、また湖に行こうぜ。」

そういうて、服部の肩を叩いた。

「……なんか、今日テンション高くないか？それに、あの湖には一度と行きたくないって行ってたやろ。魯にどしだんや。」

氣味が悪そうに、新一から離れる。湖に落とされたお陰で、連休を制服で過ごすことになつて、むすつとして、一度と行かないつていつてたはず。

「氣が変わったんだよ！そんな変な顔するなつて。」

「ねえ、新一。お箸の持ち方違つよ…いつもそんな持ち方だっけ？」

「さう、蘭が指摘する。

「えつ？…ひつ…だけ？何でもいいんじゃないのか。」

「そんなわけありませんよー。」

テーブルマナーを教師の両親に教え込まれている光彦が抗議する。

「それに、いけないんだー。魚残して食べないんだつたら元太くんにあげてね！」

歩美も注意した。

「食べてもいいのか？でも、好き嫌いはいけないんだぜ？何で食べないんだよ。」

元太が嬉しそうに、近づいた。新一は、助かったという顔をした。

「いや、湖で魚と一緒に泳いだからそのトラウマ…かな？」

「えー！？」「えー！？」「えー？お魚さんそんなにこわかったのーー。」三人が一斉に声を上げた。

「湖いくんと違たんかい。」

「つづりのは、冗談で…理由なんてどうでもいいだろ。」

「新一は、食べたのに。」

蘭は、ぼそつとつぶやいたが、その声は探偵団の笑い声に紛れて誰にも聞こえなかつた。

実は、蘭はつづくに新一が本物でないことくらいに気づいていた。

ひとつには、音響室に落ちていたはずの第2ボタンが、制服にあること。

「一つ田には、蘭が床にへたり込んだとき新一が心配もせずに、服部くんと話を続けたこと。

いぐり、彼女じゃないとはいえ、幼なじみに心配をかけてたんだから近づいてきて声をかけるくらいはしても良いはずだ。

初めは、すじく寂しい思いをしたけど玲香ちゃんと話してるときの仕草や、話し方で気づいた。新一は、あんなに冷たい態度しないし、光彦くんがさうに話しかけようとしたのに無視する訳がない。

もしかして彼は偽物で、新一の事をそこまで心配する人と話して、正体を見破られるのを恐れたんじゃないか…と。

「田の前にいる奴が本当に自分の知り合いか確かめるためには――」

ええつと…たしか新一、前にこんな事いってた…なんだっけ。
そうよー思い出した！でも、あの時新一なんでこんな事いってたんだ
うつ。

これじゃ、本物かどうかなんてわかんないよ。

小学一年の時だったわ。あの時の新一も様子がおかしかった。

「おーい！蘭ーもう、店出るといつてんだろ。何ボーッとしてんだよ。オレは、ちょっと部屋に取りに行くもあるから先に行つて

てくれ！」

蘭の前で新一が手を振つてゐるのに気がつく。「数秒かかった。

「……うん。待つて！ねえ、新一！ティッシュ持つてる？」

「持つてるぜーーほらー返さなくとも良いからな。」

「ありがと。」

ティッシュからはかすかにバラの香りがしていた。「確かめるためには、持ち物から花の香りがしないかみてみる。そしたら…」

それから先を思い出す前に、蘭は席から勢いよく立ち上がり、廊下に出たがそこには誰もいなかつた。

しまつたな。…また、逃げられちゃつた

蘭は、咄嗟にそう思つた。後ろから、ドタドタと足音が聞こえる。

「蘭ちゃんどうしたん？上の空だと思つたらいきなり走りだしたりして。新一くんならなんか用があるんやつて。」

息を切らじて蘭に追いついた和葉がいった。

「平次くん、和葉ちゃん！今すぐ新一を捜して！怪盗キッドよー！」

「え？？何でわかつたん！？」

「おれも、怪しいとおもつとったわ！行くで和葉！」

二人は、新一の部屋の方へ向かった。

「ティッシュ——返さなくとも良いからな。——返せないだろうから。さつき聞いたばかりの言葉が急に新しい意味を持つ事になってしまった。

「待つてよー怪盗キッドが、新一の部屋に行くつて言つたのはきっと何かから田をそらしかるためよ。」

「じゃ、どうすればいいんや！」

「まず、彼をよく知ってる人に電話してみるわ。昨日、劇場に行つたとき、白馬くんにメールアドレスと電話番号教えてもらつたの。どうやら、本当の新一をキッドかもつて思つたみたいね。おかしな行動をしたらメールしてつて。するつもりは、なかつたんだけど……」

蘭は、くすつと笑つて通話ボタンを押した。

「もしもし、白馬ですが。」

「毛利蘭です。怪盗キッドが新一に変装してたみたいで、今逃げちゃつたんだけど……」

「本当にですか。追いかけるのは、難しいと思います。怪盗キッドの事ですから、追いかけてくることも計算済みでしようから。そういうば、もう一人怪しいと思つてた黒羽快斗。退屈だからつて帰つち

やつたんですよ。僕は、上藤くんに変装したのが助手だと思いますからいつたん帰つて監視することにします。」

「ええ。 そうですか。」

そういつて、電話を切つた。

「えらい短い電話やなー。で、どうやった。」

「なにも、役に立ちそなじとはなかつたわ。結論は、探すのは難しいでしょうだつて。」

がっかりして、カバンに携帯をしまつた。田馬探偵もキッドに操作られているのね。帰つたら誰もいなくてテレビにはまた同じで、怪盗キッドが映つてゐ……つていうのが、キッド流のジョークなのかも。

「いめんね。 探すしかなさう。」

キッド捜しが続行されたが成果を上げることが出来なかつたのは言うまでもない。

予告時間まで、あと四時間。

本物なれい（二田三）（後書き）

投稿遅れて済みません。テスト期間で宿題一杯だったんですね（汗
新一の言葉の謎については、後で説明するつもりです！読んで頂いた方は引き続きよろしくお願いします。

冷ややかな気配

蘭たちが去ったすぐ後、廊下に面した男子トイレから一人の男が出てきた。辺りには、誰もいないのに左右を確認した。

「ふう、やつとあきらめたか。でも、なんで工藤新一出でこないだろうな。一日部屋にも帰つてこなかつたし。まあ、白馬の奴も上手くだまされてくれたみたいだし、何でもいいか

トイレから出てきた黒羽快斗は、歩きながら電話をかけた。

「もしもし、寺井ちゃん、仕掛けの方は進んでるのか？名探偵の知り合い、だいぶ鋭くて名探偵の部屋には行かなかつた見てえだけど、大丈夫か？後、四時間しかねーけど。」

「もちろんでござります。十分もすれば仕上がりますから。警官の用を」まかすのに少々時間がかかりましたが…

「そうか、よかつたー。急だつたから、間に合わないかと思つた。実は、ここに来る前はそんな仕掛けするつもりなかつたんだぜ。だけど、初日に面白い」と発見したから変更したんだ。悪いな。」

安心して、笑顔になる快斗。

「ほつちやま、それで気になることなんですが、この部屋、いくつか血痕が残ってるような…それと、あの「太ったレディ」の肖像家が盗まれそうになつたみたいですよ。警察は知らない見たんですが、防犯ブザーが光つてました。」

「血痕つて……オレが行つたときはそんなのなかつたけど。本当に、赤い絵の具とかじゃないのか?こつちも、気になることがあるんだけど…ともかく、もう一時間で最後のショードだからオレも準備するな。じゃ!」

電話を切つて、劇場へ向かう。

なんか、変なんだよな。あの毛利つていう女の子、どうして分かつたんだ…今日はものすげー、勘が良い気がする。

それに、音響室の血つて本物なのか?

だつたら、すげくまずいことが起こることになる。でも、あの部屋にいたなら寺井ちゃんに見えないわけない。脅迫状のこともあらし、目当ての物、本当に呪われてるんじゃないか?

結局快斗は、脅迫状には屈しなかつた。そんなものを、送つてくるってことは、何かあるに決まつてゐる。おそらく犯人は、その宝石を安いうちに無理やり買い取つつもりだつた。しかし、キッドが予告状を送つたことで宝石の値段は跳ね上がつた。オレの正体をばらしたからと言つて脅迫状の送り主に得はないし、証拠もない。快斗は、買えない値段になつたら、キッドが盗んだ物を取り上げた方が早いと思うようになるだらうとふんでいた。だから、計画通りにしても、正体をばらされたりはしないし、宝石を盗んだ後でわざわざもう一度登場して、証拠を見せるのだ。

「元気いる間に、こちらから正体を暴かなければ…

彼は、もう一度服の袖の、裏の隠しポケットにホープダイアモンドが入っているのを確認して、劇場の中に入った。

警官の前を通るとき警官の目が光つたが、やり過ごす。今日になるまで、何も情報をつかめず、ピリピリしている警官の目は、針のように尖つていて悪いことをしていくとも恐ろしい。

確かに防犯ブザーは光っていた。だが、劇の途中に鳴るといけないため、音は鳴らないらしい。

「寺井ちゃん！…忘れ物、見つかったか？」

「ええ、万事上手くいきましたー今日のショーが終わったら帰るだけですよ。」

「サンキュー。」

外に出ようとすると、入れ替わりに反対の扉から子供が入ってきた。げっ！あの灰原っていう奴だ。子供のくせにかなりの切れ者なんだな。早く来て良かつた。

今度こそ本物かもしれない…期待に胸をふくらませながら、外へ出

た。

そして哀は、劇場に入った。その途端、誰かに見られているような気配を感じる。一つ、二つ…三人、くらい？ほぼ一人は悪意のないが分かるが、そのうち一人の視線には指すような物を感じる。組織の人間…気配がした方を振り返ると、嫌な感じは消えた。

なんだつたの…?

犯行時刻まで後、三時間三十分。

冷ややかな返配（後書き）

次に、シローの内容について触るとと思こまへ！

壁に並んだ、刑事、警官、宝石の懸賞金田当ての一般人の緊張はピークに達していた。現在、六時五十六分。相変わらず進展はない。こんな状況で普通の観客が来たがるわけがなく、せっかくのショーナのに、見ているのはキッド田当ての者たちだけだ。劇団員もこんな雰囲気での上演はやりたくないだろう。少し同情しながら、席に着く九人だった。

「で、最後のマジックはなんやの？」

「最後は、一田田と同じ炎の中からでてくるマジックよ。本当は、空飛ぶ車、フォード・アングリアのはずだったんだけど、白馬くんの車と同じ車種で付き添いの運転手が間違えたの。」
蘭が、顔をしかめていった。

「え？」

「それに乗つて帰っちゃったんだって。空飛ばないと良いけどね
笑」
くすくす笑い出す一同。

「その運転手あほっちゃうんか。普通間違えるか？」（平）

「珍しい型だし、ナンバープレートも付け替えられてたんだってさ。
キッド様もやるわねー。」（園）

「本当に冗談きついですよー。まあ、お客さんもいない」と同じ同

じでもいいと思つたんでしょうなー」（光）

「でも、キッドがどこから出でてくるかは、想像ついてしまつね。」

（和）

笑つてゐる間に幕が開き、真ん中には前と同じように縦長の箱が置かれた。中に猫を入れ、内側から錠前の鍵をかけて閉める。アシスタントが箱に火を付けた。初日より勢いよく燃え上がった。

一分、二分…箱に変化は見られない。「おい…ちょっと出てくるの遅くないか？前はほんの数十秒でてきたのに…」平次が、さすがに不安になつたらしく隣の和葉にささやいた。

三分、三分十秒、箱が崩れそうになる。

二十秒…五十五秒。

そのころになつてやつと箱がゆれ、中に入がいることが確認出来た。

平次の腕のデジタル時計がやつと七時を示した。7・00・00

ドアが、バーンと勢いよく開く。

怪盗キッドが出てきた…手に、例のダイアモンドを持つている。

蘭は初めて見たが、そのダイアは博物館に移されたときネックレスにされていて、半分ながらにも見栄えが良くなるようにしてあつた。それを腕に通して高く掲げていた。

「キッドを捕まえろーー！」

中森警部の声が響いた。

ピュー

キッドが口笛を吹くと、フクロウが飛んできて、中森警部の頭すれに飛んできた。そして、飛んでいるうちに鳩に変わつてキッドの肩に止まる。羽がそこら中に飛んだ。

「」来場頂きありがとうございます。皆さん、ご覧になつている舞台の肖像画もあなた方に手を振つていつ見えますね。」

そういうと、膝に手を置いていた婦人の手が上がり別の絵が見えた。魔法界の動く肖像画、太ったレディが本当に動いてしまつた。まさか魔法？誰もが、そう思った。

目撃した全員が唖然とする中、一番端に座つていた灰原だけは、壁にある防犯装置に気を取られていた。

この防犯ブザー光つてゐるわ…つていうことは、この絵は本物じゃなくて、偽物のほうね。昨日ここに来たとき唯一作動していた装置が

防犯用のだつたら納得出来るわ。24時間作動してなければいけない装置と言えば防犯装置だけだものね。

工藤くん、ずっとここにいたの？

灰原は、わずかに血痕のついた警備解除のボタンを押した。すると、急に「太つたレディ」の肖像画が裏返り、裏から本物の絵と一緒に本物の新一が現れたのだ。

「新一！」

蘭が、口を押さえて立ち上がった。頭には打撲の跡があり、顔にも少しついている。

キッドが慌てて、その場から飛び退いて、白い衣装を守った。珍しいものでも見るようすに新一をまじまじと見つめる。

「おまえ、何やつてんだよ…えっと、頭どうしたんですか。殴られたみたいに見えますけど。」

思わず、素が出てため口になってしまったが、気を取り直した。

「…じつてー、一生出られないかと思つたぜ。あつ、キッド、おまえこそ何やつてんだ。」

先程まで、暗闇の中にいた彼は、周りのことなどお構いなしで、舞台の明るさに目を細めながら言つた。

「なにやつてんだって……見ての通り。普通に聞かないで下をこよ。

寝ぼけてんじやねーよとばかりに、視線で舞台を示す。

「

改めて、辺りを見回した新一は、やつと状況を理解し、顔の血に気づいて、ぬぐつた。いつのまに、こんなところにいたのかと不思議そうに首をかしげていた。突然ふつと笑って顔を上げた。

そして、田を見開くと、キッドの後ろを指さす。

「アイツがオレを殴った犯人だ！」

当然キッドだけでなく会場の全員の注目が舞台袖に集まつた。しかし、それはそんなことを見越した新一の罠だったのだ…

「！？　だれも、いませんけど…」

疑わしそうに、前に向き直るとカチッと軽い音が鳴るのはほぼ同時。

後ろを向いた隙に、仕掛け扉を開け、手錠を取りだした新一は、キッドの腕に手錠をかけた。警官に、追いかけられたことが何度もある彼でも、ここまで追い詰められたのは初めてだった。：迂闊だった：

ヤツは、手錠の金属の、鎖の部分を持つて勝ち誇ったような顔で言った。

「やつと決着がついたな、怪盗キッドー！」

高らかに中森警部が叫ぶ。

「怪盗キッドが焦つてミスしたぞ！快斗のお陰でわれわれの計画通りだ。捕まえろ！」

(いや、違うんですけど……)

キッドは手にもつていた鍵を取ろうとした。新一がそれを察知して腕をひいたときに鍵が、手を離れ、3?下の舞台の下に落ちてしまった。これで、鍵をはずすこともできない。本格的にやべえ……

しかし、運は怪盗キッドの方に味方…した。

落ちた鍵を取ろうとして新一の手が下に下がり、キッドの腕は鍵を取り損ねて、その代わりにもつ片方の手錠の端に当たった。

新一が手錠の鎖ではなくあらかじめ手錠の端を持つていればよかつたが…予測出来るはずがなかつた。

力チャヤリ、と今度は嫌な音がして、もつ片方が新一の腕にはまつてしまつた。

キッドの手にかけていた宝石のネックレスが滑り落ち、快斗と新一のうでの間「手錠の鎖に引っかかつて止まつた。

呪いの宝石が、行方不明の名探偵、予告状をだす大怪盗といつありえない組み合わせをつなぎ止めてくるようだつた。

その瞬間、辺りは静まりかえり、警部すら足を止めるほどだつた。

「…」それでも状況は変わんねー。逃げらんねーよ。

「…それは、どうかな。」

お互に引きつった笑いを浮かべながら、まだ強がつている。

キッドは、発煙銃を取り出すと、新一に向かって発砲した。例の煙の中で咳き込んでいる間に、肖像画の裏の小部屋に引っ張り込まれた。そこには窓が……

舞台に上がってきた警部と平次は嫌な予感に襲われた。キッドが、もつとも得意とする逃走計画だ。しかも、この距離から駆けつけても手遅れなのは目に見えてる。

煙が晴れた後、新一が口を開けるとキッドが窓に足をかけている。「離せよ！ハンドグライダーに一人乗りなんてできるわけないだろ！落ちるに決まってる！」

抵抗する新一。

「離せないから言つてんだる。僕だって、連れて行きたくない。それに、落ちないと思つぜ……占い師の友達に警告されたからな。まさか当たるとは思わなかつたけどさ。」

焦つて、駆けつけてくる最中の平次に向き直つて、最後に言い捨てる。

「親愛なる観客の皆さん、今回は、赤いブルーダイヤモンド——ホープダイヤモンドと、青い目の……真っ赤な探偵を頂いていきます。ご機嫌麗しゅう。」

「までやー！キッドー！」

とうとう飛び降りた。平次が、窓に着く頃には一人はだいぶ離れてしまつていて、遠くの空に、真っ白なハンドグライダーだけが異様に明るく光っていた。

I can't believe it!

解答遍（後書き）

題名の解答遍とこののは、新一が「いたか」の解答です。
私も、書きながらドキドキしてました。充分表現出来てると良いのですが、
また、感想の方もお願いします！

キッドと新一の二人がいなくなり、辺りは閑散としていた。数秒の沈黙の後、中森警部が悪態をついて悔しがった。服部は、まだ窓から遠くを眺めていて、まだ信じられないようだつた。和葉も、舞台に上がり、平次を窓から引き離した。

「平次…平次！ちょっと、ボーッとせんといって…」

平次の前で手を振る。

「平次…平次！ちょっと、ボーッとせんといって…」

「…本当に行つてしまつたな。怪盗キッドの奴、工藤をビリするつむりなんやろ…工藤のことやから、キッドの正体わかつてしまつやろ？そのとき、なにか事件に巻き込まれなええけど。」

下を向いて、考え込む平次。

「それどういう事なん？？」

和葉が、思わず大きな声を出す。

「いや、キッドに限つてあらへんとおもうナビ…口封じのために、とか。」

口ごもりながらいった。探偵の勘で、何かの事件の巻き込まれる気がしたのだ。

「まさか…キッドが危害を加えるわけないって。」

無理に笑顔を作ると、舞台の下へ連れ戻した。

下では、足がすくんで動けなかつた蘭が、しゃがんで下に落ちた小さな鍵を見つけたところだつた。

「これがないと新一はキッドから離れられない…何とかして渡さないと。」

そのとき、ふと寒気がして後ろを回へと、玲香がこいつらを見つめていた。

「今、私も拾おうと思つたんだけど、あなた彼がいる場所分かってるの？」

不敵な笑みを浮かべて言つ。

蘭は、唇をかみしめた。もつと、探しておけば「こんな事にはならなかつたのに」うつむきながら言葉を返した。

「そんなのわかんないよ…キッドが連れてつちやつたんだし。玲香ちゃんは？」

「私は、彼女がいるから見つけられる可能性は高いわよ？ちょっと貸してよ！」

そして、鍵を奪い取つた。空手の実力も体力もこっちの方が上なのだが、そんな風に奪い返すことを新一が望むわけがない。蘭は、握りしめた拳をゆっくりと開いて、平静を保つて言つた。

「彼女って誰よ？」

玲香は、灰原の手をひいていた。しかし彼女は、子供扱いされて嫌だつたらしく手を振り払った。

玲香が言つには、光彦が偽新一の財布をはたき落としたとき、自分の探偵バッヂも床に落としてしまつたらしい。お金を戻すのを手伝つていたら、間違えてバッヂまで入れてしまった。そのことを言うとすると、新一の知り合いと話したくなかったキッドは、部屋に戻つてしまつ。だから、ある程度近づけば、袴のもつてたコナンくんのスペアの眼鏡で追跡出来る。まるで、眼鏡が自分の物みたいな言い方だつた。

「でも、みんなで探せばいいんじゃないの？私は、渡したくないわねえ？」

灰原が、冷めた声で言つ。玲香は、不満そうだつたがふくれて去つていつた。

「『めんなさい、蘭さん。私達の話を聞いてたみたいなのよ。嫌な人ね。鍵、持つて行かれたら元も子もないわ』小さくため息をつくと、こっちに向かってきた和葉と平次の方を見た。

「服部さん、怪盗キッドの居場所検討つくかしり？」

「やっぱりやで。工藤は携帯電話持つてゐるけど、すぐ隣にキッドが

いるのに連絡してこられへんや。眼鏡があつても世界中のビリでいても分かるわけやないし……」

肩を落としていった。探偵団も、話を終えて会流してきた。

「じゃあ、キッドのマジックの種をわかつた？何か、ヒントがあるかもしれないよ！」

「フクロウが、鳩に変わるのは分かつた。飛ぶときにたくさん羽が落ちてきたから、鳩に余分に羽根を付けてただけだ。でも、絵の方は…あの絵の裏の小部屋から何か仕掛けたんだつたら、工藤に気づいたはずやからな。」

「新一お兄さんは透明人間だったんだよ！コナンみたいに抜け駆け得意なんだろ？」

「もううそんなわけないでしょ、元太くん！新一お兄さんは、きっと一回移動させられたんだよ！」
歩美が、諭すように言つ。

「それやつたら、犯人を特定するのは難しいな……」

みんな、黙り込んでしまった。長い間沈黙が続いてから、灰原が口を開いた。

「警備員…警備員に変装してたんじゃないかしら。」

それを聞いて、一同は思わず納得して口々に哀をほめた。確かに、たくさんの警備員がいる中で、一人くらい余分に見張つてもだれも気にしない。絵は、緞帳のお陰で他の警備員からは見えない。初めに絵の周りをウロウロしているはずのキッドの助手を特定しておけば、入ってきても分かるのだ。それとも初めから知っていたのか…舞台はマジックの仕掛けをするのにもつてこいの場所だ。まず新一を小部屋の出口の近くに座らせて、助手が入ってきたらさりげなく警備からはずれる。助手と入れ替わりに新一が出てくれば、あとは他の場所に移すだけ…

「そして、いなくなつた後に戻したつて訳か。工藤が見つかったから危険やで、あの二人。」

話が、ますます悪い方向に進んでしまい、会場の雰囲気も最悪だった。

「打倒キッドだー！絶対ゆるせーん！分かつたな！」

「はーー！」

中森警部の怒声が響いてなおさら騒々しい会場だった。

.....衝撃（後書き）

遅くなつてすみません！勉強とかがあるので投稿遅れるかもしだせ
んが、よろしくお願ひします。今日は説明ばかりになつてしまいま
したが…それにしても、玲香恐ろしいです。次は、怪盗と探偵の登
場です！

手錠にかけられた二人

とんだ運命の巡り合わせで、田舎での蜜石とともに手錠につながってしまった新一と怪盗キッド。そして、いまやつとある建物に到着した。地面に足がつけられて嬉しそうにする新一と、へとへとになつた快斗はその場に座り込んだ。がらんとして誰もいない屋上だった。

「おーいー！」、「どうだよ。」

「…オレン家の隣のマンション。いつも、仕事が終わったらここから家に入るんだよ。人気が少ないから！」

半分やけくそになつて叫び返す。新一も意外そうな顔をする。

「へー。どこへ行くかと思えば、自分の家に連れて行くのか？この状態で、自由になつたらオレが通報するかもしけねえぞ？」

「住所はノーコメント。飛んできたからわかんねえよ。オレの母さんは、毎日が休暇だから、今日はワシントンDCにいるから問題ない。それから、携帯は没収な。」

ムツとしながらも仕方なく携帯を預ける。まあ、予想はしていたが、二人は、マンションから隣の民家に飛び移り、屋根に着地した。家の瓦を一つ取ると、その下の扉の鍵を開けて部屋に入った。

「屋根裏もあるのか。」辺りをきょろきょろ見回して言う。

「そりゃあ、代々怪盗キッドを受け継いでるんだから外から入れないとまずいだろ。地下室もある。といつても、まだオレで二代目だけど。」

廊下に出で、階段を下りると快斗の部屋だ。

「……………」がオレの部屋。あんまりいじるなよ！」やうにって、教科書など名前や身元が分かつてしまつものと素早くしまつた。

「で、史上初怪盗キッドの部屋に入った探偵として、なにか感想は？」

おどけて聞くと、正直に答えた。

「あまりキレイとはいえないな。制服はちゃんとかけて置くもんだぜ？あ、えっと出身高校は……」

「だ・か・ら、うひうひするなー当たり前だろ、普通の部屋じゃないんだから。いろんな仕掛けをカムフラージュするために……」

「嘘つけ。」

鋭くつっこむと、快斗は肩をすくめた。「んな風になると予測してなかつたのだろ。

「まったく、これだから嫌だよ探偵は。夢がねえなー。でも、仕掛けがしてあるのは本當だ。たまに嫌な奴がくるんだよ。万が一はいつて来たときのために。まあ、そういうときはたいてい居留守を使うんだけどな。」

その時、ドアをノックする音が聞こえた。

「どなたですか？」

キッドが出迎えようとすると、新一も行かなければならず、強引について行かされた。ドアのぞき穴から見ると、白馬深が戸口に立っていた。

「出た！ 嫌な奴。でも、もう返事しちまつたし…

快斗は音を立てないよひこじりと鍵を開けると、わっと部屋に戻った。

「いいか？ 物音たてたらコナンのことばらすからな？」

「またコナンのことで脅せられんのかよ…いや、なんでもない」

一瞬玲香のことを思い出してげんなりしながら従う。

「で、どんな仕掛けを使うんだ？」

「それは、見てからのお楽しみ」

ウインクすると次の指示をした。

ところで、快斗の部屋は地下室に通じている。実は、部屋の隅の床板から出入り出来る。そこに新一だけを隠れさせて自分は隅に座つた。

「鍵は開いてるから勝手に入ってくれーいま、部屋だからー。」

まだ、玄関に待機している白馬に呼びかけた。

「だけど白馬、せっかく来てくれたところ悪いんだけど、今マジックの研究してるから忙しいんだ。用が終わったらすぐ帰つてくれ。」

素つ気なく対応すると白馬の追求が始まった。

「ちょっと聞きたい」とがあるだけです。今日の朝、家に帰るつて言つてたのは嘘ですね？」

「よ、寄り道して帰つただけだよ！何度も言つけどオレはキッズじやないつて！」

「どうだか」地下室から快斗にしか聞こえないくらいの音量の声が聞こえた。快斗は、床をべしづと叩く。

「どうしました？その腕の鎖、なんですか」白馬が部屋に一步踏み入れる。

その途端、炎が床から吹き出た。そこの壁と天井だけ防火対策が施されているため、火事にはならなかつた。

「ああーー危ない！マジックの実験中つていつたる。」

「なんの、実験つて言いました！？！？」

一言一言に怒りを込めて、言い捨てた。

「花火の炎がどこまで大きくなるか…の実験？ほら、ショーディシャンが登場するときによくあるだろ。横から火花が散るのが…」

「今のは、火花じゃなくて、炎でしたよね？」さうして、詰め寄ろうとする。

「それ以上近づかない方がいいって。そこにも、ここにも落とし穴があるから」

「そんな馬鹿な・・・」

「警告したからなー！」

そういうて、壁にもたれて白馬を眺めた。

「……やつぱ、帰りますよ」

「氣を使わて悪いなー」

快斗がニコニコしながら手を振ると、白馬は捨てゼリふを吐いて出て行つた。

「いえ、楽しかつたです「人」の家でこんなもてなしを受けたのは初めてです。「人」それぞれって奴ですね」

ドアがばたんと閉まる。新一に出て行つたことを伝えて、引っ張り上げた。

「腹立つなー。オレが人じやないみたいな言い方しやがつて「特殊には変わりないだろ。来客を炎で撃退する「人」なんて聞いたことないからな。まさか、落とし穴もあるのか?」足下に氣を付けながら、外に出ると床を凝視した。

「はは、そんなんあるわけねえよ!父さんが父さんだから知らないところに一つはあってもおかしくないけど。でも、入つてくる気はなくすだろ?」

「どんな父親なんだよ…

そう思つていると、また誰かが入つてきた。

「快斗ぼっちはまーご無事でしたか。警察に捕まつたりしたら、統

「一様になんてお説びすればよいのか…」

「寺井ちゃん！名前で呼ばないでくれよ！」

「へー。なるほど、玲香のいってた黒羽快斗か！ぼつりやまつて呼ばれてんのか？」

なんで知ってるんだ…快斗は深々とため息をついた。

「申し訳ございません……あなたが工藤新一様ですね。いま夕食を用意致しますので。それと…」

寺井は、快斗に近寄つて何かささやいた。快斗が大きく皿を見開く。

「何、話てんだよ

「それは、また企業秘密だ」

快斗は何も教えてくれなかつた。その日新一は、久しぶりに寺井の持つてきた夕食を食べた。ただ手錠があるので、上着を脱ぐと鎖の部分にひつかかってしまう。着替えることができないため、制服のまま過ごすことになつた。制服に飛んだ血だけ拭き取つて、頭の手当をした。快斗もキッドの衣装のままいなればならず、白いマントとハンドグライダーだけ外した。

「頭の傷、誰かにやられたのか？」

「ああ、舞台に立つてたら突然殴られた」

快斗はしばらく考え込んだ。

「もしかして、オレと間違えたのかも…」

「え？」

「狙われたのはおめえじゃないかもしねえ…よくおまえに変装す

るから」「

神妙に話す快斗。

「狙われる心当たりでもあんのか?」

「ああ…」

数秒の沈黙があった。

「なあ、快斗。さつきからずっと思つてるんだけどオレの変装するの止めてくれよー。向かって食つて食べると氣味が悪いんだよー。」

「それは無理。正体がばれるから。」

新一は快斗を睨む。

「せう怒るなよー。当分離れられないんだから仲良くしようぜ。」

そういうて、手の中から一輪のバラを出した。新一は、チラッとそつちを見て受け取ると、一瞬で見破つたらしくマジックで元通り消してしまう。

「来たくて来たわけじゃねーよ。泥棒と仲良くなれるか!」

そして、そっぽを向いて食べ始めた。なんだか、前にも同じ事があつた気がする。

小さい頃にあつたことがあるような…でも似てるから鏡の中で見ただけかもしれない。

疲れていたせいか、壁にもたれでいると眠り込んでしまった。

だが、災難はこの日で終わったのではなかつた…

手錠にかけられた二人（後書き）

ご都合主義万歳つて感じですね（笑）テレビでマジック快斗の一話を見ただけでよく分からぬのですが、原作と違うところがあつたらすみません。怪盗の部屋を想像して書きました。まだまだ続きます

「名探偵、眠つたみたいだな。」

新一の顔をのぞき込み、本当に寝たのか確認してから言つ。急に脳天気な笑顔が消える。実は、少し作り笑いをしていたのだ。

この勘の鋭い名探偵に、明日の計画についてなにも悟られないように。いつもなら、無事に何事もなく帰つてこられた。今回は違う。紅子の言うとおりに、最大の敵を家に連れてきてしまうという悲惨な状況だ。一人乗れる位大きな羽の、ハンドグライダーを用意してなかつたらどうなつっていたか… 考えるだけで頭が痛い。寺井も同じ事を考えているらしく、じつと黙り込んでいた。

「今日は、大変な一日でしたね。」

寺井が、ポツリとつぶやく。寺井も突然の指示があつたため忙しかつた。

肖像画の偽の絵の上にそつくりな絵を描いた薄い透明の覆いを一枚しててくれ、と言われたのだ。

会場のマジックでは、動くはずのない絵が動いたため、観客は全体が動いたような錯覚に陥つたが、実際に動いたのは腕だけだった。

肖像画の背景は、黒の為ビニールの後ろに黒の画用紙を貼れば、遠くからは気づかないし、透明の覆いの表面も光りにくくなる。一枚目には、絵と同じ手を膝に置いたもの、一枚目には手を挙げた物を書いて貼る。

糸を付けて、手を動かすときにゅっくり取つていけば、動いたように見えるし、薄いため証拠も簡単に回収出来るというわけだ。

快斗が唐突に話しかけた。

「寺井ちゃん、炎のマジック、見てただる?」

「ええ。見てましたよ。」

何を言い出すのかと考えながら相づちを打つ。思い詰めたように話す。

「あの箱が運ばれて来たの何時か覚えてるか?」

「…七時位じやなかつたでしょつか。」

「六時五十六分だよ。だけど、俺は劇団員に変装して六時五十八分にしてくれって頼んだんだ。劇が始まるのは本当は七時からで、その時間ぴったりに出てきたい。炎のマジックは危険だから一分でも早いと危険だからって念を押した」

不可解な表情をして、答える。

「ちょっとした手違いじゃないんですか。」

「それだけじゃない。箱から、油のにおいがした。どおりで炎の勢いが激しいと思ったよ。内側から錠をかけるなんて、打ち合わせでは言われてなかつた。」

「まさか……」寺井が恐怖の入り混じった表情をした。

「ああ。先に錠を外しておくのは簡単だつた。だけど、俺は予告状の時間は守る主義だから、ひとまず下の隠し扉に隠れて余った一分を過ごしたんだ。それがあつたから良かつたけど…なかつたら死んでたかもしれない」

もしかして、父さんが殺されたのと同じ方法で命を狙われていたのかもしれない……快斗にとって、燃える箱に閉じこめられたことよりも、そのことの方が切実な問題だった。

しかも、前日に劇場にいた警備員、その前の日に宝石を守っていた眼鏡の警備員から殺気のような物を感じた。見張られてた様な気もする。

「これ以上事件に関わるのは危険なのは…」

「いや、俺は犯人を突き止めてみせる」

宝石を手の高さに持ち上げてみる。目的の宝石であることは間違いないけど、何がわかるつていうんだ。相変わらず不気味に光つてただけじゃないか。

「盗一様は…やけどを負つて病院に運ばれるまでの間、何度も何度も例の宝石の色、危険だと呟いておりました。」

そんなこと初めて聞いた。宝石の色…? 青か…それとも赤い燐光か? 混ぜ合わせて紫つてことはないよな?

考えるのを止めて、真剣に寺井に頼んだ。

「犯人は絶対この宝石を奪いに来る。それには鍵がいる。舞台の下に落ちた後、誰が取ったかは知らねえが、俺たちよりも先にそっちの方が危険だ。寺井ちゃん、調べて取り返してくれないか。こっちは、明日することがあるんだ」

「わかつております。お氣を付けて、罠にかけられないようにして下さいね。」

「ああ、新一には気づかれてないよな。この状態でいる限りここいつも連れて行かなきゃなんないんだから……」

数分後、快斗と寺井も眠りに落ちて、寒気がするような一日に終止符が打たれた。

見せかけのマジック

朝早く、誰もいない家を出発した。今は、バスの中だ。時間は早いため、車内はがらんとして空いていた。

立つて、つり革につかまながら時計を見た。六時三十分。

寺井は、一人が起きる前にどこかに行つてしまつたらしく、どこを探してもいなかつた。向かう先はハイド・パーク。そう、例の宝石のもう片方が置いてある宝石店だ。

ここまで読めば何がしたいのか分かつてもうかると思ひ。……盗みに行くのだ。この隣の、盗みなんてはたらいたことない——むしろ捕まえる方の、名探偵を連れて。

寺井がこつそり一階にあると教えてくれた。それを言えれば、コイツは反対するに決まつてる。

これから計画を暗示するよつな」とを言わなによつ、言動に気を使う必要があつた。

「用事があるつて行つたけど、どこに行くつもりなんだ?」

新一がいい加減教えてくれと、肩を肘でつづく。ちょっと考えてから、こう答えた。

「寺井ちゃんが、朝ご飯買つてくるの忘れてどこかいつたから、買ひに行くんだよ。これ以上寺井ちゃんに用を頼むのは、大変だらうし。」

「買ひに行くつて言つても……余計とかどうするんだよ。代金払わないといけないだろ。手錠も立つんじやないか?それに……他にもいろいろと問題があると思つけど」

新一と目が合うと、前の女の子が、クスクス笑い始めた。隣の母親もつられるように、笑った。きっと、新一がおかしい訳じゃない。問題は、快斗だ。昨日は着替えられなかつたため、マントを取つただけの真っ白な服のままだつた。

漫才のコンビみたいだ……隣にいる新一も恥ずかしくなつてうつむく。

ところで、なぜ席が空いているのにつり革につかまつて立つているのか。実は手錠をごまかすためだ。外出する時に、まず人の目をひくのは、白黒の制服みたいな格好、手錠、そしてそつくりな顔だ。周りから見たら変わつた双子の漫才コンビ……この「変わつた」だけでも、なくそうして考えたのが、この作戦。

まず手錠のわつかの部分だけは、袖の下に隠す。

新一が天井に腕をつき上の金具に捕まるふりをする。快斗が、つり革、ではなく手錠の鎖の部分にそれにそつくりの輪を、横からはめたものをつかんでいるのだ。つまり、新一が上から鎖を金具に押さえつけ、わつかの部分を快斗が固定している。ただ、つり革の役目をはたしてないので、新一は右へ左へ引っ張られ大変だった。一つだけ革ではなく鎖なのもおかしく見えるが、乗客も少ないし誰もつり革をじつと見たりしないから、辛うじてごまかせている感じだ。

やつと、アナウンスから「次はハイドデパート前です。」という声が流れてきて、バスが停車した。バスから降りて、一人は大きく息をはいた。

「どうするんだよ！バスの中でもこれなんだから、『デパートに入つたらどうなるか』

「……名探偵、笑われる覚悟は出来るだろ？な？」

「は・・・・・？」

嫌な予感。絶対コイツ何かたぐらんでる。

「この手錠をして堂々と歩いてもなにも不思議に見えない方法、考えついたんだよ」

にやつと笑う。ああ、帰りたい・・・買い物行くなんて話を鵜呑みにした俺が馬鹿だった。

少しならず後悔したが、『デパート』に入った。掲示板の後ろに隠れると、突然快斗が大声を上げた。

「こんな時間から買い物に来て頂いた皆さんー今日は十周年ということでの、この時間だけマジックショーを企画させて頂きました。良ければ見ていて下さい。」

突然のことに対する新一…笑われる覚悟つてまさか…

「おい、聞いてねえぞ！マジックなんて出来ないからな！」小さな声で抗議したが、快斗はそんなこと気にもしなかった。掲示板に隠れているので、買い物客は辺りをきょろきょろ見回したが誰も見えない。再び声だけが聞こえる。

「僕たち一人の腕にはなにも異常がないことを確認して下さい。…腕に布をかぶせてカウントします。十、九、八、七」

一人で話し続けていた。快斗は、腹話術に長けていた。声は掲示板からではなく、反対側からしているように聞こえる。「だから、何やつてんだよ。」

唇に人差し指を当てて黙らせた。

赤い布を手錠のかかつた腕にかけ、全員が後ろを向いたとき、さつと前に進み出た。

「三、二、一、」突然こちらから声が聞こえ、全員向き直った。快斗が赤い布を取ると当然、手錠をかけられた腕が見えた。一瞬不意をつかれた顔をしたが、とりあえず拍手が聞こえた。怪しそうに目を細める物もいる。

「マジックになつてねえよ。」ぼそつと呟いた。

「いいんだよ。マジックがしたいわけじゃないんだから。手錠をしてることを印象づけるため……俺に会わせろよ」

態勢を立て直し、大声で言つた。

「あ、手錠を外す鍵忘れた！おまえもつてるか？」

「えー。大変なんだなー。もつてないけど……」

呆れて、他人事のように答える。これには、疑わしそうにしていた人も吹き出してしまつた。マジックの内容より、手錠のこととに注意が向いてどうでも良くなつてしまつたらしい。

「仕方ないから、買い物だけして帰ろうか。」そういうと、何事もなかつたように店内を回り出す。噂はすぐに広まつていく……ため息がもれた。本当に、おかしな双子のマジシャンになつてしまつた。これを本当の「笑われ者」っていうんじゃないのか。

「食品売り場は……一階だな。早く行こうぜ」

あれ、一階だつたような気がするけど。注意する気力もなかつた新
一は引っ張られるがままについていった。

見せかけのマジック（後書き）

快斗のキャラが……三枚目になってしましました。これ以外に思いつかなかつたです、すみません。続きを読むで頂けると、嬉しいです。

エスカレータにのって、一階へ向かつた。新一は、一切まだこちらを見ようとした。この日、この探偵は一度不機嫌になつたら、なかなか元に戻らないといつことがわかつた。

「よく、堂々と顔を上げていられるな。神出鬼没の大怪盗ついわれるくらいだから、なにか画期的なマジックを用意してゐるのかと思つたのに」

「まあ、そう怒るなよ。これで、手錠しても周りにおかしな田で見られることもないんだし」

「おかしな田で見られてるよ……マジックで手錠を使つたのに、鍵を持つてこなかつたドジなマジシャンになつてるだろ……」

新一が、怒鳴る。痛いところをつかれた。

「怪盗だったら、ピッキングとか出来るんじゃないのか。」

探偵には、似合わないことを聞いてくるので、よつまど嫌なんだろうなと思つた。

「そんなの昨日さんざん試したよ。でも、この鍵、細工されてて全然開かない」

「あっ！」新一が声を上げた。

「……まさか細工したのって」新一が、後悔したような表情で無言で頷く。

「もしかして、手錠が簡単にかかりやすくなるよつとしたのも？」

「ああ。」

「ずっとおかしいと思つてたんだよ！なんで、手が当たっただけで手錠が簡単にはまるのか。強く押したわけでもないのに手錠の方が滑つていつただろ」

「……油を差したんだよ。マジックの小道具の横に置いてあつたから」

こんな事にならなければ細工しておいて正解だったのに。皮肉なことになってしまった。

エスカレーターから降りて、右に曲がる。

一階の宝石店まであと少しこじこじながらまで来た。

とこひが快斗はこじで肝心なことを思い出した。

いつもなら絶対に忘れないもの……予告状を出してない。予告状を出さない怪盗なんて、その辺の泥棒と一緒にだ。絶対に、突然現れて盗むなんていう、強盗みたいな真似はしたくなかった。

快斗は、トイレに行くと言つて、新一を個室の外で待たせ、その間に無地で大きめのメモ用紙にボールペンで書くことにした。

いつものと比べるとお粗末だが、しうがない。

これで、怪盗に扮して盗みをはたらかなくても良くなるかもしけないのだし。

ペンをしまって、ポケットに予告状を滑り込ませると、外に出た。周りからは新一の言つとおり、確かに、おかしな目で見られている様だった。

噂は、広まつていて人とすれ違つたびに忍び笑いが聞こえる。……もう少しの辛抱だ……といいけど。

宝石店の隣を通りると、もう片方の宝石はやっぱり目立つところにあつた。

真横に来たときには、じつやうと予告状をとばして、ガラスケースに置いた。

犯行時刻は一時間後。こんな急な時間は初めてだ。

大慌てでやつてくる中森警部を思わず心配してしまった。おそらく昨日も眠れなかつただろうに。親父がそんなんで青子も大変だつたうつな。

まあ、とうあえず、新一を噂の届かない場所に誘導しよう。……そう思つた矢先、ポケットの中で携帯が鳴つた。昨日没収した携帯だつた。

咳払いをすると、口調を真似て話し始めた。新一がこつちを睨む。
「はい。え? ?どなたですか?もしもし! ?」

相手は外国人のようで、片言の日本語でなにか、まくしたてた。名前を名乗るのも忘れて、叫んでいる。早口で聞き取りづらい。外国

人の友達でもいるのか?と考えたが、あまり親しい人に話すという感じでもなかつた。

なにやら酒の名前を叫んでる。さては、よつぱらつた外国人の間違い電話だな——そう思った。仕方なく英語で質問する。

「I'M AFRAID YOU HAVE THE WRONG NUMBER? (間違い電話ではありませんか?)」
「NOOOOOOOOO!—!—!違いまーす!」

耳が痛くなるほどの中が返ってきて、びっくりして携帯を放り出した。じゃあ、誰なんだよ!

放り出した携帯を新一が見事に、キャッチした。
さすがに驚いた顔をする。「出てもいいよな?」電話相手の迫力に
圧倒されながら、頷いた。

しばらく受話器を耳に当てる。

「ジョーディ先生じゃないですか?—」

それは、帝丹高校に英語の教師として潜入したFBI捜査官、ジョーディからだつたのだ。

下手な日本語は、実は演技だと言つことが以前調べたことではつきつしている。

「どうしたんですか。そんなに慌てて……それになんて電話番号知

つてるんですか！？」

「緊急事態なのよー！FB工本部に、じつしても必要だからって頼み込んでいろんな携帯会社にハッキングしてよつやく手に入れたんだから！」

そんなこと出来るのか……？冷や汗をかきながら、電話を強く握りしめた。

「朝、私のところに黒の組織……危険な組織に潜入させてる、キルっていう仲間から連絡がありますーた！なんでも、殺したはずの工藤新一が生き返ったとか。暗殺計画を立ててるって。心臓たりないの！？」

聞いてるついに、顔からどんどん血の気がひいていく。心臓たりつて、ありすぎて困る。でもジョディ先生にとつて、俺はまだ話したこともないただの生徒だろう。それに、こんな短時間じゃ遊園地で一番初めに遭遇した事件から、最近のことまで、とても説明しきれない。

「……いいえ。ないです」

「やつ、じゃあ、すぐにそっちに向かつからー、すぐに帰つて。お隣には怪盗キッドがいるよつむ、帰れなくとも、とにかく気を付けてね」

電話が、ぷつっと切れた。

「どうした、新一？」快斗が顔をのぞき込む。

「『Jさん』にいる場合じゃな……組織が動き出した、どうして、分かつたんだ？」

呆然として呟く新一。快斗は

「何だかわからんねえけど、これじゃないのか？」と売り物の、なぜかいつもより分厚い、新聞を掲げた。

新聞の一面には、大きくキッドの盗んだダイヤがのっていて、細かな字が並んでいた。一面を開いてちらりと見ただけで、『ちょっとした。

一面、二面……五面までキッドの話題ばかりだ。それには当然自分のことも書かれていた。組織が見つけない方がおかしい。

蘭に服部、園子は無事だろうか。もしかして、『J』の居場所もばれてるんじや……いろんな事が頭に浮かんでは消える。だが、それよりも強く新一の目を引をつけたのは見出しだった。

そこには大きく、「怪盗キッド、かの名探偵工藤新一を誘拐！？」
とある

「なんだよ、これ。誘拐されたことになつてるのか……

内容が、とても気になつたので、一部買って広げた。その一部を要約するといつだ。

「五日前、キッドからある宝石店に展示してあった、ホープダイアモンドを盗むと予告状が届いた。

宣言通り、昨夜夜七時に米花劇団のショーの最中に現れた。だが、同じ劇場に来ていた名探偵、工藤新一が逮捕しようとしたところ、手錠がキッドと新一の腕に片方ずつはまるという異例の事態が起つた。

インタビューによれば、工藤新一はその何田か前から行方知れずになつており、その間キッドが彼になりすましていたことが分かつた。

「協力」水樹玲香様・服部平次様

警察は、怪盗キッドが犯した犯行なのではないかという見方で調べを進めている。警察は何をやっていたのか……」「出版、日紫佑帆

〔帆〕

「あーあ、窃盗罪の上に未成年誘拐罪までかけられてるよ。俺も未成年だつて……ほら、この日紫佑帆つていう記者、予告状出すと毎回くるんだ。それも、常識はずれな奴で警察が追いかけてこられないのをいいことに、捕まえようとせずインタビューしに来る。まあ、こっちには好都合だけど。」

新一は全く聞いてなかつた。ため息をつくと氣づかず、話し続ける。

「これは、傷害罪もかけられてるひとつとかな。俺じゃないんだけど……」

その下には、キッドの行動を予想する評論家の意見・インタビュー。表が載つていて。読むだけで、批評家が足やを組んだり、もつたい

つけて話す場面が浮かんでくる。

五月一日・キッドの予告状が警視庁宛に届く

五月一日・大阪の警察署に同じ文面が送られる

五月四日・宝石を盗んで逃げる

五月五日・ショーに現れ上記の犯罪を犯して、窓から逃走

評「キッドは、今度の宝石にはやけに拘つているようですね」

記者「そうですね。盗んだ後にすぐに返らずに最終日に現れたこと
も気になりますね。」

評「そう、誰かに見せつけているようだ。警察や探偵への嫌みとも
とれます。大阪の警察署まで予告状を送ったのは非常に興味深いで
す。キッドが米花劇団を選んだのも、偶然ではないでしょうね。絵
の裏の部屋はなんのための部屋なのか……なんだか、キッドの犯行
はまだ終わらない気がしますよ。」

記者「なんでですか？」

評「実は、あのホープダイアモンドのことです。半分しかないと言
われていまが、もう片……

バリバリッと音がして、快斗が新聞を取り上げた。勝手にカバンに
しまった。

「なんで、取り上げるんだよ。俺が買ったんだから返せよ。」

「文句が言える状況かな？ 盗むと思うんだったら自分で見張ってた
らしいだろ」

さらりと言い放つたが、内心焦っていた。予告時間までいつのまに
か三十分をきつていて。それまで、新一に噂を聞かせずにいられる

か。

今頃、野次馬で囲まれているあるいは宝石店を避けて、一階に下りた。
ゲームセンターなら音がうるさくて人の声も聞こえないかも知れない……

ぼんやりと青子と朝学校に行く約束をしていたのを思い出したが、
そのことを頭から振り払つて、早足でそつちへ向かった。

マスマーティア（後書き）

投稿遅れてしまいました！

次は、青子の話です。実は、予告状を忘れてたのは、キッド
じやなくて作者の方です（汗）

作者が
登場するわけにも行かないで濡れ衣を着せてしました。怒つ
てるかな……笑

まだ、予告時間まで
余裕があるので、次では宝石店までたどり着かないかも知れません。
土日の内どちらかには、投稿したいと思っています！

早朝六時三十分、青子は学校に一緒に行くという幼なじみとの約束をすっぽかされて、バス停までとぼとぼと歩いていた。一絶対来てつていったじゃない……今日は、イメチョンしようと思つて、長い髪を結んできでから、快斗に気づいてもらおうと思ったのに。まあ、別にあんな自己中な奴ほつとけばいいもんねー。

すっかり機嫌を損ねて、「コムもヘアピンも外してしまった。快斗がいなかつたため、だいぶ早くバス停に到着することになる。青子はいつも、寝起きの悪い彼をインターフォンでたたき起こすために二十分は余裕を持つて来ていた。バス停にいる間、音楽でも聴こうと思っていると、待っているのは一人だけではない事に気づいた。——紅子ちゃんだ。

「おはよ～」嬉しそうに声をかけると、向こうにも挨拶する。
「どうしたの？こんな早くに」青子が聞くと、紅子は意味不明な言葉を返した。

「実はね、今日の朝、早めにバス停に着いたら面白いことが起つて、お告げがあつたの」
「……おもしろいこと？」

そつか、紅子ちゃんは自称占い師だったつけ。快斗にいわせれば、マジックには必ず種があつて、あんなの子供だましらしきだ。

「で、あなたはどうして、早く来たの？」

「いつも寝坊する快斗が、今日に限つてあたしよりも先に家を出ち

やつたのよ。こんなんだつたらもつと寝とナばよかつた。」

少し眉をひそめる。

「へー、快斗君いないのね。じゃあ、彼は欠席よ。」

「なんで?」

「ああ……する休みじゃないかしら。後でお得意のマジックで、出席名簿をすり替えたりしてしまかしたりしてね。私の予想では、もう一人欠席者がいるわ」

「なによそれ~」

真面目に取り合ってくれない紅子にふくれつづも、快斗ならやつそうだなど考えたりしていた。

まさか、あたしと登校するのが嫌で先に行っちゃったのかな。
もしかして昨日、米花劇団のショーカーの方が快斗のより上手だつて宣言したの、まだ怒ってる?

米花劇団と言えば、お父さん、とうとう朝になつても返つてこなかつた……さつと、またキッズにしてやられたとか言つて帰つてくるのよね。

話すこともなくなつてしまはうボーッとしている、近くの大型パーティの方向からクラスメートの桃井恵子が走つてきた。

「青子ちゃん、早くパーティの方に来てよー。」

「どうしたの?」

「ハイドデパートにね、双子のマジシャンが来てるって話をきいたんだけどね。手品に手錠を使って鍵を忘れて手錠のかかったそのまままでパーティにつづつこいつるんだつて~見に行ひつけー。」

青子「見に行こうって、動物園じゃないんだからじつと見たらかわいそうだよ。」

紅子「おもしろそうね。でも、どういう手品だったの？」

恵子「それが、みんなわかんないって。でも、双子は本当にいるみたいだよ」

手品が分からない？ 变ね…種が分からないうて事はあるけど…青子もついていくことにした。

三人は、店の中にはいると、辺りをきょろきょろ見回した。左は花屋、正面はゲームセンター、右はエスカレーターだ。学生が朝からゲームセンターに寄るのはまずいわよ……全員暗黙の了解でエスカレーターの方へ向かつた。

さうに右に曲がると、そこには人だかりが出来ていた。

「ねえ、あれじゃない？」 「あんなに人が集まるもんなの？」

口々に言いながら、人混みをかき分けると警察が道を封鎖していた。

その中には、青子の父親、中森警部の姿も…

「おとうさん！ また事件なの？？」

寝不足で畳の下に隠の出来た、中森が振り返り、だるそうに言った。

「青子、こんなところでなにをやつてるんだ。する休みじゃないだろ？ 今は忙しいんだ、もしする休みなんかしたら」

「今何時だと思つてゐるの？ ちょっと寄つただけ。」

「なら良かつた。おまえは、まだ新聞読んでないだろ？ が昨日の失

敗のせいで、一晩中キッド対策会議だ。ほとんど眠つてないのに四十分前に予告状と来てゐる。追いかける方の身にもなつてくれ」

そんな泥棒はいないと思つけど……だが、もちろん口には出れない。

「お父さん、今日はちやんと捕まえてね！」

青子は、キッドを見つけたらこいつした方がいい、手品には必ず種があるからなど快斗の言葉を利用して熱弁をふるい始めた。

「ねえ、紅子ちゃん」恵子が、袖を引っ張る。

「もう、五分でバス出ちゃうわよ。」

「そうね、青子ちゃんには悪いけど、先にこいつが。あのままじや当分動きそうにないし。」

紅子は、肩をすくめた。やっぱり、欠席がもう一人でたわね。もう立派なずる休みよ

ふとポケットに手を入れると、何かはいつている。

それは、反対向きに入っていたタロットカードだった。

「塔」

逆位置の場合、緊迫、突然のアクシデント、誤解を示すカード。

塔の上半分から炎が出て、てっぺんの王冠が崩壊している絵柄だ。

寒気がしたが、占い師が運命を変える」とまではできない。後ろを

振り返りながら、デパートを後にした。

「わせ × 野次馬（後書き）

文章短くなつてしましました。

次回は、また快斗の話に戻ります。読んで頂いた方の中には、タロットカードの場面でなんとなく予想がついた方もいると思います。

また誤字脱字・感想・評価があれば、教えて下さい

混沌として、のび恐怖

「さてと、ゲームセンターに着いた」快斗は満足そうに辺りを見回した。

「こには、隣の客の声も、ときれどきれにしか聞こえなかつた。どうやら、この選択は正解だつたようだ。快斗だつて、自分の選択に不安を持つことがある。彼にとつて、珍しいことなのだが、今日はとなりにやつかいな奴がいるので緊張しつばなしなのだ。

俺「怪盗キッドは、世間から大胆不敵といわれている。そして、だいたいの行動は、突然の事にも、冷静に対処出来るように、脱走可能なルートや警察の盲点……などなど事前に調べていた。予想しなかつたことが起きた時、とにかく捕まらないため。

ただ、こんな計画、安易に誰かと相談出来ない。
いつも、一人で決めるか、寺井と協力していた。

だから、たまに予想出来ないことが起ると、宝石を後回しなしなくちゃいけなくなるのだ。

飛行船に乗つたときも、強力な細菌をもつたテロリストと遭遇するなんて、絶対に予想出来なかつたし。そして、いま名探偵と手錠でつながつていいという状況も、予想していなかつた。

今回ばかりは、なにが起こるかわからない。

あの、新聞の批評家のコメントを読んでたときもそつ。もつ少しのところで回収したからばれなくてよかつたけど、最後まで読まれてたら即作戦中止だ。

新聞の一覧には、「（わざわざ）同じ文面が大阪警察署に送られる」と言つのがあつたが、批評家の考え方通りこれも作戦の一つ。

ところで俺は、東京出身と言つこともあり、盗みをはたらくのは主に東京付近だつた。

大阪を悪く言つ気持ちはないが、東京から遠い場所だから、キッドに対する「免疫」がない。

彼らは、東京の警察と比べてだまされやすいことになる。大阪人の勢いに負けて、東京の刑事がつられるることを期待していた。

一週間くらい前に、偵察に来たときには、屋上、階段などをいろいろ調べたが、トリックに使えそうな物は少なかつた。まあ、忍者屋敷のようなデパートがその辺にゴロゴロしている方がおかしい。

そういうこともあって、今日は仕掛けを家から持つてきた。

例の花火と、屋上で見つけた物を使って、盛大に姿を消してやる「じゃねーの……」

マジックの事を考える快斗の目は輝いていた。

しばらく歩いて、時間をつぶした。新一が、このゲームもあつちのも嫌だというので、俺は新一の携帯をいじっていた。

適当に歩き出すと、途中でうでが何かに引っかかつて止まつた。はあ、何に引っかかったのかは分かつてゐるよ。

「腕が動かねえもん。手錠だ」

新一が、わざと柱に引っかかる場所を通りて動きを止めていた。

「楽しそうだな、ぜってー何かたくらんでるだろ。買い物に行くつていいだろ！…さつきみたいなことは嫌だからな」

「ちょっと一緒にいたせいで、だいぶオレの性格が分かつてきいやがる。その洞察力には拍手を送りたいぐらいだが、まだ知られるわけにはいかない。」

「ああ、楽しいぜ。最近の携帯ゲームは「新一が携帯の画面をのぞき込んだ。……」の「怪盗ロワイ」お宝強奪戦」しかも結構強い。短時間でかなり攻略していた。

ゲームの中でも怪盗かよ——呆れた表情をした。

「はは、おまえは楽しくなれそうだな。いいさーー階に買こに行こ

う

「あつたりめえだろ、ライバルだと思つてた奴と、ゲームセンターなんて……」

「わかつたわかつた。言わなくていいよ」

（それは、こっちだって同じなんだから……）

まだ、不機嫌な名探偵をなだめて、引っ張った。それも、必要以上に周りを警戒している。

「あのな……」まだ、言いたいことがあるらしかったが少し考えこんで止めてしまった。

言いたいことあるならまづきつと言えよな……

新一から田を離して腕時計を見た。六時五十分、そろそろだ。

* * * * 作戦開始！

まず初めにあるものを書いた紙をゲームセンターに置いていくことにした。

近くには、授業の一限田を選択しないからか、こんな時間から数人の大学生が集まっている。

紙を置くと、彼らが騒ぎ出さない「ひじかたせ」と別の場所へ移った。新一には、一階を一回りしたら一階へ行くとでも言つとこー。

ただ、一回りすると言つても、本当の食品売り場は避けて通るけど……

次は、花屋で同じ紙を落とした。出てきた、女性店員が花に何か引っかかるのに気づいた。じつと見つめると、いきなり金切り声を上げた。そして、もう一度確認して少し安心したような顔をしながら、店内の奥へ駆け込んだ。

「快斗、あの店員、いきなり叫びだしたけどなんなんだろ？」

誰でもそう思うよな、聞かれたときのために用意しておいたセリフがある。

「宝くじがあたって、ビックリしたんだる。紙を見てたし」

「……それにしては反応がオーバーというか、恐ろしそうな顔して

「卒倒しそうだつたぜ」

「それは、気のせいだ。よっぽどの大金が当たつたんじゃねーの」

「こんな事をあと三カ所でした。だんだん一階が騒がしくなつてくる。充分だと思ったときに、エスカレーターの方へ向かつた。それはそうと、なんだか、新一の表情が暗い。何かを打ち明けようとしているような、そうでないような…俺に見られてることに気づいた新一が口を開いた。

「あのな、さつきの電話のことなんだけ…」

まさか、携帯電話を返せつていうのか…？それは出来ない相談。さつきのは緊急事態だから代わつたけどな。そこで、強引に話を変えた。

「ああ、いろいろ見て回つたとこだしそろそろ買い物して帰るか」「…」

あれ？なんにもお咎めなし？話しが聞けよとかいわねえの。新一は話す気が失せたようだつた。大事な話だつたのかな…

でも、そうじゃないこともあるから話しかけられない。いくら敵の探偵とはいえこんなに近くにいて辛い顔してるのに。つぐづく嘘をつくのが嫌になつた。悪いな、オレのせいだ。

そう思いつつエスカレーターに足をかけた。

オレの予想では、二階にいる人の数は三分の一くらいに減つてゐる。

* * * * 青子の勇気

五分後……一階ではまさに不思議な事が起っていた。どんどん人が一階に移動している。

もう、刑事をのぞけば十人くらいしかいない。

そのうち数人も様子を見に一階へ行こうとしていた。

青子は当惑した。父親の方も、何人か階下に様子を見に行かせ、連絡を取っている。

「なんだって！キッドの予告状のマークが入ったカード！？それが落ちたのか？」

トランシーバーの音量を大きくした。

「はい、そうです！ここにいる女性店員の方が発見しまして。その前にはゲームセンターで大学生が」

また何人か刑事を向かわせた。トランシーバーの相手が店員代わった。

「初めそのマークを見たとき、家の物が盗まれるんじゃないかと思つて、立ちくらみがしましたよ。よく考えたら、キッドが盗むのは宝石ですし、文もなかつらので安堵したんです。とりあえず報告しなきやいけないとつて…あつ、警部さん。向こうでもカードが見つかつたらしいですよ。みんな騒いでます。」

確かに騒がしくなってきた。女性もそつちに行つて、話し相手は、

刑事に戻つた。

「中森警部！大変です。一階の五カ所からカードが見つかり、店内が混乱します。そのカードの位置が上から見ると星形になつているとか…学生達が新しい予告状の推理をしていますよ」

警部はいきり立つて言つた。

「キッドの目的は一階にあるんだな。こいつじゃいられん！いま私もやつちへ行く。」

そういうつて中森警部は走り出した。部下もその後に続いた。青子も追いかけようとして——踏みどじまつた。

嫌な考えが頭をよぎつた。

出来れば後ろを振り返りたくない。さつき何人の刑事が走つていつた…！？

深呼吸して回れ右をすると、

宝石店の前には、誰もいなかつた。

「お父さん！止まつて！戻つてきてよ」

青子は頭を抱えた。一階の騒音で何も聞こえていない。キッドはこうなることを予測していたのね。いまは、一階には誰もいない。

あと、一分しかないのにここには私一人。

私が守るしかない。店の外に展示してあつた宝石を素早く店内に隠す。

そして震える足を動かし、店にはいると内側から鍵をかけた。
勇気を奮い起こして、自分自身も宝石店の中のレジカウンターに隠れた。

護身用の長い電子警棒を握りしめて。

混沌といい、のび恐怖（後書き）

遂にここまで来ました！まだまだ、続きます。

私は、大学のこととはよく分からぬのですが、受けたい科目を選んで一限目を行くかどうか決められる、と聞いたので・・・

読者の方から固有名詞は伏せた方がいいと助言を頂いたので訂正しました。また、あれ？と思ったことがあれば教えて下さい m(_ _)m

感想をたくさん頂いて本当に嬉しいです
次回も是非読んで下さい

今快斗は、宝石店に着いたところだ。不思議なことに、店外にあつた宝石は全て片づけられている。これなら、新一が見ても宝石店だとは思わないだろう。——中森警部も面倒なことするなー。中に隠すなら、目当ての宝石だけでいいのに。この宝石店も寂れているようだつた。周りが静かなので、いつそう寂しさを感じる。新一も、二階に自分たち一人しかいないのを気にしていた。視線を無視して、店で止まる。

「おっ、この店テープが張り巡らされてる。探偵君が得意な事件だぜ。」

「マジかよ、でも今日は何も出来ないから、早く帰ろ。」「ちょっと見てこいよ」

ノブに手をかけると、開けようとしたが鍵がかかっている。え？さつきは鍵がかかってなかつた。中森警部も用心深くなつたんだ。

「な？鍵開かないだろ。」まづい、せつかくここまで来たのに。新一が、二階を見渡した。

「それにしても、なんで、こんなに客が少ないんだ。今日セールだつてのに」

「事件が起きて、警察が避難させてんだよ。ほら、一階に刑事がいるの見えるだろ？」エスカレーターのところへ戻つて下を見た。上から覗いてみて快斗自身ビックリした。……なんて数だ。

キッドが人質を持っていると勘違いしてやがる。これは本当に捕まるわけにはいかない。青子にどんな顔をされるか……つばを飲み込んで、新一を盗み見ると、彼の目は鋭く光を放つていた。

ふつと笑つと、「やつやく何かしでかしたのかも、しれねーな」小さく意味不明なことを呟き、急に乗り気になつたらしく、逆に快斗を引っ張つて店の前に戻つた。

快斗はカバンからピッキング道具の箱を取り出した。彼が何でそんな物持つてきたんだと疑わしそうにする。俺はいつでも用意周到なんだよ！一分もかかりず、鍵がカチッと音を立てた。ギーッと音と共に、扉が開く。ここまで来ればこいつのものなんぞ。

中にはいると、なんと店内の宝石まで全て片づけられている。中森警部つてこんなに用心深かつたか！？と、とにかく計画通りだ。

「事件ついで言つても何もないぞ」
「やつだな」じばりく探す仕草を見せた。

「なー、ずつと思つてたけど、この近くに宝石店があつたと、思つたけど氣のせいだったな。ちよつと安心したよ」あつたんだよな、目の前に。また罪悪感を感じる。でも、引き下がることはできない。

新一が退屈そつこのびをしている。いつやつてこうと、楽なことこ聞こえるけど、うちの腕もびと一緒に上げなきゃいけない」とを自覚してくれ！

その隙に、少しかがんでいた。

「おー、こんなところに何か落ちてる。暗号…かな」元から持つていた紙を、拾うふりをして渡した。彼は受け取ると食い入るよつて見つめた。

しばらく、沈黙が続いた。少なくとも暗号で頭が一杯の新一にはそう思えた。しかし、本当はかすかに「ゴヤヤヤ」という音が聞こえていたはずなのだ。

文二に、字、田注。田注は注田のことだし、一つの文の字に注目……暗号文は「文しかねーだろ」が。またよ、反対から読むと…

注田字に「文。あまり意味が変わったとは思えなかつた

あつ……

田注　注目　に字　字に　文二　—文

一瞬頭の中で文字が動いたような感じがして、文字が読めた。

—文字に注目

上のアルファベットを並べ替える。GO ME NN NA

こんな暗号、誰が作ったか、考えるまでもない。顔を上げると、田の前にいたのは、快斗ではなくキッドだった。カバンの中に、マントをしまってあつたんだな。

怪盗キッドがじつめを見た。

「意外と解くの早かったな。さうすが、キッドキラー。」

「……今の内に忠告しどくからよく聞けよ。オマーが手品か何か使つて逃げようとしたとき、俺が大声で種を言えば、簡単に捕まるんだからな」

「わーつてるよ。急いで逃げるこにする。その前に警官が来るかどうか

とうとう我慢の限界に達して、低い声で囁つ。
「じゃ、警官が来る前に、俺が許すかどうか考えてみろ。全力で阻止してやるぜ、田当ての宝石は手に入れてないんだろう？」
田の光が鋭さを増した。

重苦しい空気が流れ始めたその時、カウンターの方からガタン！と音がした。

緊迫×2（後書き）

話し言葉ばかりの文、…本当に駄文ですね

だんだん改善していきたいです！

後ろのカウンターで突然ガタン！という音がして、一人ともびくつと振り返った。カウンターにずっと隠れていたらしい。出てくるタイミングを推し量っていたようだつた。誰かが、こつちに向かって、警棒を構えて立つてゐる。（腰にはめられたか……）

逆光で、よく顔の見えない相手が叫んだ。

「怪盗キッドね！やつぱり来るとと思つた。みんなはまだされても、私はまだされないから…」

この声、青子の声と似てる…相手が一步近づいた。顔がよく見え——
「あ、青子…？」
「何で青子の名前知つてんのよ…」
「い、いや、こんな晴れた青い空なのに、お嬢さんにそんな物騒な物似合いませんよ」

無理やりじまかす。平静を装つていたが、動搖を隠した声だと新一には分かつた。（今度は何を隠してんだ？）

「適当なこと言わないで！今日は曇り空なんだから」
おつと、運が悪い…

「なんで、田的が一階になつて分かつたんですか？」

「友達で、マジシャンの快斗が、人の田をそらさせたためにね…とか何とかしゃべつてたから」

青子がさうに近づいてきた。お互いの顔がよく見えるところまで来た。青子が、目を見開く。

「快斗！？」正体がばれた？しかし、青子はじつと新一を見つめていた。新一は、といえど、同じように驚いていた。

「蘭？」「快斗よね？何でここにいるの？」「オメーーー何で…」「快斗はなんでキツドに捕まってるの？」

同時に質問していく全く話がかみ合っていない。真ん中に割つてはいる。

「静かにしろー。一人とも、なんか勘違いしてる！って聞いてない相変わらず、無意味な問答を繰り返している一人を見ていて、あることに気づいた。例の宝石、青子が持ってる……ショックを受けた。青子にとって、俺は敵なんだ。今、青子は別のこと——俺のことに気が取られている。今なら、不意をついて盗れるだろ？恐る恐る静かに手を伸ばした。もう少しで手が届く——といつときにも、横から腕が伸びてきて俺の手を掴んだ。新一が、オレの言動をめざとく見張っていたのだ。青子がハッとした表情をした。新一は、全然手を離そうとしなかった。これは、先に逃げる方が先決だな……」

そう思つていると、一瞬後ろへ下がった青子が、もつ一度前に出てきて、ためらいながら俺の手に宝石を置いたのだ。

「えつ……いいのか」何で青子が急に気を変えたのか。啞然とした。

「快斗を返してよ」少し涙ぐんでいった。手錠をちらりと見て付け足す。

「今は、無理でも」

(青子、そんなに俺のこと心配してたのか・・・迷惑ばつかかけでんな。)目頭が熱くなってきた。でも、いま俺はその幼なじみを連れ去つた敵。複雑な気分だった。

「もし、快斗のせいで宝石が手に入らなかつたらひどい目に遭わされるんじゃないの?」

俺は、不安に駆られて後ずさつた。早く、帰ろう。ところが、かの名探偵が余計なことを言った。

「あの、おれ快斗じゃねーよ。」その場の雰囲気が張りつめる。

「どうこいつ」と? 青子の声が、震えた。

「つまり.....快斗って奴と俺は、似てるって事だよな。キッド?」

青子が、警棒をぎゅっと握りしめた。鋭い目でこっちを睨んだ。新一も、直感的にこれはやばいと感じたらしい。蘭が怒ったときとおんなじ目だ。こういう場合、怒り出すだけではすまない。その上相手は、強力な武器を持っているのだ。一人は慌てて廊下に逃げ出した。

「待ちなさいよー。」大きな声に一階にいた人達も少し静かになる。事態に気づいて、走つてくるのも時間の問題だつた。最悪だ。早く逃げねーと

目指すは屋上 静まりかえつた一階にバタバタという音が、やけに大きく響いた。

緊迫×3（後書き）

この場面、まだ終わりません。青子と、快斗もそのつむじ仲直りさせ
ようと思つてゐるので安心して下さい。

二人は、屋上まで逃げた。青子は途中で遠回りをしてまいた。でも、父親からキッドの事を何度も聞いてるため、どこに逃げたかなんてすぐに感付くに違いない。

走りながら、新一は、快斗の事を考えていた。あの女の子は、十中八九快斗の知り合いだ。しかも、相当怪盗キッドを嫌ってる。だったらなんで怪盗キッドを続けるのか?と不思議に思えてならなかつた。

また、快斗は悪い奴じやないいつ予感がするのも確かだつた。

階段をのぼりきつて、屋上のドアを開けると、外には、雨雲の立ち込める暗い空が広がつていた。

すると、どこからかバタバタバタと風を切る音が聞こえて、眩しいライトが田の前照らした。目がちかちかして手をかざす。

「おい、あれ取材へりか」「みたいだな。相変わらず、情報つかむの早えー」

「そんなこといつてる場合か!まあ、俺は関係ねえしかまわないけど」

光に目が慣れてきた。

当然に俺は、今まで取材へりを探偵の側からしか見たことのなかつた。それに乗つてキッドを追い詰めようとしたこともあるくらいだ。しかし、今回は違う。

怪盗の目線からみたへりは、思った以上に滑稽だった。——移動ならハンドグライダーの方が、身軽だな。

そう考えてから、そつとして頭を振る。どうしたんだよ。こいつのせいで、俺まで怪盗になつたような気分だ。

怪盗の方を見ると彼は得意げなポーカーフェイスをしていた。それが、得意げに見えたというのもおかしな話だが、ポーカーフェイスというのは、悲しそうにも、嬉しそうにも怒つてゐるようにも見えるものなのだ。

俺は、後でこいつが何を思つていたのか知ることになる。へりから、記者が降りてきた。この人が、常識知らず、恥知らずの新聞記者、日紫佑帆だぜゝ快斗がご丁寧にも、肩書きをつけて説明した。

眼鏡をかけ、背が低くひょろりとして、スーツはだぼだぼ。いかにも天然そうな出で立ちだ。幸いまだ警察はこないらしく快斗がさつさと逃げようとするが、佑帆は、この細い腕のどこにこんな力があるのか、といふくらい強く、新一の腕をがしつとつかんで引き戻した。

仰け反りそななりながら、振りかえる。彼女のに向き直るや否や、マイクを突き付けられた。

「あなたがキッドの助手といわれる江藤淳一ですね」
は……？ 助手？ しかも名前全然違うし……

虚をつかれて目をしばたいていると、ディレクターがでてきて横からなにかささやく。彼女は不機嫌そうに言い返した。

「名前？？ ビーでもいいじゃない！ 今、取材中の…助手じゃない

！？それはきっと警察の捜査がおかしいのよ

おこおい……大丈夫かこの記者。快斗は、慣れたよつな顔つきですましている。それにもしても、あんだけ力があるなら、自分で捕まえればいいのに。

新一がなにも答えない、時間の無駄！とばかりに快斗にマイクを向ける。

「今日も、予告状通りに成功したんですね！今のお気持ちは？警察への伝言があれば何かどうぞ！」

たちまち質問攻めにあつた。さあ、どう答えるんだろう・・・。
「や、うですね、もうあなた方をわざわざいらすこともないかも知れませんとか言つていてください」

適当に応えて上手く一つ目の質問をスルーした。さすがに答えられる訳ないか。せりひ、一二三問聞いて、満足したのか引き上げていった。

耳を澄ますと、「これでまた視聴率二〇・一だ」と聞えてくる。
つたぐ、じつもよく我慢してられるよ

「お客様には手厚くしなくてやな、テレビはたくさんの人人が見るんだし」

考えを読んだよつて、言った。そりゃ、じつ苦労様。

快斗は、嵐のような報道陣に囲まれて自分の立場を忘れていた。屋

上の扉があいてよつやく我に返つた。青子が息を切らして、走つてくふ。

「怪盗、キッド、はあ、いい加減にしなさいよ」

「……」

「いま、白首すれば、何もしないわ、警棒も、捨てるから」「残念ながらそういうわけにはいきませんね」

一瞬迷つて青子が、警棒をひっさげに振った。屈んでよける。次は横から——数十秒間こんな状態が続いた。

ところで、これも、後で聞いたことだが、青子には本気で当てる気などなかつたらしい。青子は、そんな暴力的な性格ではない。あくまでも、警察が来るまでの足止めだった。一発だつて当たるとは思つてなかつたのだ。ましてや、キッドに避ける気がないなんて……

「人のもの盗むなんて、最低よ！」
「よく、分かってるわ」

青子が、また警棒を振り下ろすと、今度はバシッと音がなつた。青子がギョッとしてまじまじと見ると、快斗が警棒を手の平で受けとめていた。受けたのは、白い手袋越しだつたが、それでも痛かつただろう。彼は、顔をしかめて、腕を引いた。彼女の手から快斗の手へ警棒がするりと抜ける。青子は、殴られる——と、目をつぶつた。

なにも起こらない。彼は、カラソとそれを放つた。

「バカ。似合わねーつて言つたろ

「なによ！なんでよけないの！紳士ぶつりやつて。悪者なら悪者らしくしないと…」思いに捕まえられないじゃない

「わるかつたな。俺による権利なんてない気がしてよ」

青子には彼のポーカーフェイスが悲しそうに見えた。

屋上の階段から、足音が聞こえて、中森警部と部下がやつて来た。涙目の青子と床に落ちた警棒を見て、娘に駆け寄る。

「おのれ、怪盗キッド！青子になにをしたんだ！」

彼は疲れたような動作でどきどきとする新一を引っ張り、無言で一人から離れると、花火に火を付けた。すぐ煙が漂い始め、角においてあつた消火器を蹴りあげた。それは、爆発して白い粉が霧のよう舞つた。

霧が晴れたときには、二人の姿は消えていた。

四面楚歌（後書き）

消火器が爆発したことがあるのは本当の話です！

もう一年くらい前に、塾に置いてあつた消火器を誰かが倒して、階段から落としちゃつたんです。一階から一階まで霧がでたみたいになりました。（苦笑）

その時は一階で授業を受けてたのですがドーンって音がして、先生も生徒も、防災訓練みたいにマスクとハンカチで口を覆つて通ったのを覚えてます

皆さんも、気を付けて下さい 余計なお世話

タイホ？シャクホウ？

さあ、その煙が舞つてゐる間何が起こつたかだが……視界が見えなくなつて数秒後、俺は快斗に突き飛ばされた。シユツという音、続いてカタンとなにかが落ちる音がした。でも、粉の霧が晴れた後は何も異常はないようだつた。霧が晴れたあとも、まだ逃げてはなかつたのだ。皆、さつきまで俺たちがいたところをあんぐりと口を開けて見つめてて、こっちを振り向いたりしない。ここは、屋上の右端でだいぶ後ろに移動した場所。場所を移動しただけなのになぜ、分からぬのか……少し考えてから、自分の状況理解して吹き出しそうになつた。頭には、いつの間にか警官の帽子を被り、手は敬礼のポーズを取つてたからだ。（敬礼は余分だろ……キッドが逃げたすぐ後だつてのに）周りに気付かれないように手を下ろした。

快斗はどこだ？辺りを探すと、手錠の先はビルの壁をつたつていた。彼は、壁の窓の窓枠に足を引っ掛け立つて立つている。

おい、落ちるなよ……心中で心配したあと、はつとした。

今なら、このキザな怪盗を逮捕できるんだ。この場で、ちょっと警部に声をかけるだけ。簡単なことだ……快斗にもその気持ちが伝わつたらしい。今ここを飛びだせば確実に逃げられない。捕まるのか、彼の目に絶望の色がまじつた。小さな声でつぶやく。

「できれば、カバンからダミーのハンドグライダーをだして飛ばしてくれれば……助かる。近くにあるだろ」

カバンは足下にあつた。青子が来たときには置いたのだ。さすがに見つかるだろと思つてると、地面には何かのスイッチも落ちている

のを見つけた。たぶん、これでダニーがでてきて、押すつもりだったのが、落としてしまったという事なのだろう。ゆっくりそれを拾い上げる。だけど、押したら共犯者だよな、

心臓が早鐘を打ちはじめた。数日前の動悸とは別の種類の緊張。快斗の事で気に掛かる事もあるんだ。昔会ったような記憶もうつすら。信じられねーけど。釈放か、逮捕か。でも、事情を聞くなら警察署の方が…少し手が震えた。だんだん警官が正気に戻ってきた。辺りを捜し出す。

「キッドめーどいく逃げた！」

突然、後ろで中森警部の声が聞こえた。真剣に考へてるときに急に声をかけられたらどうなるか…しかも大声で。

新一は、飛び上がりスイッチを落としてしまった。それは、遠く離れた地面へ。手錠を落としたときの映像と重なった。さらに快斗の手を擦り抜けて、重い重力にのしかかられ、すぐ見えなくなつた。

「わっ！」

「どうしたんだ、そんなに驚いて。ん？見かけない顔だな。大阪からか

「えつ、いや、あの…せやな」

警部が眉をひそめた。やべー、大阪弁しゃべれねーよ。快斗が観念したように静かに目を閉じた。オメーに任せるとという声が聞えてきそうな表情だ。新一の方も、決意が固まつた。

俺は、まっすぐ指差した。

「中森警部……怪盗キッドなりこめあす…

ギリギリのトック

中森警部が屋上から下を見ようと、てすりに手を掛けた。そして、俺はまっすぐ扉を指差した。

「警部…怪盗キッドならいますよ、扉から逃げていきました」「何キッドをかばつてるんだろうな…」

中森警部は口を吊り上げて怒鳴った。

「なんだと！？お前は見て見ぬふりをしたのか！早く言わんか、そういう事はー全員聞いたか、おいかけるぞ。それと、青子は早く学校に行け！」

快斗は信じられないと言つた様子で口を開いた。どんどん屋上が空になる。青子だけがポツンと取り残されて、思い出したように呟いた。

「学校、あること忘れてた。今日はきっと運勢が悪いんだわ、おかしな事ばっかり。快斗の奴、後でとつちめてやるわ。約束破つて」

約束を破つた張本人は、冷や汗をかいてこっちを見上げた。はいはい、俺になんか言ってほしいんだろ？すでに共犯になつてて、投げ遣りになつて青子に声をかけた。

「快斗って子、学校にはいってない思いますよ」

見知らぬ警察官に唐突に話しかけられていぶかしげにする。しかも、一人だけキッドを追いかけずにたたずんでる警官だ。だが、青子はそこまでは考えなかつたらしい。

「えつ、なんでですか？快斗のこと知つてるの？」

「実は僕の…姉の友達の従兄弟のが快斗って奴で…熱だして休むつて」

「……それってほとんど赤の他人じゃないんですか？」

最後の質問は黙殺した。下を見ると、快斗は口だけ動かして何か言った。

——約束破った事怒つてんのか？

そう聞くと、意外な答えが返ってきた。

「怒つてたけど、熱だったらじょうがないわよ。それに、あのいたずらっ子みたいな顔で怒るなよってマジック見せられると、なんか憎めなくて、その内忘れちゃうのよねーあはは、なんでだろつ？」

キッドが焦るのを承知の上でさらには質問してみた。

「じゃ、例えばの話ですよ？彼がキッドだったら…」

「快斗があんなにマジック上手な訳ないじゃない、あり得ないわ」

あまりの鈍感さに膝ががくつとなつた。まったく知らねーのか。

「キッドはなんであなたに危害を加えなかつたと思います？…どうせら、キッドに入られたようなので後で謝りにくると思いますよ。」
「どうでなかつたら僕が逮捕してやります」
したにいる奴に睨みをきかせてやつた。

「来ないわよ、来たら即逮捕よー」

そつこいつと、階段を降りていった。新一は、快斗に手を差し伸べた。
ひらりと、コンクリートに着地する。

「いてて！ そんなに強く手を持つないでくれ！ これでも結構痛いんだから、青子の馬鹿力め」

「素直じゃねーな、あの子のこと好きなんだろ？」

「バーロー・フなんじゃねーよ。余計なことばっか言いやがって。そ、それよりどうして俺のこと助けたんだよ」

「好きな奴に嫌われてまで正体を隠して盗みを働くってことは何うほど理由があるんじゃないかと思つてな」

「……」

しかし、理由はそれだけではなかつた。正体を隠している状況が自分に似ていて放つておけなかつたといつのもあるのかもしれない。周りの奴が、自分のことで沈んでいるのを隣で、何食わぬ顔を装つて見ているのがどれほど辛いか……そんなことは身にしみて分かつていた。いつも、泣いている蘭を「新一兄ちゃんはいつか絶対帰つてくるから」と励ますことしかできなかつたのだ。ここで捕まつたら一生後悔するだらうな、と思つた。

「……」

「おい！ ちゃんと警察が納得するような理由があるんだろうな？ なかつたら承知しないからな！ それに、あの子には後で全部はなせよ！」

「！」

そう叫ぶと、彼の横顔を見た。すると、顔には切り傷があり、うつすら血がにじんでいた。煙が上の前はなかつたはず。同時に、これが特殊マスクを使った変装ではないといふことも、はつきりしてしまつた。

「その傷……」

快斗は、おもむろに言った。

「消火器のトリックを使う寸前、視界の端にライフルを構えた男が見えたんだ。そいつ、オメーを狙つてたぞ。俺の秘密も、話すから、どういうことか説明しろよ」

シユツとこう音が、弾丸が通り過ぎる音、コトンといつのが……足下に落ちてる弾丸の立てた音だったのだ。

「わかつたよ。どうやっても、離れられないみたいだからな。」

「それじゃ、今は停戦といきますか」

新一は、そっぽを見ながら片手を突き出した。

「ほら、伸縮サスペンダー。これで、ビルから路地に降りられる。階段から下りると見つかるだろ。この廊下の裏は人通りがすぐねーから。」

「サンキュー」

こうして、下に降りる準備をし始めた。さて、これからどうなる事やら……苦笑を浮かべながら考えた。組織とキッドと元の姿の俺、面倒なことにならなきやいいけど。コナンでの日常になれ始めていた俺には突然の出来事に、頭がついていかないくらいだった。そんな自分をあざ笑うかのように事件はどんどん進んでいく。怪盗キッドをかばって逃走中だと? 三日前の俺は考えもしなかったな。

俺は、まさに怪盗の世界に足を踏み入れようとしていた。

準備は出来たか? 名探偵。 快斗の声がぼんやりと聞こえた。

ギコギコのトコック（後書き）

手錠でつながれながらも口を向いて片手を突き出して伸縮サスペンダーを渡すつていつたいじりやつてやるんじゃつ.....

新一は器用なんだと思つておこしてやる（笑）

七時五分、ちょうどキッドの作戦が進行してたころ。ハイドテパートから約三キロ離れた高速道路では、黒いポルシェが静かに、不気味に走行していた。その黒い車体は他を威圧し、絶大な存在感で周囲を驚かせた。中には、ジン、ウォッカが乗っている。隣に、ぴつたりと着いていくのがヴェルモットのバイク。ポルシェの窓が、開いた。

「朝から呼び出しちゃう事なの？ジン。」

尊大な口調で話す。「の方」のお気に入りだから出来る態度だ。

「ヴェルモット、おまえはテレビを見ないのか

「マスクの情報は信じない主義なの。もしかして、あの探偵さんと一緒にいる泥棒のことかしら」

「ああ。ずっと前にバラしたはずの工藤新一。フツ、どうやら生き返つたらしい。探偵狩りに行くところだ、何も知らない大泥棒と一緒に」

「そうなの、バーボンがないようだけ?もう、そこに向かってるのかしら?」

「ああ、上手くいけばとっくに成功してると思うが。そうでなくとも、また別の策がある。それは、随分前のマジシャン、黒羽盗一を殺した、黒崎つて奴に任せてある。コードネームは、ヴァインだ。」

「アップフェルヴァインの省略?——リンク酒のシードルの一種ね。禁断の実とかけたみたいね。確か、そのマジシャンは組織の重要な

証拠を掴んだんじゃなかつた？彼は組織から離れて長いこと、身を潜めてたのにねえ。何か引っかかる？」

「それをバー・ボンに調べさせているんだ。まあ、こいつちはこの辺で高みの見物と行くか。万が一その作戦も失敗したら……何をするかいつてあるな？作戦は今日決行だ。」

「OKよ」

ヴェルモットは軽く手を挙げ、轟音を立てて走り去るポルシェを見送った。

（ジン、あなたは思い違いをしてるわ。シルバーブレッドはそう簡単に倒せない。彼にはたくさん仲間が居るのよ）

パークリングエリアにバイクを止めると、何台も通り過ぎる車の中から黄色いビートルを見つけた。やっぱり、彼の居場所を突き止めた。彼女は、バイクの向きを変えてそつと彼らの後を追つた。

* * * * * ビートルの中で

服部は、光彦の探偵バッジとコナンの眼鏡を頬りにここにまで來ていた。学校も休んで、東京に残つた和葉と平次はなかなか眠れず朝早く起きてしまつていた。テレビを付けると、なんと怪盗キッドの予告状だ。

——何を考えとるんや。工藤も一緒におるんやぞ。

日紫佑帆のアナウンスは、要領を得ない、的はずれな質問ばかりだが、映像からそこがどの辺かは絞れた。お陰で、眼鏡には工藤の居

場所が示されている。

「アガサのじいさん！もつとスピードだせへんのか！」

平次が、文句を言つとアガサ博士はアクセルを思い切り踏み込んだ。

「そんなの分かつてるわい。これは、わしが作り替えたもんでのう。

普通のビートルの約一点五倍は燃費がよくてスピードも……」

「車の宣伝はええんや！…どうせ最後はわしは天才発明家じゃつとうんやう？前向いて運転してくれや」

「やうじやつた、やうじやつた」

そうじやつたつて前見て運転するのをわすれんなや……

車には、蘭、玲香、和葉、平次が乗っていた。小学生が学校を休むのには大反対だった。ところが、「新一お兄さんが心配だ」と言わると、止められなかつた。ちなみに「ナンの」とは、新一のぼやいたとおり彼の両親とアメリカに旅行しているという話をした。手錠の鍵はいまだに玲香が持つてゐる。ビートルの後ろには、毛利のおっちゃんの黒い車が走つてゐた。後ろには探偵団と園子が乗つていふ。

「服部君！キッドの予告、成功したんだつて！」

「なんやてー？そんなことあるかい！」

助手席から振り返ると、蘭の携帯を奪い取つた。ニュース覧には、ホープダイヤまたもや消失、警察の不手際とあつた。舌打ちをして、携帯を返す。その拍子に、後ろのバイクが見えた。ビートルはかなり速いスピードで走つてゐるのに、そのバイクは、つかず離れずついてきていた。

「博士、あのバイクの女知つてる奴か？」

横目で見ると、青ざめて、また強くアクセルを踏んだ。それでも着いてくる。

「組織の人間なんか」蘭たちに聞こえないように口をさやぐ。

博士は無言で頷いた。バイクが、ビートルと並んだ。ヴェルモットは、平次の持っている眼鏡の表示をちらつと見て、瞬く間にビートルを追い抜かしていった。平次がハッとする。

「おい、工藤の居場所がばれたで！……あのバイク、なんてスピードや。追いつけへん」

小声でそう呟くと座席に座り込んだ。ヴェルモットが、無線を取り出した。ジンに連絡するつもりだ。超高速で走るバイクを片手で運転しながら無線で話すのは並大抵のドライブテクニックではできない。ビートルで、追い越すのは不可能であるかに思われた。平次には、彼女の口がじう動いているように見えた。「工藤新一がいるのはどうやらバス停みたいよ。すぐにヴァインをそつちに行かせて」数分後、その予想は現実になる。

そしてそれが、蘭に黒の組織の存在を知ることになる最初の兆しだもあった。

ANOTHER SHDE (後書き)

今回短いです……

後の章で私の考えたバー・ボンの正体と目的を明らかにしたいと思う
ので是非読んでください。

評価感想、あれば教えて下さい

アッパフルブライン（前書き）

ヴァインの口調が乱暴で、いろいろ雰囲気になってしまった…

やつと黒の組織登場です！

アップフルブайн

今にも、黒の組織がやつてくると言つことを知らない一人はバス停にいた。相手に気を許せば、捕まるかもしれない、という緊迫感は消え、比較的穏やかな空気が流れていた。

バスがハイドデパート前で停まつた。来たときは逆向きのバスで作戦会議のために快斗の家へ戻るところだつた。

快斗は、新一が自分と同様に何か凶悪な物に追われているのだと察しがついた。おそらく、コナンとしてクラス羽目になつた理由を聞かされるのだろう。引き替えに自分も、父さんのことを話さなくてはならない。コイツに賭けてみつか……

バスの座席に座ると、やはり手錠のカムフラージュのために例の新聞を広げた。新一は、一番に評論家のコメントを最後まで読んで苦笑していた。短時間の間に出来るだけたくさんの情報を集めようとしたりで中には白馬の些細な愚痴まで掲載されていた。もちろん、劇に使う予定だった車のことだ。

（奴、そういう根にもつてんな。なにせ、アレには本当に仕掛けがしてあつたんだから。車をワイヤロープで吊すだけのお粗末で単純な仕掛けだけど、何かの弾みで発進しないようブレーキを踏むと同時にタイヤがパンクするようになつていてる。アクセルは普通に効いたから、そのまま帰つたんだろうな。赤信号で停まつた途端パンクか……許せ白馬。時間稼ぎのため、ビうじょうもなかつたんだから。）

新聞の隅には、怪盗トピックスという枠があり、昨日の手品の種が

公開されていった。ただ、肖像画の仕掛けについては分かつてないらしい。ふと、青子の言葉がよみがえってきた。

「青子、俺より米花劇団の手品の方が上手だなんて言いやがって……」小声でつぶやくと、新一が訊いた。

「オメー、なんで舞台で手品なんてしたんだ？」

「えつ、なんでって、その、何もしないで帰るなんてあつけないだろ」

「この評論家によるとー、誰かに宝石を盗んだことを示したかったらしげけど、それなら証拠だけ見せて逃げればこんな面倒なことにならなかつたのによ」

「だからそれは……」

「気になる奴の言葉に対抗したかつたから……か？」

「はー? ?」少し声が裏返つた。

「米花劇団の方が上手いつて言われたから、劇団のトリックを暴いて利用した挙げ句、誰にも解けないマジックを披露して仕返ししつと……」

「つるむせーー違うつていつてんだろ! ?」

動搖しているのが見え見えだった。國星らしい。いつも、蘭のことからかわれる新一としてはいい気分だった。

そんなことを話していると、三番目のバス停から一人が乗ってきた。一人は、黒いジャケットに、サングラス、湿度が高いのに、手袋をしている人物。もう一人は、眼鏡で長身の大学院生のようだった。

「あつ、あの人、沖野すばるだ。火事で家が焼けて今オレの家を貸

してゐる人だよ

「へー。」

バスが発車した。二人とも席が空いてゐるのに座らない。まあ、そういう人もいるから別に変だとは思わない。しばらく、沈黙が続いた。暇なので何となく目を泳がせていると、ジャケットの男の腕が震えている。

彼は両替をしに行くように、財布を持って、運転手に近づき、ポケットに入ってる物に手をかけた。

次の瞬間、拳銃を取り出すと、運転手に向けた。運転手は横目でちらりと見て驚き、ハンドル操作を誤った。バスは大きく、車道をはずれ、建物に車体をぶつけた。すさまじい衝撃とともに、車の表面を建物の壁がするキキキーという嫌な音がして、車内は悲鳴で溢れた。バスジャック！？いつたい何のために。幸い歩道には誰も歩いてなかつた。

「しつかり運転しろ！今からオレの言つ通りにするんだ。絶対バス停で止まるな。それと、白と黒の服を着た高校生の一人組を見なかつたか、答える」

運転手が必死に車道にバスを戻しながら返答した。

「そ、その二人なら、手前の席に……」

彼はつかつかと車内を歩き出した。新聞を顔の高さまで上げて、顔を隠した。かれ「ヴァインは、一人に気づかずそのまま通り過ぎた。新一と快斗は同時に言つた。

「俺を狙つてるのかも知れない」

顔を見合せると、頷いた。二人を見つけられないヴァインが引き返してくると、快斗が足を突き出し引っかけた。

もう少しでつまづきそうだったが、彼はよろけただけだった。快斗にはまだ計略があるようだ。

ヴァインは振り返り、足が突き出した方向をにらみつけた。視線の先には新聞が一杯に広げてある。下には、足が一人分のぞいていた。

「そこか……小癩なまねを」

彼は新聞めがけて一発銃弾を撃ち込んだ。周囲からさらに悲痛な叫び声が上がった。銃弾の勢いで新聞がひらめき、地面に落ちた。

しかし、高校生なんてどこにもいない。新聞は手すりに器用に置いてあつただけだった。足だと思ったのは、一足の長靴。その隣では窓が全開になつている。

まさか、飛び降りた! ? そんなはずは……

窓から顔を突き出すと、上からカバンが落ちてきた。間一髪のところによける。

くそつ、天井か。ヴァインは、運転席に駆け寄り叫んだ。

「上の奴らを振り落とせ! 」「で……でも」

「うーん、どうも、うまいなー。」

彼は乱暴にハンドルを掴むと、右へ左へ方向転換した。天井にいた二人は危なつかしく、足下に捕まっていた。このときばかりは、手錠が役に立つた。快斗が落ちそうなときには新一が、新一が足を踏み外せば快斗が引っ張り、助けることが出来た。

でも、あまり長くは持たない……何か使えそうな物はないかと、探すとバスの後を黄色いビートルが走ってくるのが見えた。アレは確か……新一の近所の博士。窓から大阪の探偵の声がした。

「工藤！そんな所で、なにやつてんねやー。」

快斗の頭に名案が浮かんだ。ちょっと荒っぽい方法で新一が着いてこられるかは微妙だが。彼は立ち上がった。

「どうするつもりだ」「集中してくれ。危険だから、素人は腕に捕まつてろ！」

そういうと、バスの屋根を助走を付けて走り出した。

足が離れ、ひやつとする感覚の後、ビートルのボンネットに着地した。

「おい！前が見える。早く中に入れ」服部が言ったが、快斗は首を振った。

まずはバスジャック犯が優先だ。

「博士！コナンのあのベルトねーか？」「こっちに、あるで！」服部がカバンと一緒にパスしたベルトを受け取った。ボタンを押せばサッカーボールが発射される物だ。

「快斗、そこに座つてバランス取つてろ」言いながら立ち、ボールを蹴つた。快斗も座つて同時にトランプ銃を撃つ。

トランプ銃で、バスの後ろのガラスにひびが入つた所に、ボールが命中した。そのままヴァインの方に。

そして、彼の顔にあつたつてほおを張り飛ばした。

彼はちつと舌打ちをし、外に視線を向ける。隣にはポルシェが併走していた。

ヴァインも窓から飛ぶとポルシェの中に吸い込まれるようにして消えた。ビートルが減速した。玲香が急いで、鍵を手渡した。

「さ、サンキュー」受け取ると、車が止まつたところで飛び降りる。
「博士、早くにげろ！奴らは俺が引きつける」

走り出すと、少しの間、ポルシェが威厳たっぷりに追いかけてきた。大きな車が通れないような、裏路地や細い橋で追つ手をまく。ポルシェは赤信号なんて構いなしで、ジグザグと走行した。だが、ついに、ポルシェは追跡をあきらめた。一人は、フラフラになりながらも、人目につかない場所へ行き、鍵で錠を外した。自由な腕につづつ着いた赤い跡が、今までの過酷な状況を物語つていた。

「まいたのか？」

「そつらじいな。」

「これからどこの行くんだよ……オレのうちの場所を知つてたなら、
戻れないし」

「ちょうどいい場所がある。この近くだ。」用がなくなつた手錠を、
コナンのカバンに入れて、歩き出した。快斗もついていく。

その場所とは、蘭とオレの家が見渡せる、無人の借家だった。

作戦失敗——バー・ボンの妙案（前書き）

バー・ボンのことですが、万が一に、私の考えが当たつてしまつ」と
もあるかも知れないので、読みたくない方は Back してください
m (^ ^) m

作戦失敗——バー・ボンの妙案

先程、ヴァインの入ったポルシェの中——ジンのウォッカからは殺氣だつたものが感じられた。

「さてと、ウォッカ。追跡する素振りはこれくらいでいいんじゃないか？奴らは、俺が見失つたと思つただろう。ビートルの方を探せ」

ポルシェが、追いかけるのを止めた。ジンは、二人に目をこらしながら言つた。

「ヴァイン、おまえにもう一回だけ、チャンスをやる。失敗したらただじや置かない」

「わかつた、次はバー・ボンの作戦だつたか……」

「ああ、そのためにバー・ボンを呼んだ。失敗するとは思わなかつたがな。あの探偵にとって、身近な人物が捕まるのが一番の苦痛だろうかな。本人を追いかけるより人質を取る方が早い」

「お人好しですからね、あの探偵は」前では、ビートルが次の角で止まるところだつた。デパートでの事件のことを聞きに行くと予測出来た。道路の路肩に車を止めると、ヴァインを下ろした。彼は、目深に帽子をかぶつて、歩き始めた。デパートの壁では、長身の男が携帯をいじつている。道路は見渡す限りひどい状態になつていて、倒れたポストやそれにぶつかつた車による交通渋滞が起きていた。こんな有様だから、もう信号なんて機能していない。楽々と、道を横切ると、その男と目があつた。

「バー・ボン、シェリーはいたか」

「そこまでは分からぬ、でもこれを見れば勝手に近づいてくるは

ずさ」

デパートでは、標的が固まって中森警部に事情を聞いてる。大阪の高校生などは、頭に血が上つて怒鳴り散らしていた。騒ぎのせいでも警官は益々増えて、FBIも駆けつけた。ヴァインはバー・ボンを離れ、標的が動き出すのを待つて、じつと機会をうかがっていた。

* * * * * ジョディ & 哀

哀は、警部にけんか腰で話してる、平次を眺めた。あんな震に気づかないなんて……白馬君がいないとダメなようね。灰原はいつものように冷めた表情をしていると、ジョディがこう囁いた。

「ねえ、さつきから見張られてるのにきづいた? 誰なのかは分からぬのよ」

「そうね、江戸川君がいればよかつたんだけど、あいにくアメリカに旅行中。頼りには出来ないわ。私が怪しいと思つてるのは、彼よ。」

「

哀は、さりげなく沖矢昂を示した。

「そんな……きっと思いこみだわ。私は彼が警戒してるように見えないもの」ジョディが安心させるように言つと、灰原は、眉をひそめて、ジョディに背を向けた。ちょうど少年探偵団が、トイレに行くところだつた。念のため着いていこうと、階段に向かつたが、傍を通り過ぎた人物を見て気が変わつた。灰原は、その男を追うことに決めた。コツツ、コツツ。静かな店外に足音が響く。

数分過ぎた後、男は突然立ち止まり、振り向いた。やつぱり……思つた通り。灰原はその男を知つていた。

「赤井、秀一ね。何でここにいるのよ。あなたはFBIの一員なのに、お姉ちゃんを利用して組織に関係するため、恋人として、近づいたのよね！？」

静かな口調が乱れ、呼吸が荒くなつた。この人が赤井秀一……

ほおに傷のある男は、申し訳なさそうにすると思いきや、にやりと笑つた。低い笑い声が漏れる。なんの……灰原は放心状態になつた。

「クツクツクツ。俺がそんなに赤井秀一に見えるか？シェリー。まあ、そうだろうな。でも、アイツは死んだ。組織なんて知らないって言うんだつたら、なぜ赤井を知つてゐるか、訊いてやつてもいいが？まさか、子供の姿とは……」

灰原は唇をかみしめた。

「その名前で呼ばないで！私はもう組織の人間じゃないわ！」
後ずさると、バー・ボンはその分距離をつめ、自分の顔に手をかけた。それは、特殊マスクだった。その下には、灰原の全く知らない、バー・ボンの素顔があつた。

「姉の敵である赤井の変装をすれば、引っかかると分かつていたよ。だいたい、赤井は事故で死んだのに、キールと示し合わせて生き残つたなら、顔に傷がある方がおかしいんだ。アイツは失敗何かしない。キールはしつてんだろう？」

「そんな……」

なんて言う見当違い……嫌な笑い方をすると、バー・ボンはハンカチを持った手を伸ばしてきた。声を上げるまもなく、口がふさがれ、徐々に意識が薄れていった。バー・ボンは用意していた大きなカバンの中に、灰原を隠した。デパートの外には、前から用意されていた

トラックがある。その荷台まで運ぶと、カバンを開けて灰原をのせた。しばらく待つと、ヴェルモットが他の少年探偵団の団員を連れてきた。もちろん、カバンの中に隠してきたのだ。これで、四人揃つた。あの探偵がこれを放つておけるわけがない……後は向こうから来てくれるのを待つだけ。トラックの荷台が閉められ、バー・ボンが運転席に乗つた。さあ、奴はどう来るか、――?

かくして、集団誘拐は幕を閉じた。

作戦失敗——バー・ボンの妙案（後書き）

読んで下さった方は、この考え方、どう思いますか？？？
あくまでも、推測なのであまり期待しないで下さい！

六月二十八日から、テスト期間なので、投稿遅れると想います！

て・お・く・れ・？

少年探偵団がいなくなつたことを一番初めに口にしたのは、FBIのジョディだつた。別方向に行つた哀も、見当たらぬ……灰原の疑つていた沖矢昂はまだ書店で本を読んでいるのが見える。灰原があんな事を言い出してから何となく意識してしまい、ここ数十分の間に、約一分ごとにそちらを見るのがくせになつてしまつていた。今の今まで感じていた視線は、消えていた。あきらめて帰つたか……それとも。

ジョディは喧嘩している一人に歩み寄つていった。

「だから、その時キッドはまだ屋上にいたはずやつて……何で探さんかつたんや」

「いや、それは……わしの部下が階段から下りていつたつて話を聞いて一怒鳴りつけてから追いかけたからに決まつとるだろつ……」ただの逆ギレとしか思えない言葉をぶつけた。

「そやか。なんて名前や？大阪の新人だと思つて名前も聞かんかつたんやないか？」

凶星らしく、目を泳がせる警部。

「ハハ、私は部下を100%信頼するからな、その、変装してないか事前にチェックしてあつたし」

服部はため息をつくのが見えた。

「間違いない、そいつがキッドや」

ジョディは、終わりそうもない討論に割つて入つた。警部がその隙にと逃げていこうとするのも、抑えて周りを警戒しながら言った。

気配を完全に消した組織の人間が潜んでいるかも知れない。そんな一員がいてもおかしくないのだ。

「ねえ、過去のこと責めるより、現実見た方がいいんじゃない？哀ちゃんと少年探偵団戻つてこないわよ」

平次は、ガバッと後ろを振り返り、見える限りを探した。全て探し終わるのに時間はかからなかつた。キッドの作戦とバスジャックのせいで、デパート内はがらんとしていた。私たつて信じたくないけど、見つからない。彼も、すぐ肩を落として向き直つた。

「俺はなんてアホなことしたんや……は、早よ探さな」

彼は、警部と話していたのとは正反対の落ち込みようで呟いた。そう、早く探さないと。組織に先を越されてしまつ。服部が蘭たちに、唇を動かさず、声だけでそのことを伝える間にジョディは走り出していた。走つても無駄なような焦燥感に襲われながら、再び書店の方を見ると沖矢昂が初めて動き出した。

タツ、タツ、タツ、・・・、タツ、・・・、

ジョディの足取りは、無意識の中に止まりその場に立ちつくしていった。彼、誰かに似てる……誰に似てるかは分かつて。ずっと、生きていてくれればいいと思つていたから。でも、そんなこと、あり得ない。

どこが似てるんだろう。特に似てると言える特徴はない。鋭い目元、くらいだろうか。どこにいても、つきまとう雰囲気が唯一彼であることを象徴しているような……ばかね、FBIが直感だなんて言ってられないでしょ？ それでも、ジョディは追いかけずにはいられなかつた。もし本当に秀一なら、組織を追跡するはず。もし、もしも私が探偵団を探さなくとも秀一に見当はついてるのよ、きっと。追いかけたい気持ちをこまかすために、自分にそう言い訳をしながら

尾行を始めた。

それも秀一の方が尾行するのもなれてるし、それを見破る力があるのも承知の上だ。それでも、話しかけてこないのはどこかに案内したいからに違いない。秀一は、一つ向こうの曲がり角で曲がって大型トラックの停車しているところまで歩いていった。彼は、背を向けたまま、いつもの低い無愛想な声で呟くように言った。

「ジョディ、なんで俺だと分かったんだ……危険だから連れてくるつもりはなかったのだが……」

皮肉な気持ちになりわらつてしまつた。

「じゃあ、これでわかつたでしょ？？私は、あなたに危険から遠ざけられるほど、理由を調べようとして近づく女なのよ。FBIが組織を怖がってちや話にならないわ。なにがあつたか、教えてくれるんでしょうね？」

「仕方のない奴だな、俺が心配してやつてるのに」「心配ご無用よ」

そういういながらも、ジョディの目は久しぶりに輝いていた。

「で、組織はどこなの？見つけたのよね。」

赤井は顎で大型トラックを示した。腰のホルダーから拳銃をぬく。

「ついてくるなと言つても、おまえがついてくるのは分かつてゐるぜなら、出遅れないよつてついてこい。」

要するに、ついてこいという意味なのだ。今から、突撃するぞ、の方が短くて分かりやすいのに、どこまでもひねくれた人ね……それ

でも、懐かしい言い回しに微笑した。それからジョディも、気を引き締め、腰から拳銃を抜いた。

て・お・く・れ・? (後書き)

投稿遅れて済みません! まだ、テスト期間なので間が開くと思いま
すが、忘れないで下さい(笑)

お気に入り登録が増えたようでもとても嬉しいです。感想なども
あればヨロシクお願いします。

怒濤の逃走劇

そして、秀一は、大学院生眼鏡を外し、沖矢昂の仮面をはぎ取った。見慣れた懐かしい顔がそこにある。顔には、私がデパートや銀行強盗事件で見かけた傷もなく、悠々とした微笑をたたえていた。

「ねえ、秀。顔の傷はないの？私は、てつきりあの爆発事故の時、どうにかして生き残つて、なんらかの方法で脱出したからだと確信してたんだけど……」

秀一は、片方の眉を呆れたように曲げ言つた。

「どうにかして…なんらかの？随分曖昧な推論だな。FBIの一員を名乗るなら、もつと考えてから行動して欲しかつたが」

「あなたが…あなたが何も言わないから悪いんでしょう！あなた本当に人の気持ちを分かつて言つてるの…？」

ジョディは拳を握つていよいよ返した。だんだん声の大きくなつてきた彼女を制し、大型トラックの方をみやつた。

「まあ、そう怒るなよ。でもな、爆発した車の中にいたのにかすり傷一つしかしないなんて大間違いだからな。完璧にやり遂げ、傷一つ無いか、失敗して……何がいいたいかわかるな。その二つのどちらかだ。」

「じゃ、説明してよ」

「おつと、忘れちゃ困るぜ。後でつて言つたら。今は時間が無い」

「次行方不明になつたら、一生許さないから」

ジョディは、秀一を睨み付けると足を一步踏み出し、ほの暗い路地の壁添いに動きだした。トラックの戸が開いた。

秀一…秀一がこっちにも。顔に傷もある。やつと何がいいたいかわかつた。偽物だったのね。となると、あの灰原つて女の子も騙されて…

「ヴェルモット！ 遅いぞ！」

「あなたは茶髪の子一人で私は、三人なのよ。逆の立場だつたら、私が急げてなかつたつて分かるでしょうに」

そういうと、車のトランクに乗り込んだ。ジョディが拳銃を構える。またもや、秀一が止めた。

「待て。子供に当たつたらどうする」

「じゃあ、どうすればいいのよ…」

「ひつしたら、いいだろ」

秀一は、力チャヤと軽い音を立てて銃口を下に向けると、車のタイヤを狙つて撃つた。銃声が、路地にこだました。あつけなく決着がついた…と思った矢先車が発進した。バー・ボンが窓ガラス越しに秀一を見つけた。

「赤井…秀一だと？」

どうしよう。弾が外れたのかしら、いや秀一に限つてそんなのあり

えない。

「あのタイヤの素材を知りたいものだな。組織のタイヤとあって、
強力だ」

「何感心してんのよ。追いかけなきゃ」

ジョディが慌てるのも意に介さず、秀一も近くに停車された車に乗
つた。彼女も、助手席に座る。

「荒っぽい運転になるよつだ。捕まつてや」

思い切りアクセルを踏み込んだ。車が、うなり声を放ち、速度を上
げた。逃走に不便な大型トラック。有利な、秀一の小型車が前方の
車を追い抜く。疾風が耳元を駆け抜け、轟音だけが聞えた。悲鳴を
あげたくなるほど急カーブ。すぐに道が真っ直ぐになつた反動で
肩をぶつける。バーボンが自棄になつたのか、車の狭すぎる隙間に
突っ込んだ。クラッシュする耳障りな音の後に、持ち直して十字路
を右折したのがわかつた。目前には、ぶつかつた車体の峰。背後か
らの車はない。

秀一は、バックで勢いを付けると、人気の無い歩道をガードレール
を曲げながら強行突破した。道路に戻るとなんと三叉路を直進。ジ
ヨディが注意する声も風がさえぎる。秀一は、すでに速度オーバー
で走っている車のハンドルから、片手を放して、背中の銃を横に突
き出した。一瞬、それだけ見て引き金を引いた。

その銃弾は、「字を描いて離れる」台の間を（　？）突つ切り、意
志があるかのように運転席のサイドリバーに当たった。破片が散ら
ばつた。

「秀！なんでサイドミラーを狙つのよ。もつ追い付けないわよ」「あ

遠くのトラックにキールのバイクが近寄っていた。キールは、トラックになにか設置しスピードを落としてそこから離れた。

「バーボンはキールがいるのを知らないの…」

「ああ。サイドミラーを撃つたから見えなかつた。あれは発信機さ。オレが死んだ後なら、いくらでも連絡が取れたから、これくらい予測していた。奴らも、自分の命がかかつてゐるから、必死で逃げ切るだらうと」

「ちょっと意味がわからないわ

「とにかく、キールには今日限りで無断で組織を抜けでもらう。オレを見つけたとなれば、彼女も危ないだらうから。逃げてしまえばこいつのもんだ。」

キールのバイクの影が徐々に大きくなつた。秀も車を止めた。改めてジョディは一人を見つめて、混乱した表情を浮かべた。

「あなた達何を隠してたのよ」

そして、ため息を吐いた。

怒濤の逃走劇（後書き）

ピアノです

久しぶりの投稿ですみません。

テスト期間やつとおわりました。それでも、一回まめに登校できるか
は分かりませんが、
、

次話の内容ですが、私の単なる想像ですので、話半分に読んでくだ
さい！

爆発事件の真相（前書き）

当たつてゐる』もあるので、謎解きはテレビ、漫画で見たいとこう方は、Backstage【――】

爆発事件の真相

秀とジョーディは、車から降りた。ここまで状況を説明すると、キールがバイクから転倒した事故で意識不明になるところが事の発端だ。意識の戻らないキールをFBIが、病院でかくまう。それから、コナンが部屋に誰もいなくなつたときにキールが身動きをしている証拠を見つけ、意識のあることを発見する。やがて、病院内に組織の一員がいると分かり、FBIは、みずなしレナの病院を移動する計画を立てる。ところが、コナンと秀一は、みずなしレナ（＝キール）を組織に戻る計画を立てていた。レナが運転手を殴り、気絶させて逃げ出したという演技をさせた。あまりにも簡単にキールを奪還出来たことを不審に思つたジンが、あの方の命令だ、とFBIの首謀者である赤井秀一の抹殺を命じる……キールは、承諾し、車でライハ崎にやつてきた赤井に銃を向ける。弾は、肺と頭に当たり、赤井に悟られないようにモニタ越しからの映像を見ていたジンも満足する。最後にキールは、赤井の乗る車に、爆弾を仕掛け、その場から立ち去つた。

という経緯である。

一つ深呼吸をして、物知りたげにする彼女の目を真つ直ぐ見据え、口を開いた。ついに爆発事件の全貌を語り出したのだ。まず、彼とキールは、ジョーディに爆発事件で何が起こつたかを説明した。ジョーディは、青ざめたが口は挟まなかつた。次は、その前のキール移動作戦での赤井の考え方……

「FBIが総動員で、みずなしレナを他の病院に移そうとしたとき、

俺とあの眼鏡の坊やは、キールを組織に返してスパイをせる計画を立てたのは知ってるよな？キールを組織に返すにはFBIが返すわけにはいかないだろ。となると、彼女が自分で逃げなければいけない。組織から見たら、何もしなくてもキールが脱却できたのだから、呆氣ないもんだろ。」

そして、キールが続けた。

「そう、事故から何日もたつて、意識から戻つてたら、赤井秀一が疑うに決まってるわ。それなのに、移動作戦の時、キールが乗つて車を運転手と一人きりにした。その結果、キールは易々と奪還された。組織には、こう見えてるのよ。上手くいきすぎてる、赤井の策に違いないってね。」

「じゃあ……」

赤井が、頷いた。

「俺は、それを見越して首謀者である『赤井暗殺計画』を思いつくように、し向けたんだ。わざと、キールにスパイであるかのように怪しい行動をしてもらつて。」

怪しい行動というのは、キールの、「はい……この仕事は精神的にもう……降りたいんです」と言つ電話のことだ。

「あなたの、『暗殺事件』が示し合わされたものだったのは分かつたわ。でも、頭を打たれて、乗つてた車を爆破されて、どうやって生き残ったのよ」

赤井は、キールに目配せをした。彼女は、その計画に使われた拳銃を懐から取り出した。

「まず、ひとつ田の質問から答えていくわね。」

彼女は、その拳銃を構えた。その先を、地面に向けて、発砲した。
バーン！、と銃声が聞こえた。

すると、目の前の地面が、真っ赤に染まったのだ。それは、撃てば弾丸から真っ赤な塗料の吹き出す、偽物だつた。>その証拠に原作ではキールが、肺を貫通したといつてたはずの弾丸が、赤井に跳ね返つて地面に落ちていましたく

「この銃が偽物……」

「ええ。彼には演技をしてもらつたわ。打たれて、倒れる偽装工作を。」

「でも、何でそんなの持つてるのよ。まさかCIAに組織のスパイになれ、と命令されたときから予想してたなんて言わないでしょうね」

「ええ、CIAに持たされていたのよ」

ジョディの動きが止まつた。

「前にも言ったと思うけど、私のCIAとしての任務は、組織に新しい一員のつなぎ役を紹介するため。それが終わつたら私は、事故がで死んだと見せかけて、組織を脱出する手はずだったの。その際、使うつもりの銃を赤井に向けたのよ」

不敵な笑みを浮かべて言い切つた。キールに打たれたときの、赤井との会話はこうである。

「まさか、ここまで（上手くいく）とはな
「本当、驚いたわ」

つまり、この言葉で成功したことを話していたのだ。あの暗闇の中で、赤井の黒い服にニット帽、その上モニタ越しに、服に付いたのが血か赤い塗料かなんて判別できない。キールは、組織が、赤井を抹殺を命じたときにも銃を渡されたが、彼らはモニタから観察するために、キールのそばを離れた。カメラと盗聴器は彼女の首に装着してあり、銃をすり替える隙は十分にあった。もちろん、ライハ峰に行くとき、ジョディを呼ばなかつたのは、彼女がいると成功しない作戦だつたから。

「でも、爆発のことはどうなの？」

「それは、簡単だ。キールと組織の連中が、ライハ峰をを離れた後、爆発までに時間は三十秒ほどあつた。俺は意識があつたからそのまま外に逃げたさ。」

それを聞いて、ジョディが反論した。

「そんなはずないわ！だつて車内から見つかつた焼死体と、あなたの指紋が一致したのよ？他人だつたら、不可能だわ！車にいたのは誰だつて言つのよ」

FBIはシボレーの中の焼死体と、赤井の指紋が同じものだと確認していた。赤井は、一度コナンの携帯に触っている。コナンの携帯に付着した指紋と照合したのだ。高木刑事の報告によれば、そいつてたはずだ。

「携帯から出た指紋は、間違いなくあなたのものだわ！」

「なんでもそう言えるのかな？」

「え？」

「もう一人いるだろう。以前あの坊やの携帯に触ったことがあって、ライハ峠の事件の前日に追い詰められて拳銃自殺した組織の一員——」

楠田陸道だ——と、言い放つた。

コナンは、病院に紛れ込んだ組織の一員を割り出すために、携帯を使つてそれを拾わせることで、調査していたのだ。コナンの携帯に楠田陸道の指紋も付着している。そして、彼は組織の一員だとFBIにばれて、拳銃自殺した。遺体を警察に引き取らせれば組織のことを説明せざるを得ない。おそらく、彼はFBIが極秘に引き取っているのだ。その遺体を比較的安全に、警察に引き取らせるためにも必要だったこの計画。組織は、爆発事件の前日に米花中央病院のFBIを爆弾騒ぎで、混乱させようと企んでいた。キールが、確實に信頼できるように、トジンに話して、爆弾を付けるも可能だつた。その結果、赤井の死を偽装し、車内の焼死体の素顔を隠す事ができた。

二つの指紋が一致したのはいわば当然だつたのだ——

爆発事件の真相（後書き）

楠田陸道のことはあつてる気がします！

彼が携帯に触ったのもそんなに前じゃない……はずです。

ちなみに、キールに打たれたときに、赤井の口から出た血も、偽物だと思います。家族でお台場に行つたときに、手品用のコーナーがあつて、面白そつ…てみてたら、ドラキュラの挿絵で、パーティーの余興で口から血が出たように見せかけられるのが、実際売つてしまつた！

コナンの舞台は東京ですし可能じゃないでしょうか……（たぶんそれは関係ないです）

赤井がキールと示し合わせていたと思ったのは、「赤と白のクラッシュ、嫌疑でキャメル捜査官が容疑者だと疑われた話で、その時赤井は部屋にいたのに、次話では、急に車に乗つてたので、キールの電話を受けたので、計画のこと知つてて、準備してたのかも……」と考へたからです。

楠田陸道が亡くなつた次の日に、ジョーティが秀一に寝不足だつたんじゃないの？と聞いてるので、その日にコナンと何か相談したり、楠田陸道を移動してたのかもしれません……あくまで推測なので間違つてる可能性大です！

ビデオを見ないと確認できませんが、もし興味を持つていただけたら、497話からを参照していく下さい！

これだと、ここが矛盾している…と言つ意見や感想もお持ちしています

訂正したことと思こますので……

* * * 7月19日

原作で矛盾を見つけたのでその内訂正します……

その頃……

そして……手錠から自由になつた新一と快斗は、、「ある空き家の前にいた。実はこの家は、新一の両親が住んでたことのある場所だつた。彼らがアメリカから帰つてきたときに、息子の新一の様子を見に来るためには、わざわざ老夫婦に変装してここから、探偵事務所を覗いていたのだ。でも、一週間ほどでコナンにばれてアメリカに帰つたせいで、今では空き家になつていい。家の敷居をまたぐと、靴を棚にしまつ。棚の上の埃は、長いこと誰も入らなかつたを示していた。少し急な階段を上り、二階へ行つた。

「よくこんなぴつたりの場所を見つけたな。」ここからだと、探偵事務所に何かあつてもすぐに分かるしよ」

「ちょっと想い出があつてな。まあ、母さんと父さんのくだらねえ悪ふざけだけだ」

「オメーの母さん女優なんだつてな。父さんは推理小説作家。天才の血を継いだサラブレッドって訳だ。」

新一が嫌な顔をして、大儀そうに答えた。

「そういう言い方をするなよ。事件解決だつて父さんの力をなるべく借りないようにしてやつてきたし、馬鹿にされたような気分になるだろ?」

「……そうか?」

「両親が、有名だから俺も有名が当然で、努力も血筋のせいって言われんの、つまんぬないか?」

「素直に褒めてんのに、ひねくれた奴だな。まあ、そんなつもりじゃねーから安心しろ」

快斗は、新一の文句を聞き流し、フローリングの部屋に入った。軽くのびをしてソファーに座る。新一は、また不愉快な顔をしたが、黙つて床に座った。

「そういうえば、オメーの父さんも普通の父さんじゃないんだろ?」

「え?」

「だって、父さんのことだから、部屋に落とし穴が仕掛けあってもおかしくない」とは、よつばど、その……」

「個性的……か?」

「そうね、なんの仕事してんだよ」

快斗は一瞬迷つたが、少し胸を反らし、誇らしげにしていった。

「オレの父さんは、有名なマジシャンだ。マジシャンの中では、尊敬されてて俺もす」とは思つてゐるけど、同時に越えなきやいけない敵でもあるんだぜ。まあ、俺が抜かす前に事故で死んじまつたんだけどな……」

うわざつていた声は、だんだん小さくなつていつた。新一は、彼を上目使いに見ると、先を受けた。

「そんで、オメーは本当に事故かどうか疑つてるわけだ」
彼は、ギクッとして恐ろしげに、引きついた笑みを浮かべると、田を細めた。

「つたく、油断もできない。口調で判断しやがつたな。そうだよ、事故じゃない。寺井が、言つてたんだ。それを初めて知つて、犯人を捕まえるためにも、父さんが泥棒をしてた理由を突き止めることに決めた」

新一は、口の端を曲げて訊いた。

「それで、話したいことは全部か」

「ああ。協力する気になつたか？」

快斗は、答えも待たずポケットから宝石のかけらを出した。父さんが言つには「これに何かヒントがあるらしい」と独り言を言った。「そのかけら合わせてみろよ」新一が横から提案した。

息を呑んで、米花劇場とハイド・デパートの宝石を合わせた。

その途端、青と赤のホープダイアモンドは、中で煙が渦巻いているかのような黒に変色した。思わず、宝石をとりおとす快斗。そして、宝石の呪いも解けたみたいに、不気味な印象もなくなつた。

「新一、黒くて危険なもの……なんでもいい、物でも集団でも。思い当たらないか？」
新一は、また黒か……と苦笑した。

「組織なら、知つてる。協力するしか、なさそうだ」

その目に挑戦的な光をともして、力強く宣言したのだった。

原作で矛盾に気づいてしまったのですが、皆さんも考えて下さい――

(――) M

爆発事件のことです、

キールが赤井を撃つた＝赤井はキールの仲間じゃない事の証明になる
ということですね？

でも、

赤井は、キールの高飛びを手助けする代わりに情報提供すると言わ
れ、呼び出された＝キールは赤井の電話番号も知つていて面識もあ
り、仲間。

になるのに、なんでジンは納得したんでしょうか……

キールは、意識があつても、FBIの前では昏睡状態のふりをして
たはず……

この計画は、（キールが赤井を呼び出せる）というのが前提で行わ
れています。＝ジンは彼女がFBIと面識があると知つて知らないふ
りをしている（？）

ジンは、FBIの情報を知りうとしているのか、ただ赤井をたおし
たかつた為に利用したのかです。

作者の間違いでしょうか……だいぶおかしな所に目を付けたんです
が、推理小説大好き人間なので了承下さい（笑）

怪盗と探偵のいる家では、しばらく沈黙が続いていた。新一もこれまでのことを話して、お互いの目的が同じだということを確認し合つたまではいいが、相手は証拠も隙も見せない組織の人間。その組織の予想を裏切る戦略が思い浮かばない。窓の外を、鳩が飛んでいった。バサバサとやたら大きく音が響く。三羽、四羽……八羽……

「うるさいー快斗、おまえの鳩どうにかしてくれよ。」

快斗もかみつくようにして答えた。

「しゃーねーだろー俺がいる限りついてくるんだから……嫌なら俺を追い出すんだな」

新一は、にらみ返して、また静かになった。

組織か……とうとう終わるんだな。こちが負けて相手が闇の世界にのさばることになるのか、勝つて奴らを冷たい監獄に入れてやるのか。中途半端なところで追跡を止めたポルシェ356Aが思い起された。なんでアイシク簡単に引き返したんだろう……

「快斗……」

新一は、ガバッと体を起こし、掴みかからんばかりによんだ。

「うわっ！なんだよ。急に大声出して」

「組織のポルシェを振り切ったとき、おまえの場所から車が見えたか！？」

しばらく快斗の目が空を漂い、たいしたことなぞうと言つた。

「見えたけど、少しだけだぜ。相手がみてたなんてわからねーし」「携帯……携帯返せ！」

新一の剣幕に押されて、快斗は黙つて携帯を差し出した。携帯が震えるほどの勢いで、番号を打ち込み、耳に当たた。三十秒ほど一ルすると、応答があつた。新一はつかの間、気が抜けた表情をした。

「もしもし、新一！？今どいよ」電話に出たのは蘭だつた。底無しの穴に落ちていくような不安を感じた。慎重に言葉を選ぶ。

「……蘭？これ、灰原の携帯…だろ？？」

二人は、携帯越しに居心地の悪い沈黙を共有していた。何が起こつたかは口に出さなくとも分かるくらい明白だつた。組織の真の目的を悟れず、踊らされていたのだ。

「そうか……」

「落ちてたカバンからゴー^ルが聞こえたの。ゴメン……私がしつかりしてなかつたから……少年探偵団も」

頭が真つ白になつた。灰原が捕まつた。彼女が一番警戒していたはずなのに……蘭のせいじゃない、オレの不注意だ。守つてやるつて言つたのに

「新一？聞いてる？」

「ああ、じゃあな」

「ちょっと！」——新一は携帯の電源を切つた。心の中に脱力感が広がつていた。快斗が、静かに咳払いした。嘘はつくなよ、と。新一は、頬杖をつき、動搖を押し隠しながら、のんびりと説明を始めた。

「灰原と少年探偵団が、誘拐、されたらしい。たぶん組織は俺を脅してゐると思う。探しに来なければ恐れていた事が起つた。奴らが、

オレの存在に気づく前から、灰原も俺もそう脅されてたようなもんだからな。単なる脅しじゃないのは、分かるだろ？』

感情の読み取れない抑揚のない声で続けた。

「これは、俺と組織の最後の戦いだ。延長戦は、ない。オメー、今なら抜けても組織から田を付けられることはねえぜ」

パンツと音がして、快斗は、どこから出してきたのか派手なクラッカーを持っていた。新一は、冷静にそれを見つめていた。快斗は、状況にそぐわない明るさで言い切った。

「なにアホな」といつてんだよ。オメーが感情を殺してるときは、感情が溢れてる時しかねーんだよ。その心理状態で組織を倒すなんて言つんなら見てみたいね」

新一は、テーブルを拳で叩いた。花瓶の水がはねた。
「嫌みかよ、こつちは真剣なんだ。眞面目にしろ」

「おー、こわ。助けてやるつてのに」

テーブルの上で指をイライラと動かした。

「どうなつても、しらねえよ？」

「望むところだ。こつちが同じ質問をしようとしてたぐらいだ」

クラッカーから出てきた、手品用の杖で頭を叩かれ、新一は顔をしかめた。

「それに、アホ子に怪盗キッドのネタバレしねーとな

快斗は、ウインクした。

「新一の話でアイデアも浮かんだし、今日はお開きだ。まだ起きて

てもいいけど、おまえが今考えても無駄だと見た！」

快斗はおどけて部屋から出て行つた。

軽く舌打ちして、ソファーにもたれた。快斗も俺を励ますために無理してるのは見え透いた事だが、ほうつといて欲しい。組織だの、策略だの、うんざりだ。

そこまで考えてから、思い直した。俺は自暴自棄になつてんのかもな……とりあえず、休むとするか。

その心理状態で組織を倒すなんて無理だね……快斗がぶっきらぼうに言つたことが頭にこびりついていた。

朝がきて……日がてっぺんに位置する昼間ごろ、一人の高校生が家から出てきた。どうやら、一人が出ていつて、もう一人は見送りらしい。

「それじゃあな！」

「おう、また向こうでな」

二人——新一と快斗は、しつかりと目を合わせて、まだ手錠跡の残る腕を挙げ、別れた。実は、新一は、快斗と一緒に戦うのを承諾した。昨日はあれだけ、拒絶した彼が頷いた理由は、組織撲滅作戦の精密さにあつた。手先の器用な快斗がいないとできない作戦。新一は、秘密保持のため読者の皆さんにも伏せておくようだ。ただし、一緒にといつても、団体行動ではなく、新一が先に敵地に踏みいり、快斗は、後からだ。彼には、まだやるべきことが残っている。組織が勝つて一生元の生活に戻れなくなることも覚悟した上で、闘うのだから心残りがあつてはいけない。

「失敗は許されない……か。」

快斗は、手に握った携帯電話を見つめ呟いた。おそらく今頃青子は、学校だろう。俺が2日も続けて休んだことを心配しているか、いつものことだと素知らぬふりを決め込んでいるか。どちらの様子も目に浮かぶくらい容易に想像できた。俺はこんなに青子の表情を見ていたんだという自覚に、立ちくらみがした。

そつと通話ボタンに指をのせた。後は少し力を入れるだけ……目をつむつて指を動かし、かすかなボタンのへこみを感じた。

……ルルルルル

携帯が汗で滑らないよつこ、手のひらを拭った。

「……はい。もしもし？快斗なの？昨日から何やつてんのよ、担任の先生、一日も無断欠席だーってかんかんだったわよ。」

「……」

「それから昨日の約束破り忘れてないわよね？」

「俺はそれとは別の約束破りを謝るひつとおもつたといわね。お前、怪盗キッドは嫌いか？」

「あはは…当然でしょ。今日のキッドの新聞読んだ？青子のことを気に入ったかなんだかしらないけど、本氣で逮捕しようとした私に情けをかけようなんて、バカにしてるわね」

明るい笑い声に聞こえるのに、どこか冷たく響く。つんけんとした口調に報いて、快斗も小声で訊いた。

「じゃあ、俺のことも嫌いなのか？」

「えつ……何でそういうのよ…別に青子は…嫌いって訳じゃ……」

受話器の向こうで動搖しているのがわかつた。早く電話を済ましてしまこたいが、動くのは口ばかりで声が出ない。

「快斗？」

「俺が…ことう」

歯切れが悪く、上手く舌が回らなかつた。軽く息を吸つて、正確に言い直した。

「俺が、その青子の嫌つてる怪盗キッドだぜ」

「はは……何の例えかしら。抜け駆けしたのを謝つてるつもり……」

青子は、言葉尻をぽかしてじめりの反応を伺つてゐる。俺はほつきり否定しなければならない。

「いや、文字どおり素直に解釈してほしい。伝えられる最後のチャンスかも……だから冗談抜きで言つてんのは分かつてくれ」

最期の、チャンス？

がたん！と受話器から音が届いた。声が遠ざかつたから、携帯を落としたんだろう。

「快斗の馬鹿あ！！」

最後に聞こえたのは、青子が教室を走りぬけ、ドアが閉まる、無情な離別を告げる物音だった。

急に静まり返つた室内で、携帯は誰かに拾われた。

「もしもし。私、紅子よ。青子ちゃん、出でていつちやつたわ。私はあなたを探しに行つたと思うけど……とう何もかも話したのね。よっぽど理由があつたのは察せられるわ。でも、気を付けるのね」

紅子が即座に通話を切つた。それでもしないと、俺からは切れずはずつと座り込んでいたかもしれない。紅子に感謝して、怠惰そうに腕時計を見た。時間にはまだまだ余裕があつた。新一が、上手く切り抜けているのを祈つて、刻々と時間が近づくのを待つていた。

運命の交差するプロローグ

5月5日、決戦の日。

何も聞いてない蘭や平次、和葉達は、必死で行方不明の少年探偵団の行方を捜索していた。特に原因を知ってる服部平次は、罪悪感に溺れる新一を想像して、死なせる訳にはいかないと休みもせずに探し続けていた。組織がどこへいったか、組織の内部事情、アジトの位置すらわからない状態でがむしゃらに探して見つかるなんて、奇跡に近い。でも、何かしないと気が済まなかつた。彼らは、ハイドデパートの周囲500メートル以内をくまなく見回しているところだ。

「手がかり、手がかり……頼む！後生やから何か見つかってくれ」誰にいうでもなく、同じ言葉を繰り返し、繰り返し、呪文のように唱えていた。いかなる事件にも挑戦的かつ思い切った行動で、解決してきた服部が、手探り状態で新一も不在、探偵団は誘拐されて：こんな前代未聞の大事に、誰もが行く末に危険と恐怖と、第六感が告げる、この誘拐犯は殘忍でいつもと違う、といった不安に押しつぶされそうだった。蘭は心を決めて、服部に近づいて、肩をたたいた。一瞬、間が合つて、追及されるのを恐れた表情で振り返った。

「なんや？毛利の姉ちゃん」

「服部くんさ、何も教えてくれないけど、おかしいよね。この事件

服部は、うつ、と息を詰めて目が泳いでもばれないよつこ、若干そらしながら唇の端をあげた笑みを作つた。

「なうにいづてんねや。俺はあの工藤新一と、西の服部東の工藤と

並び称された探偵やで？ほちほち場所に見当も……ついたこりやし

新一の名前を出して信憑性を高めようと謀った服部だつたが、その思惑は蘭の小さな笑い声一つで脆く、あっけなく破られた。

「フフフ……その新一も、この事件にはてこずつてたんだつけ？服部くん推理はできても、嘘は下手ねえ。私だって、毎回新一の推理をボーンと聞いてるんじやないのよ。」

蘭は、ほっと一息ついてあの、探偵が推理をぶつけるときの狡猾さで話を切り出した。

「私が変だと思ったのは3つ……あいつの探偵病がうつったのかしらね……とにかく、一つ目は誘拐のことよ」

彼女の口調は、まさに決死の戦いに向かおうとしている探偵のものだった。そう、ここにいるのは——組織から見れば——少なからず探偵と事件に関わりを持つた共犯者。彼らの警戒する通り、情報に知識、洞察力も持ち合わせたメンバーだった。

「一般的に誘拐の目的とされる身代金の要求とか、脅迫電話がない。犯人の意図があやふやなのよ」

「……」

服部は口をつぐんで、壁を睨んでいた。蘭は、口を割ろうとしない彼に、畳み掛けるように、人差し指と中指を立てた。そろそろ真実が知りたい、彼女は一步も譲らなかつた。

「第一に、誘拐手順。哀ちゃんがさらわれた場所は私たちから近かつたの。犯人は、目立たないバッグなんかに隠したはず。いくら悪

人でも小さな女の子に、平氣でそんな真似できる？私達が、探偵団がトイレにいって帰つてくるのが遅すぎると思い始めた頃だから、せいぜい十分。哀ちゃんが様子を見に行つたのはそれより後つてことは、犯人には時間は5分だけ。全く躊躇しなかつたのね

部屋中に背筋の凍る冷気が立ちこめた。当然、異変には気付いていたのを、蘭がはつきり言葉にしてしまつた。そしてまだやめる気配は……

「三ツ四ツ……」

「待つた！もう、ええで」

服部が手をかざして、蘭の正論と凍り付く空氣を両方制止した。今度は服部の目が、鋭く光つた眼光を取り戻し、同時にそれは仲間全員を巻き込んだ死闘が始まることを暗示していた。

「三ツ四ツは、工藤や。あんたが、通話切られてすぐに掛けなおしたのに、留守番電話。あいつは掛けなおすのを望んでない。電源を入れるまで一度と掛けてくるな、つちゅうことや」

蘭はかすかに頷いて、我慢していた涙を溢れさせた。んなこと、自分にだつてわかつとつたわ……けど……

「新一の事件…なんだよね？」

「まあ、俺もかかわつとるけど、あいつの事件や。工藤は来るなつてこうと思つて」

「次言われたら、回し蹴りで黙らせてやるわよ。仲間外れにするなんて」

「そやか・・・？」

少し空気が和んだ合間に、玲香が蘭のもとにやってきて、素早く囁いた。——私、彼の正体分かるけど、今言つてほしい？それとも、本人から直接説明してもらう？——ためらつたが、好奇心より新一の誠実さを試したい気持ちが勝つた。蘭は自分が後者を選ぶのを他人事のように聞いていた。

玲香は、まだ追跡眼鏡があるのを覚えていた。

運命の文差あるプロローグ（後書き）

一步、また一步、危険へ

服部もまた、新一達と同様に組織破壊の策略を練っていた。彼も新一も同じ事で悩んだが、どちらの方がアイデアを探るのが難しいと言えば、服部だろう。なんてつたって、新一の作戦を邪魔してはいけないのでから。組織と戦いに行くからには、当然新一にも作戦がある。自分達の行動でそれをぶちこわすことになどなつたら大変だ。「どないしよう。何も思いつかへん……」

ひとしきり頭をかきむしめた後、彼は、息抜きしようとハイドペパートから東京の繁華街へと出た。真っ昼間からまばゆいイルミネーションが灯っている。つたく、電気の無駄遣いやわー朝から神経質な服部は舌打ちをして、自動扉を通った。

そしてそこには、正反対の顔色をした仲間がそれぞれに、ひつそり行動していた。まさに、嵐の前の静けさという言葉がぴったりの光景だった。まず和葉は、デパートの隣の本屋で看板にもたれて、コナンの眼鏡をいじっていた。園子は、淋しそうに京極さんと電話していたし、蘭の姿は見当たらなかつた。

彼は、和葉に近寄ると、眼鏡を取り返して、探偵バッジのありかの表示に切り替えた。四つの点が一ヶ所に偏在していて、残りの一点は、周辺をうろうろ動いていた。・の集合している場所は、ハイドデパートから程近いテレビ局。毛利家に迎う際必ず通る道にあることで、服部も、すぐに鉄筋コンクリートの三階建てを思い出した。探偵眼鏡には標高までは載らないため、どのフロアにいるのかは読み取れない。

土地の面積の狭い東京には、ビルとビルの間の隙間は、数十センチだ。そのわずかな間に、窓がある建物は、少ない。隣のビルからはもちろん、窓を破つて浸入できない東京の町並みは、人質を隠すのにもつてこいだ。皮肉に笑いながら、和葉をふりかえると、彼女は

再びレンズを見て呟いた。

「テレビ局……」から10分とかからないといいやね

服部は、言いたいことを察して空を仰いだ。

「まるでオレらをおびき寄せよつとしとるみたいやつちゅう」とか

和葉の表情をうかがつてから、話を続けた。

「裏を返せば・・・オレらにむやうやつて考えることは容易にでき
るわけやな。自分らにわかるよつな挑発奴らに価値があるかどつか

…

「もう一まじりつこしいなあ!じゃあ、なんでわざわざ、人の行き
来の多いテレビ局をえらんだんよ。」

服部は数秒考えてから、結論をまとめた。

「メリットは心理的な面と物理的な面の2つ。和葉、テレビ局に必
要な物はなんや?」

「つーん。やつぱり地デジやろか

服部が呆れた顔をするので、慌てて候補をあげつらねた。

「ええと、まずテレビに、芸能人、ディレクター、カメラ、……」

「ハアー、和葉。今自分のいうた物で引っ掛かるもんあらへんのか

?監視カメラや!至る所に設置されたカメラで、自然にテレビ局全
体を見張れる絶好の場所だ。」

和葉がムツとして反論した。

「だつて、その組織つちゅうのは、盗聴なんて何回もした経験ある
やろ?今じる自然になんて・・・」

服部は、この意見は沈黙で受け流した。組織の内部事情には短時間

では説明しきれないものがある。あの有名な女優とアナウンサー、シャロンとみずなしレナが組織の内部にいるなんて、一時間足らずの説明で信じられるわけないだろ。要するに、テレビ局に顔のきく一人なら、知り合いだといって組織の仲間を潜入させやすい。そして…

「あともう一つ…テレビ局の壁は防音で、中で誰かが叫ぼうが、銃声がなろうが音は聞こえない、やろ？」

服部は、これで話は終わりとばかりに、和葉のそばを離れた。彼が言わなかつた、場所選択の心理的メリットは彼にも脅しをかけるものだつたのだ。「おまえらが必死で探し続けていたものが今は、近くにある。失敗を恐れて逃げ出すのか？そこまで腰抜けどもの集まりだつたのだな」

正直、身震いがした。無言のまま、人の心にこれほどまで圧力をかけられるものなのか。奴らは人間じやない……悪魔のような魂だつた。何もかもめちゃくちゃにさせてたまるかい！

服部は、軽く目を閉じると、まぶたの裏にはびこる組織の仲間の残像を追い払い、しゃんとして目を開いた。こんな会話でも、手がかりになることがあつた。まずは、監視カメラに見つからず建物に侵入するすべを探るのだ。それすら、解法が完成しつつあつた。

考へてもしゃあないやろ？

そして、コナンの眼鏡を持つて前方に見つけた、蘭の後ろ姿を追い掛けた。

「毛利の姉ちゃん！工藤かキッドかはしらんけど、あいつらもテレビ局にむかつとるんや！ほれ、見てみ？」

蘭は一瞬不思議そうに首を傾げのだが、レンズを見るなり目を輝かせた。

「これ、発信機？」

「せやー。こんで、追跡できる」

蘭が嬉しそうな顔を見るうち、だんだん成功するよい気がした。
工藤、無茶すんなよ。まつといふ者がおるんやから。

服部は、眼鏡を蘭に渡してその場に背を向けた。

一歩、また一歩、危険へ（後書き）

永らく投稿しなくて、本当にすみません！

宿題が大変で大変で（涙）

それはそうと、この小説もとうとうクライマックスです。ここまで
読んでください、ありがとうございます。前の章で解決してない謎
は、順を追つて明らかにするのでもう少し待ってください…汗

夏休みも残りわずかですが、なるべく涼しく過ごしたいと思つてい
ます。（笑）

レジスタンスの「到着

米花町二丁目の最北端、ちょうどハイド町との境目に問題のテレビ局はあつた。高層ビルの連なりから外れた場所にあるその建物の周囲は、だいたい同じ高さのマンションや店が並んでいる。左隣はアパート、右隣はコーヒーショップといった具合だ。歩いて10分。たいして時間はかかるないはずだったのに。服部が腕時計を見ると、20分もかけてやっと建物の外観がみえるところまで来ていた。

やれやれ。吹っ切れたつもりが、無意識のうちに敬遠したくなる気持ちがはたらいたらしい。後ろからついてきたのに、注意しなかつた和葉たちにもやはり恐怖感はつきまとつているようだ。

「自分らなんちゅう顔しどんのや。行く前から葬式に出席するよな空気じや後がもたんで？」

緊張を解こうと、大阪人お得意の明るさで話し掛けた。ちらりと蘭をみると、目が合つ。その刹那、服部は失言をいつたことを思い知ることになった。

「新一は、大丈夫なのかな。私、新一がいなくなつたらどうしたらいいか……想像もできないのよ」

どうやら葬式という言葉に反応してしまつた様子なのだ。

「いや、それはもう！全然、大丈夫やで姉ちゃん！その～『冗談やつて』

服部は、先ほど嘘を見破られたばかりなのを思い出して、狼狽を隠すつもりで先へ歩きだした。後ろから和葉の声が飛んできて、申し訳ない思いでいっぱいだ。

「平次！頭おかしくなつたんとちやうへ寒々しい『冗談やめてや！』

平次は、まわりの状況を顧みなかつたことを後悔した。みんな、一人残らずぴりぴりしているのだ。自分はともかく、正体不明の敵に立ち向かおうとしている彼女らならなおのこと。まるで頼みの綱となる細い糸が、両側からプレッシャーをつけてピンとほつていてのをはらはらして眺めてる気分。

「蘭ちゃん、今から援助しにいくんやで大丈夫やに」「そうよ。彼は優秀な探偵なんでしょう？ そんなにやわじやないはずよ」

服部はそんな会話を背後に、神経質に安全確認をせずにいられなかつた。テレビ局手前の角で右折し、何気なく壁にもたれて、携帯を開いた。起動したのはカメラの撮影画面。携帯のカメラ機能には、内側にカメラがついていて、顔写真をとれるものがある。

彼は携帯の角度を変えて、曲がり角から顔を出さずにとおりの人影を確認した。見えても腕と、携帯画面の反射ぐらいだらう。幸いポルシェの姿も狡猾で黒いシリエットも見当たらない。安堵するなりそつと身を退いて、蘭に謝罪すると、先を急ぐ必要があることを伝えた。蘭もうなずき素直に、目の前の鉄筋コンクリートを見据えていた。この壁は、反組織派には強硬な山城に見えた。覚悟が決まつたのだろうか？ 鈍感な彼にとつては、なんとも理解の難しい、読み取りにくい表情だった。

やつとのことで、例の建物に到着した。蘭に付き添う園子を先頭に、そろぞろ入り口へ近づいていく。

「待つた！ 入るのは入り口からやない、監視カメラの見張りをかいぐぐることができる、抜け道を通るんや」

服部は、ついてこいと目配せして、隣のマンションの階段に足をかけていた。

「平次？ 隣からは侵入でけへんつて知つてるやう？ 恋を出入りするのは無理やで」

和葉はそういうて十数センチしかない、普通は路地と呼ばれる隙間

から壁を見上げるが、やはりこの建物も例外ではなかつた。しかし彼女は、じつと見るうち、意味を理解し笑顔になつていた。

「わかつた！ほんなら、すぐいこ！急がば回れつてやつやね？」

すると急に、小走りで平次に追い付くと蘭たちを手招きするのだ。仕方なく園子、玲香、蘭也非常階段を上がつて二階まで移動した。あれ？何か忘れてる。

今朝の案を頭の中で反復していた平次は、ふつと質問した。

「毛利の姉ちゃん、そういうえばコナンの眼鏡、最後に渡したのあんたやつたよな。あれ、どににやつたんや？」

すると、蘭はしづらうきょとんとして、ほほ笑みながら、微妙に含みのある声でこいつ答えた。

「もう、場所はわかつたんだから必要ないでしょ？荷物になるといけないし、置いてきちゃつたよ」

「ええつーどににや？探偵団の場所は分かつても、工藤の行動とか

……」「服部くん、ちょっと疲れてるよ。新一は大丈夫なんでしょう？」

服部は、言葉を失つた。なんかおかしい。数分前に言つてたことは正反対だ。しかも何故、置いてきた？場所を言いたくないみたいだ……

そんな彼を尻目に、蘭は彼を追い越し、和葉と話しにいった。こんな時工藤がいてくれたら、一発で理由がわかるんやろな……

そういづかぬづかに目的地——屋上に足を踏み入れていた。隣はテレビ局である。屋上に監視カメラを設置するような、資金の無駄遣いはしないに決まつている。そして、そのビル同士の間隔は十数センチ。さすがにフェンスがあつたが、またげば楽に踏み越えられる幅なのだ。

「窓がダメなら天井を乗り移ればいいのね！体力も使わないし、レディーのことも考えてくれなんて！」

「あー…？」

園子らしいセリフだ。無視して、フェンスをつかむとよつ、と反対側に着地する。

「間隔は狭くとも落ちたら大怪我やからな。慎重にぐるぐるやぞ」

順番に渡つてくる女子を手助けして、最後に園子が軽い音を立てて飛び移ることに成功した。

ここが最終的に決着のつく敵地。命懸けの頭脳戦の幕開けである。

レジスタンスの到着（後書き）

NEXT HINT (笑)

この蘭の笑いが新一の計画に結び付いてきます！
まだヒントが少ないですが、後の章で気になるところがあれば推理
してみてください。

銀色の瞳

三階建ての屋上に立ち、下を見ると自分達がいたとおりの反対方向にポルシェ356Aの車体が確認できた。車内に人影はない。

どこへ行っているかは考えないようにして、蘭たちに向き直った。この中で、男子も探偵なのも自分だけとあって、服部の役目は責任重大だった。今まで工藤と捜査したときと違うのは、新一が生きてるという事実が明るみになつて、蘭たちの存在までばれたことだ。新聞のインタビューには、自分は探偵だから、となるべく彼女らを協力させないで、探索の目を遠ざけた。でも、ほとんど寝ずに新一が消えた理由を、考えていた玲香を止めるのは不可能だつたし、デパートですれ違つたのならそんな努力も水の泡。

「ここからは何が仕掛けであるか、わからん。いわゆる組織の奴らが蜘蛛の巣を張り巡らしてるとこにこくんや。用心せえや」

再び忠告すると、屋上から降りる出口のノブに手をかけた。階段を降りるたびコツコツと音が響き、その音すら奴らに届くのではないかと懸念したくなるような静寂だつた。

最下段に続くここは、三階のタレント専用飲食店。

「ここに用はないな」

「なあ平次。計画に水をさすみたいで悪いんやけどさ、隠れてこそこそ移動しても、悪い人が見つかるんやろか」

さらに園子も、口を挟んだ。

「それならいつそ、カメラに写つて相手が現われてくれるのを待つたほうが……」

「んな危険な」と……

次の言葉に困つた所で、玲香が助け船を出した。

「迷つてもしょうがないから、とりあえずカメラの映像を監視できる部屋にいかない？？そこならカメラの死角もわかるし、こっちから探せるし」

「……せやな」

行き先が決まり、静寂の階段を降りる。どつきりの企画でも無いかぎり階段にカメラはないはずだ。廊下に出てからどつするか。

二階のフロアは、上よりにぎやかだった。引ききりなしに扉が開いて取材スタッフが出入りしていた。この人込みに紛れていけば、ごまかせるかもしない……服部は、全員に指示を出して、タイミングをはかった。

「日紫佑帆さん！佑帆さん！2日前の怪盗キッドのインタビューですが、何か進展はありましたか！？」

突如一階から声が聞こえてきて、あのニュースキャスターが通り過ぎた。彼女は、いい加減な報道で責任問題を問われるくせに、ユーモアセンスが視聴者に受けて未だにマスコミ業界に残っていた。しめた！服部は和葉の手を引くと、追い掛ける報道陣の凄まじい勢いにのつて上手く一階に入り込んだ。

音響室……樂屋……物置——映像保管室ならびに映像編集室！？

そう、テレビ局では、カメラの情報は映像という名前で保存できるのだ。なんとなしに、壁に寄つて、ノブを回した。よし、鍵はかかるまい。最後に日紫が新一が泥棒の仲間になつたというハツタリを言つのが耳に入った。

——そつと中に入る。室内には名前の通り、聞き覚えのある番組名の張られたDVDがずらつと並んでいた。ここじゃなかつたか・・・

しかし、目指していた部屋は近くにあった。入ってきた位置からして左にあたる方向にもう一つのドアがあったのだ。半開きになつている。早速開けようとした園子を蘭が止めた。

「ねえ、カメラを仕掛けたなら実際に監視する人が必要じゃない！…ということは、中にいる人こそ

「組織の仲間なのね！」

二人は顔を見合せると、少し離れて耳を澄ました。

「え？ 玄関で見かけた？ バカね、カメラには映つてなかつたわよ。その子は別人。わかつた？ 尋問するのも時間の無駄よ、放つておきなさい」

園子が服部を振り返つて、首を傾げた。理由を聞かれても、俺にだつて意味不明や。首をふりかえすと、肩をすくめられた。

部屋の人物は無線を切つたようだ。わずかな音でも聞き漏らすまいと、間を詰める。そいつの視線は映像に戻つたのか、カメラの音量が大きくなつた。

「そこにいるのは、クールキッドかしら？」

突然冷たい声が、飛んできた。

「フフフ、違つたみたいね」

服部は、電気ショックを受けたときのように飛び退いた。ベルモットの銀の瞳が、隙間からのぞいていた。

銀色の瞳（後書き）

ヴェルモットの瞳って何色なんでしょうね。
私は勝手に銀だと思っていますが、灰色にも見えますし、

また感想、評価お願いします。)

扉が開いてしまった。

開けたのは他でもない、ベルモットである。グレイの瞳に、プラチナブロンドのロングヘア、それから黒ずくめの女だった。

「さあて、どうやってここまで来たか、教えてもらおうかしら？」

ベルモットは、懐から拳銃を取り出し服部の額につけた。怖気づく蘭たち。にらみ返して、答えを考えた。別に入ってきた場所くらいいつても、支障はないだろう。それはあくまで、この建物の構造であり、入ってしまった今は知られようが関係ない。だが、答える前にベルモットが質問を重ねた。

「まあ、どこか死角を通り越してきたのかしら。ところでこの映像保管室、私がいた隣の部屋から監視できるの、予想してなかつたようね。大方、監視カメラの映像を映す部屋に、カメラは置かないと思つたんでしょうね」

服部が、小さく舌打ちした。和葉がハラハラしながら、両者を見つめる。だつて大切な幼なじみだ。自分等だつて気付かなかつたんだし……

ベルモットは、拳銃を服部に向けたまま、テレビに近づいてそりそり追い打ちをかけた。

「ほり、この画面が今あなたたちのいる部屋の映像。このボタンで起動したり、角度を変えたりできるのよ」

そういうて、服部に視線を戻して、はゞみで軽く机に手をついた。偶然例のスイッチに手が触れたらしい。ビッ、と機械音がなって、映像が消えた。ベルモットは素知らぬ顔で、踵を返して歩いてきた。もしかして、気付いてない！？いやいや、うちらうちらって音でわかるんやで？

和葉は、画面に目を奪われて固まっていた。それだけで、事態を知らせてくるようなものだつた。

「さてと、わざわざ危険地帯に踏み行つてきてくれたみたいだけど、目的は子供達？」

ベルモットは質問した。しかし平次は、問いただすには反応せず黙つていた。

すると彼女は芝居がかつた仕草で、ため息をついて、尊大な口調で言い放つた。
「今のことが気になつてるんでしょう？私は、敵を追い詰めたことで氣分が高揚し、誤つてカメラの電源を切つた不祥事にも気付けなかつた、のよ」

平次はぽかんとした表情を浮かべた。ベルモットの言つた意味が信じられなかつた。

「ジンへの言い訳はこれで十分ね？最もあの方のお気に入りである私を、彼が責められる訳ないもの」

「……俺達を庇うのか？」

「言つたでしよう。私は、間違えてスイッチを押したの。誰も助けてないわ。まあ、カメラも消えてしまつたことだし、少しは作戦の内容を話したくなつた？」

「先にそんな芝居をした理由を話せや！」

平次は精一杯睨んだが、彼女の口からは、例の聞きなれた常套文句が出てきたのみだった。

'The Secret Makes A Woman Woman'

服部は困つて、和葉を振り返った。和葉の視線は今度は拳銃に当たっていた。もしベルモットがなにか企んでいるとしても、そうでなくとも、拳銃を突き付けられているこの状況。明らかに不利だ。平次は思い切つて話を切り出した。

「俺は、あんたらを倒すためには、不意討ち食らわした方が効率的にええと思ったんや。……そんで、ミスつて捕まつたフリして油断した隙に、戦おうと作戦を練つた。その捕える役回りはある人に頼むことに決めて、探しとつた。卑怯やとは思ったけど、拳銃を使う方がよっぽどアンフェアや、ちゃうか！？」

ベルモットは挑み掛かるようにぶつけられた言葉を、やり過ごしてたたみかけた。

「ある人って言つのは、キール、CIAの諜報員のことね。万が一工藤新一と鉢合わせしても、彼女が新しい人質を取るはずのない事実と、あなたたちの余裕の態度で事情は伝わる」

服部は、眼を見開いた。

「知つとつたんか！？じゃあ……」

「ふふつ、キールは赤井と連絡を取つて上手く逃げたわ。組織の洞

察力も甘く見られたもんね。あなたたちの計画、ざつちにしろ失敗じゃない」

服部は唇をかみしめながらも、新一から聞いていたキールが無事だつたことに安堵した。

ベルモットはそっと銃口を下げた。服部が上目遣いに、新たな裏切り者の表情を伺つた。

「あんた、協力……」

言い終わる前に、ベルモットは隣の部屋に入つてカメラの電源をつけた。

そして安全装置のかかつた銃を、蘭に向けてこいつうのだ。

「子供達とあなたの命が惜しければ、おとなしく着いてくることね

被害者、の驚愕の面持ちは、はたからは恐怖の入り交じった敗北の表情に映つた。

無言（後書き）

ベルモットの言わなかつた理由は、時間があれば私の小説の「決死の戦い」の善悪逆転を読んでください。

宣伝じゃないので、当然読まなくとも話がわかるようにします！でも2回同じことを書くのは、以前読んで頂いた方の迷惑になると思つたからです。（汗）

一作目を放り出して新しい小説を書いた自分が悪いです（笑）

謎の「」だますテレビ局

新一は走っていた。手に細い笛を持っている。時間はあと何分だ？ そう多くないことは確かだ。腕時計は、例のバスジャック事件の影響で止まっている。この作戦に、ビルに侵入するまでの計画や過程など必要なかつた。そういうわけで今、正面玄関についたのだ。臆することなく、自動ドアのかペットを踏む。まあ通常、入り口付近には監視カメラがついている。ここはテレビ局だしな。FBIのメンバーが俺を発見したら、意味不明だと首を振ることだろう。そう、俺は、大きく計画を外れたことをしてゐる。仲間を騙してしまったような罪悪感はあるものの、計画の内容を細かく指示されていし、大まかな目的しか伝えられてない。別に、約束を破つてないさ。それでも、あのマジシャンが望んだ方法ではないことは、明らかだつた。……やっぱりあつた。新一はカメラに向かつて眉を吊り上げてみせると、ポケットの眼鏡をちらつかせた。好奇心でいっぱいの小学生一人が、ちょうど十分前に記者の祐歩が通りかかつたと騒いでいる。これが終わつたらでたらめの記事を改めさせてやるんだ……忙しいテレビ局内では、ひつきりなしに扉が開閉していた。

広場の中央には、カメラを構えた男性の像が立つていた。テレビ界舞台裏では有名なのだろうか……新一はその像の前に設置されるベンチに足を組んで座つた。そして、その場所はやはり監視カメラの正面なのである。「じぼう早く反応がないかと焦る新一だつたが、仕方なくベンチに座ればいやでも目に入る像の人物の説明書きを読んで気を紛らわしていた。五芒星のマークが右上に小さく書かれたカメラを持つた人物の名前は木島秀志。相当変わった性格だつたらしく——それともひねくれているというべきか——仕事でも絶対完璧な人は雇わない。なんでも、自分の才能があるのに生かしきれてない人ばかりを雇うらしい。初めから完璧な人などいない。自分

がそりだといふんならほかのところでもやつていけるだろう！うちに来なくてもいい！」と追い出すのだそうだ。ところが、それが功を奏して——というのもおかしな話——仕事の中で才能を見出し、活力の湧いた社員のお蔭で芸能の業績が急激にアップして結局は彼のためにもなつていいというからこういつのもりなんだろ？「そして、ここにテレビ局にも寄付していただき、世界の情報伝達に大いに貢献——」と締めくくつてあつた。

さて、いつまでもベンチに悠々と座つているわけにもいくまい。目に深に帽子をかぶった中年女性が、俺の隣に座つた。俺は座席一つ隙間を開けてそいつを観察した。まだ敵かどうかはわからない。帽子を深くかぶつてゐるからと云つて、知らない奴なら顔を隠さなくてもいいし、知つてゐる奴なら変装してくるはずだ。誰かを待つてゐるように、時計を見たり地下のテレビ収録が行われてゐる場所へ通じる扉をちらちら見たりしている。案外、ディレクターかも知れない。すこしして左手の背の高い男性がやってきて彼女に向かつて手を振ると、慌てただしく立ち上がつた。なんだ……見当はずれじゃねえか……

「もう、また行方不明になつたかと思いましたよ——」その女性はどこかで聞いたことがあるようなセリフを叫んで去つていった。

「いや、それが地下の階段が撮影で立ち入り禁止だったから、そのまま回り道して別の場所から出なきゃいけなかつたんだよ……ははは

父さんもよく締め切り前に逃亡したな、やつぱりテレビ局の人らしい……苦笑いを浮かべて新一も席を立ち女性が凝視して地下の扉を引いてみた。

「開くじゃねえか……」

気のせいじゃなかつたらしい。入ってきたときを開いていた、たくさんの中のドアのなかに、誰も人が出てこないまましまつたものがあつ

た。その時は、誰かが入った後だと思ったけれど。テレビ局の人間にうそをついて通らせないようにする理由なんて限られてる。ここに組織がいることも考えれば、うその使い道は人質監禁しかないだろう。快斗、ごめんな。

新一は、持っていた笛をポケットにしまつと一人で階段を降りて行つた。

謎の「」だますテレビ局（後書き）

お久しぶりです！

ここで皆さんに聞きたいことがあります。
パソコンを変えたせいかもしませんが、
新着小説に含まれないんです……

何故だかわかる人は教えてください

新しい小説を投稿しても

その扉は案外重かった。俺は、家の近くの市民ホールの扉を思い出した。ここはテレビ局……ということは防音か。誰かが叫び声をあげても絶対に気づかれない場所なわけだ。部屋はテレビ局の機材もなくがらんとしていて、人の気配はなかつた。腕時計の針は、午後一時二十五分を指している。

新一は、小笛を取り出して口をつけ、息を入れた。音はならない。半開きの扉の陰から部屋の中にかけて、かすかに何かがはためく音がした。そのことから、新一は快斗がすでに、ここに、到着していることを知った。

新一は、戦いに行く前の兵士が、これから訪れるであろう過酷な試練を冷静に見据えるように、足を組み、黙つて壁にもたれかけていた。

先ほど入ってきた扉から、今度は別の物音がした。新一の体が、毒の副作用によつて縮められて二年、ジンと新一が仮の姿でも変装でもなく、向き合つていた。ジンは憎々しげな表情を浮かべて、対峙した。

「久しぶりだな、工藤新一。予想はつくだろうが、ここに来た以上、おまえは俺の手の内にある。しかし堂々と入つてきたな……それは度胸か？それとも、ふつ、諦めか。なんにしても、オレの策に刃向う奴には容赦しない。子供であろうともな」

ジンの目が危険なものを含み、長方形の室内の奥を見やつた。ガタン、とブレーカごと電源が落ちあたりが暗闇に沈む。電子音が聞こえ、ジンの視線の先にある番組のVTRを映し出すパネルが光を放つた。

同じく暗い、小部屋に、人影が見えた。監視カメラがじつと少年探偵団を捉えた画面を、送っているのだと分かった。ここでも新一は怯まなかつた。監視役の大柄なウォッカが両手を縛られた灰原に屈みこむように目線を合わせた。

「シェリー、お友達だぜ」

彼はぞつとする笑みを浮かべて、こちらを顎で指し示す動作をした。新一ははつと、ななめの角を見上げて、そこにも監視カメラを確認した。灰原はレンズを隔てて、厳しい表情で新一を見返していた。ウォッカがニヒルに笑う。

「ジンの兄貴、シェリーが怒っています。なんせ、その高校生探偵のお陰で、お先真っ暗、そいつが薬の効能を全て話してしまえば、シェリーも用無し。例の研究をつづけに組織に戻つてくることも出来なくなる。なあ、シェリーお前はそういうやつだろ？？」

「私は、シェリーじゃないわ、もう」

歩美、元太、光彦は状況が呑み込めないまま、組織に圧倒されて動けない。灰原は、唇をかみしめたが、それでも希望を求めるように新一の表情を見つめていた。

「否定するのか？ん？」

灰原が以前と違い、闇から抜け出そうとしていることが理解できないジンは、からかうように笑つた。新一には、灰原が自分の気持ちの上ではもう、シェリーではないといったのだと分かつた。

「ジンの兄貴、その探偵から早く情報を聞き出しちまいましょうぜ。埒があかねえ」

少し考えるような沈黙があつた後、ジンがピストルを構えて銃口を

新一に向かた。灰原の瞳が微妙に揺れ動く。その変化をジンは見逃さなかつた。

「ウォッカ、シェリーは情のない女だと思っていたが……何を血迷つたか。自ら作った薬の研究対象に情が移つたか」

淡々と無機質な声が、機械を通じて灰原に届いた。

「研究対象??ああ、そういうえばそうだったわね。「情」なんていう言葉の意味、あなたには一生わからないでしょう」

彼女はミステリアスな表情で、首を振った。ジンが引き金に指をかけた。

「やめて!」

「どうやら、ご本人から話が聞けそうだ」

冷静に状況を分析してきた新一も、さすがに怒りがこみ上げ、嫌悪感が駆け巡るのを感じた。嬉々として、画面を食い入るように見つめる冷酷なジンを見ていられなくなつた。灰原が、苦しそうにしてため息をついた。

「まずは拘留された部屋から……どうやって脱出したかね、私は……」

…

新一は、そつと時計が三十五分を回るのを視認すると、部屋に入つてくるときに聞こえた合図の音を思い出し、ジンの気がそれている間に小笛をくわえた。息を入れても、やはり音はならない。しかし今度は変化があつた。なにかがはためく音——羽音が部屋の至る所から聞こえてきた瞬間、新一は後ずさつて一気に白い羽毛の渦の中に消えた。快斗は、あらゆる換気扇などから仲間を忍ばせていた。

音のならない笛は、鳩笛の一種だつた。

ジンは殺氣立ち、弾が七発込まれたピストルを乱射した。——ジンは鋭いから、すべての弾を使い切ることはないと思うが、なるべくたくさん、撃たせておけ。知つてつか？おれの鳩は賢いんだぜ？

新一は白い渦の中で右往左往して、居場所を悟られないようにしながら、大砲の様に響く音の回数を数えた。羽が顔をたたくのが、力強く思えた。鳩は幸せの象徴。こんな時でなければ、滅多にない幻想的な風景である。銃声がやんだ。霧が晴れるように、鳩が次々と新一の肩や足元に舞い降りた。

「……六発だな」

新一が、つぶやく。VTR画面が搔き消えた。快斗が、音響室に到達したらしい。脳裏に灰原とウォッカがそれに驚いた表情をするのが、残像として残り、焦点が狙いを定めたジンに合つた。

一瞬の差で弾は新一の左肩をかすめて、すべて反きた。

肩には傷がつき、鳩が何羽か一斉に飛び立つたが、新一の表情は勝ち誇っていた。

「ガキとショリーを逃がしたのか」

新一は気障に肩をすくめた。

タイミングを計ったかのように画面に探偵団の姿が映し出された。しかし、ジンはますます疑いを強めただけだった。彼はトランシーバーに向かつてキャンティに命令した。

「上のガキの様子を見てこい、今すぐだ」

そして新一に向き直り、目を光らせて言い捨てた。

「こんなことで騙されると思うか、あれは停電だった……とか言わないだろ? まあいい、我々が人質に取っているのはガキだけだと思うな」

「誰がいるって言つんだ……」

質問には答えず、ジンは再びトランシーバーに向かつて話し、ヴェルモットを呼び寄せた。やけに時間が経つのが遅い気がする。

五分ほど経つと、扉の取つてが下に傾き、軋んだ。そこには、ヴェルモットとやらに人質に取られた蘭たちがいたのだった。つたく、おめーらは……

新一は眩眩がするのをこらえて、彼らと向き合っていた。

「APT-X4869のことを教えてくるき気なつたか」

この状況で話すのかよ……気がすすまねえけど時間稼ぎにはなる。新一はジンではなく蘭の目を見据え、しぶしぶ話はじめた。

話の途中でキヤンティが入ってきて、部屋の中のものを警戒させた。他は、何にも邪魔されることなく、話は続けられた。
終わりに近づくに連れて、蘭の表情が曇っていくのに耐えながら、なおそちらを向いていた。話し終わり、静かに息をつくとキヤンティがつかつかとジンに歩み寄り、予想どおり、部屋に探偵団はいなかつたことと電源が切れた後に映ったのは、記録してあつた三十分前の映像を再生したものであることを伝えた。

「薬の秘密を知つてることだけが希望だつたのにな、おまえにもう用はない。キールおまえの拳銃をかせ」

ジンが冷たく言い放つと、キールはブーツの踵に仕込んでおいたものを取り出して渡した。

「あばよ、名探偵」

蘭が飛び出していこうとするのが見えた瞬間、ジンがこっちは銃を向けて引き金を引いた…

蘭が、音響室でヴェルモットと話したすぐ後、ジンから連絡が入った。すぐ行かないと怪しまれることは間違いかつた。ジンの病的

今までの疑り深さを、ヴェルモットは十分に承知していた。とりあえず、任務が成功したと報告をしたのだから、そういう演出をしようとここに向かつたはずなのにその後すぐにこんなことになるなんて…

新一の告白を聞いた今残っているの気持ちは、驚愕と一度に一人の人を失つた悲しみばかり。蘭は状況も忘れてヴェルモットを振り払い、駆け出したが、ジンは不自然なことではないとみなしたらしく、興味を失つた表情でヴェルモットを顧みた。

服部たちは、蘭が新一を揺すぶる姿を見ていられなくなり、目を逸らした。ジンがヴェルモットに何か言つのが聞こえても、まとまつた意味を持つた言葉として伝わつてこない。なにも理解できないよ

…

キャンティが突然なにか騒いで、ジンとヴェルモットに伝えていた。恐ろしい声で、キャンティに指示を出し、一人が出ていった。私達の監視でも任せられたのね……考えるのは止めた。

元老金（後書き）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9164k/>

怪盗キッドVS手錠VS工藤新一

2012年1月8日22時58分発行